

タリス王に俺はなる

翔々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファイアーエムブレムをまったく知らないオリ主が、アカネイア大陸のド辺境の島からスタートする話。

これはマルスが生まれるずっと昔、名もなき漁村を守るために戦った男の物語である。

Pixivにも同時投稿中です（同名）

※こちらを読んでおくと理解が深まるかも↓<https://osetu.org/novel/207886/>

※大陸マップはこちら←

目次

幼年期 3歳〜9歳

01. 目覚めた先はド辺境 | 1

02. 時には悩むより動くのも大事 | 7

03. 真珠とツマミと幼馴染 | 12

04. ガルダ海賊の脅威 | 17

05. グルニアのロレンス | 21

06. 初陣海戦・前 | 25

07. 初陣海戦・後 | 30

08. 異才の邂逅 | 39

09. 貸し借りは無しだ | 45

10. 都会に行く人この指とまれ | 49

11. あの海のかなたへ | 54

12. 欲望の町の聖者 | 62

13. パスタ・ラ・ビスタ | 68

14. 上下にきらりと光るたま | 76

15. 暴威失墜 | 81

16. 躰というもの | 86

少年期 11歳

17. 次世代達 | 94

18. 旧き時代の者達 | 101

19. 火種ふたたび | 106

20. ほろびのとき | 113

21. 重き荷を背負いて | 120

22. 窮鼠鬼を為す | 127

2 3.	受け継ぐということ	135
2 4.	家族が増えるよ	142
2 5.	聖者が村にやってくる	146
2 6.	変わるべきはいま	151

幼年期 3歳〜9歳

01. 目覚めた先はド辺境

アカネイア暦532年 モステイン 3歳

物心ついて最初の感想は、つまらない、だった。

前世の記憶なんてものはない。ただ、世の中にはもつとたくさんのお楽しみがあった気がする。手を伸ばしたら適当な道具があって、それで暇を潰す日々。そんな日常があったはずなのだ。

今はもうない。

村長の息子として生まれて、名前はモステイン。家族は親と祖父、お手伝いさんがひとり。これといった特徴のない漁村で、住民は100人がいいところ。南には栄えた港町や国があるらしい。こんな漁村に売れるものといったら塩と魚しかないが。

とにかくお楽しみがなかった。外界との交流がほとんどなく、せいぜいが近くの山の集落と定期的に物々交換するくらいだから、目新しいものがいつさいつ入ってこない。木彫りの玩具もちやちで、3歳の自分でも作れてしまう。

本？ 誰も文字なんて使いません。

遊び？ 追いかけてっこするぐらい。

食事もレパートリーが少ない。顔を真っ赤にしながら石臼ゴリゴリやって不味いパンをこさえるか、漁でとってきた魚を料理したものばかり。俺の家は仮にも村長宅なのでひもじさはそこまで感じないが、それにしたって飽きた。

自然はある。

それしかない。

もう退屈でたまらないので、自由に動けるようになったら走りまわってやりたい。同じくらいに生まれたのが何人かいるので、それつらと遊ぶネタを考えて時間を潰そう。ああ、今日も磯の香りが鼻をさす……。

アカネイア暦533年 モステイン 4歳

【悲報】 村から出られない。

別に呪いとか封印されているわけではない。この村から離れるほど危険に遭いやすいのだそう。凶暴化した野生の獣なんて珍しくもなく、首狩り族じみた集落があつたり、複数の海賊組織に人身売買などで誘拐されるとか。なにそれこわい。

「大人でも危険なんじゃ、間違つても子供だけで出てはならん。さらわれても助けに行けんからな」

日がな一日釣りをしながらフガフガ笑う先代村長の爺様が、珍しく真顔で諭す姿にはなんともいえない凄みがある。俺を含むがきんちよ一同は黙つて頷くしかなかった。

良い機会だからと爺様に頼み、島の文化について教えてもらったところ、やっぱりここは俺の知る世界ではないと判明。

だってみんな髪がカラフルなんでもん。赤とか緑とか青とか、どこかのヴィジュアル系バンドか。黒髪の俺が無個性過ぎて悲しくなるわ。みんな気にしないけど。

ここから南西へと海を越えた先に、アカネイア王国の都パレスがある。アカネイアとはこの大陸の支配者であり、幾つもの国を従えて君臨する『とてつもなく偉い人たち』だそう。

このアカネイア王国、元々はアカネイア聖王国という名前だった。それが40年ほど前、大陸の南西にあるドルーアに暮らしていたメデイウスという竜人族によって王族皆殺しの末に滅亡。唯一生き残つたアルテミス王女と臣下のカルタス伯が婚姻してアカネイア王国となった。

りゆうじんぞく。

何か凄い単語が出てきたので確認したら、間違いではなかった。やっぱりこの世界ってば普通じゃないわ。竜もいるしペガサスもいる。何なら魔法だって存在する。そりやそんなのとやりあつたら滅亡するよ。どうしてそうなった？

竜人族はもともと竜だったのが、知性の劣化による絶滅を回避するために選んだ形態なのだそう。竜としての力を『竜石』に込めて人

の身になった種を竜人族というのだが、覇権国家になったアカネイアの人々は彼らをマムクートと呼んで奴隷扱ひした。

はるか昔、この世界は竜が支配する社会だったという。彼らの築いた高度文明は凄まじく、人間など蟻も同然のちっぽけな存在に過ぎなかった。その頃に抱いた竜への恐怖や劣等感がそうさせたのかもしれない。

だとしてもアカネイアの自業自得である。聞いている内に呆れてしまい、

(アカネイアって馬鹿じゃないの?)

そう思った俺は悪くないはずだ。身の程も知らずに増長して、竜の逆鱗に触れる方が間違いだらう。売られた喧嘩なら話は別だが。

ともあれ、アカネイアは復興した。メデイウスとの戦争で功績を挙げた勇者達はそれぞれが国を興し、王都パレスを守るように配置される。

北にオレルアン。

西にグルニアとアリテイア。

南西にマケドニア。

東が放置されてね? と疑問なのだが、パレスの東には難攻不落のデイル要塞と『いずれの勢力にも加担しない』と掲げる自由港湾都市ワールンが存在する。パレスの脅威になるような国家は生まれないわけだ。

で、俺の生まれた島はどこかというところ、ワールンの港から北上した先に広がるガルダ海、その入口の右にある。

島の面積はかなり広い。原住民からなる集落と、アカネイアから流刑地に送られる途中で漂流した罪人達が祖先の部族、海賊がそのまま巢食ったようなアジト、あからさまに怪しげな宗教組織の拠点……:大少数えたら40超の部族が生活しているとか。

それぞれの部族について話す爺様の前で、俺はワールンへの興味が止まらなかった。聞けばアカネイアのどんな都市よりも栄えていて、他の大陸とも貿易が行われているという。それだけの町なら、ここにはない娯楽や食事があるだろう。

期待に胸をふくらませる俺を見た爺様が、

「ほっほっ。やはりお前もかい」

わかつているぞ、と言いたげな顔になった。村人の誰もが俺と同じような夢を抱くらしい。そして、この島からワーレンに行くのは不可能だと理解させられるそう。

まず、ガルダ海からワーレンまで渡るための船が造れない。漁に出るための小舟では水も食料も足りず、波によってはバラバラに砕けてしまう。そもそもワーレンの船を狙う海賊がうろつくエリアなのだから、小舟ではあつさり捕まる。

航路もまずい。ワーレンへの航海中、必ずペラティ海を通るのだが、この海を統べるペラティ王国が問題だった。ここはアカネイア大陸の流刑地であり、大陸中の荒くれ者が生活する最悪の環境である。当然ながら海賊もいる。個人がどうこうできる相手ではない。

つまり、まともにワーレンへ行く手段はないのだ。奴隷になるのを前提に身売りするぐらいだろうが、当然そんな真似はしたくない。善良なワーレンの商家が通りがかったところに頼み込んで連れていってもらおう？ 宝くじの特等を引くより低確率だ。

すっかり気落ちしてしまっただが、それでも久々に面白い話を聞いて楽しかった。やっぱり娯楽がないよ、この島は。生きるか死ぬかの生活だから当然とはいえ、限度つてもものがある。なんとかしたいなあ。

とりあえず、海賊に襲われても戦えるようになりたいです。奴隷とかノーセンキュー。

アカネイア暦534年 モステイン 5歳

どうしてこの村が貧乏なのか、原因がわかってきた。外からの刺激が無いせいだ。

何世代も定住してきたおかげで漁もするし、塩もとれる。でも、それで止まってしまった。発展がない。外部との交流が少なすぎて技術の改良もされず、食材も変わり映えのしようがない。どこの集落も似たようなものだろう。

一番の問題は、それが当然だと村人が思考停止して疑問を持っていないことだ。だってどうしようもないじゃないか。何もできないなら、今まで通りに生きるしかない。父や祖父や曾祖父がやってきたように自分も生きて何が悪いのか。さあ、今日も海の恵みに感謝を捧げよう――。

いや、死ぬわ。

知ってるからな。『緩やかな死』ってやつじゃんそれ。なに？ 俺もそうやって生きて、お見合いとかで嫁さんもらって、生まれた子供にこの退屈極まりない生活を強要しなきゃならんの？

ダメだろ。

それはダメだろう。少なくとも俺は嫌だ。今ですらギブアップしなくなる退屈さだというのに、これを一生とか気が狂ってしまふ。

かといって、村を出るかといわれたらノーだ。村長のひとり息子として生まれた以上は離れようとは思わんし、なついてくる子供達のがたれ死ぬような末路にはしたくない。暇すぎる村だが、それでも自分から捨てるには惜しいのだ。

つまり、次期村長としての俺の仕事は、この村を納得がいくまで改善することになる。正直何からやればいいのか、どうしたものかも浮かばない。思いついた手を片っ端から試すしかないだろう。

とりあえず真っ先にやったのは、トイレスペースに炭をぶち込んでの消臭だった。臭いのは嫌なんじゃ！

坊ちやんがイタズラした、とか最初は叱られたが、実際に汚臭が消えたのでみんな真似するようになった。真っ先に爺様が

「ワシが教えた」

と言い張ったのは見て見ぬふりをする。

なんだかんだで爺様の話は面白いのだ。若い頃はパレスに住んでいたが、身に覚えのない窃盗の罪でペラテイ行きの船に乗せられたのが難破して漂流、運良く部族の娘に救助されてそのまま居着いたのだという。

本当かどうかはともかく、釣りをしながらそんな話をしてくれる古

老の存在は子供達の暇つぶしに助かっている。これからもよろしく、お爺ちゃん。

02. 時には悩むより動くのも大事

アカネイア暦535年 モステイン 6歳（a）

俺がこの村を変える！ と誓ったのはいいが、いまの俺にできることは少ない。それでも動かずにはいられなくて、村の現状をつぶさに見ながら、少しでも改善できそうな案をひり出そうとうんうん唸る。坊ちゃん便所はあつちだぞ、とかいわれるのは気にしない。

そうして観察するたびに、村の大人達の暮らしを見るたびに、このままではまずいと焦ってしまう。そんな心とは裏腹に、ロクな案が出てこない。

爺様に連れられた釣りで水平線を眺めては、ため息が出る。

村の入り口の看板を見つめたまま、石のように動かなくなる。

あまりに悩むものだから、そのまま村から出ていくんじゃないかと大人達が心配したらしい。漁に出てみないか、と誘われた。

漁。

俺が、漁？

6歳じゃ大した力にもなれない、子供が無理するな、と制止する声の中。朝一番の舟に乗せてくれるよう、土下座も辞さない覚悟で志願する俺がいた。自分でも不思議なくらい興奮している。

朝日も昇らない内から家を出て、舟に積み込む投網や釣竿、銚などの仕事道具をひとつずつ確認。海の男たちに混ざって懸命に櫂を漕いで、漕いで、ひたすら漕ぐ。そして目的のスポットに到着したら、ウキの代わりのツボをセット。エサのミミズやネリエサをバラ撒いたら、

投網を思い切りぶん投げる！

子供だから全然距離が出ない。大人達がニヤニヤ笑って、より広く、より遠くに投げて見せる。大人と子供の力の差だ。敵^{かな}うわけがない。

胸の奥から熱いものが込み上げてくる。

涙を流す俺の頭が、あやすようにポンポン叩かれる。悔しさで泣き出したと思われたらしい。違う、そうじゃない。

嬉しい。

楽しい。

懐かしい。

確信した。俺の前世は漁師だったんだ。はつきりした記憶なんてないが、きつと天職だったに違いない。

だって楽しいんだ。舟に乗って揺られるだけでも快適だし、釣竿がぐんと引かれる感覚もたまらない。苦勞して投げ込んだ網が失敗だったときの喪失感も、次に活かす一歩になる。

これだ。

俺は、これをやるんだ。

夢中になって飛び回っていたら、あつという間に太陽が真上にあつた。大人達も俺の浮かれっぷりに呆れたらしい。途中から指導の手も止めてしまい、俺が海に落ちてしまわないかハラハラのし通しだった。実際、村に戻る頃には疲れ果てて、危うく舟から滑り落ちそうになったのを支えられたので感謝しかない。

「坊ちゃん、これで初日って本当か？」

「船酔いもしねえんだものな。漁師になるために生まれてきたみてえな子だわ」

「村長も喜んで。跡取りの心配はねえな」

舟の真ん中で収穫した獲物と一緒に寝かされながら、村へと戻っていく。今日の漁は店じまいで、いつもより遅い昼飯をみんなで食べるのだ。疲れきって起きるのも億劫だが、それでも昼飯を食わねばならぬ。俺がとった獲物もあるのだから。

陸に着くなり片付けを始める男達と、収穫を分類する女達。今日は貝が多かった。さすがに慣れたもので、指を挟まれることなくアサリやシジミ、ミルにアワビなどが分けられていく。

積み上がっていく貝の山の中でひとつ、太陽に照らされて光る何かに気づいた俺がボーツと眺めていると、釣竿片手に爺様が寄ってきた。

「怪我はしとらんか？」

「全然。楽しかったよ爺ちゃん」

「ほうほう。では、爺からの贈り物といくか」

萎びた指で貝が開かれる。ほほっ、と声が漏れた。

「とびきりじやな」

「？」

「真珠じやよ。ここにあってても金にはならんが、おなごにあげるにや
丁度ええ。食つちやならんぞ」

掌で包むように珠玉を渡される。来た時と同じように、釣竿を揺らしながら去っていく爺様の背中を見ながら、俺は呆然と立ち尽くした。

あるじゃん、売るのが。

おかしなのが生まれてきたもんだ。老人がくつくつと笑う。

思えば赤ん坊の頃から奇妙だった。泣いて、笑って、むずがって。普通の赤ん坊と同じなのに、回数がずいぶんと少なかった。手がかからなくて助かります、と息子の嫁はいうが、舅としては不安にさせられたものだ。こんな大人しきで海の男になれるのか、村長として村をまとめていけるのか。

認識が変わったのは、家の外に出始めた頃だった。いつの間にか三人、四人と子供達が孫について回るのだ。村長の息子と紹介したわけではないし、言い含めさせた覚えもない。自然とそうなっていたという。

息子の村長は良い傾向だと喜んでいた。順調に年を重ねれば、次の村長はあの子になり、同世代の幼馴染が手足として働く事になる。手足の数が多ければ多いほど、村の連帯感は大きくなるのだ。この閉鎖的な環境で村八分など起こっては致命傷になりかねない。何事もないといいね、と息子夫婦は笑っていた。

(そりゃあ無理な願いになるぞ、お前ら)

予感が確信に変わったのは、アカネイアの歴史について聞かせた時だった。大陸に生きる誰もが子守歌に育つ物語。竜が支配し、人がそれに代わろうとして衝突した戦争譚。悲運の王女アルテミスと、彼女を助ける貴族カルタス伯に英雄アンリの武勇伝。集まった子供達が

胸を躍らせ、目をきらきら光らせて続きをせがむ中で。

あの子だけが冷えきっていた。

人が竜に勝ったという華々しさ。その裏に流された血と、戦争を引き起こした人間の傲慢。あの目は間違いなく見透かしていた。虚飾にごまかさねず、愚かなアカネイアの失態を蔑んでいたのだ。

(ワシとしてはそっちの方が良いがの)

老人にとってのアカネイアは憎むべき敵であり、人生を狂わせた黒幕だった。

昔、パレスで一番の職人になろうと修行中の青年が、身に覚えのない罪を着せられ、ペラティの囚人船に押し込められた。それまで親しく接していた人々から寄せられる、冷たく凍り付いた視線。投げつけられ、壊される自分の作品の数々。失意のままに乗せられた船で、実行犯から真相を告げられた。

商売敵の職人に賄賂を贈られたアカネイアの貴族が、奴隷を雇って宝石を盗ませたのだ。その宝石を加工したのは商売敵その人であり、名声と技術に嫉妬した青年が盗んで売り払ったと、こじつけにも程がある動機を捏造された。抗弁する機会も与えられず、町中を引きずり回された末に投獄され、受けた覚えのない裁判で流罪になった。

よくもやってくれたな、と激昂する自分を、使い捨てられた男が笑いながら指さした。

「初めから終わってるんだよ」

「俺は生まれてからずっと奴隷だった。お前だつてしがらない職人でしかなかった。遅かれ早かれこうなっていたのさ。罪もないのに地獄へ送られるなんて珍しくもない。どうしてかわかるか、ええ？」

「貴族じゃないからさ！ 貴族じゃなかったら人じゃない。俺達は人じゃないんだよ。だからこうなったんだ。こうなる運命だったのさ！ はは、はははははははははは！！」

怒りよりも恐怖が上回った。男の首に回した手が離れ、呆然と見つめる。男はずっと笑っていた。正気を失い、涙と鼻水と涎をまき散らして、汚物にまみれた床を転げまわっていた。他の囚人も止めようとしない。船員も、兵士も、みんな同じだった。光を失った瞳で、何

もない空間を見つめたまま、身じろぎ一つしなかった。
その光景を、今でも忘れはしない。

……人生とはわからないものだ。どういうわけだか命を拾い、奇妙
奇天烈な孫まで授かってしまった。生い先は短いにしても、残せるも
のはあるかもしれない。このまま釣りでもしながら死んでやろうと
決めていたのに、なんと気まぐれな爺だろう。

さしあたって、真珠の鑑定でも仕込んでやろうか。保管も教えなく
てはなるまい。使っていなかった頭のどこかが、音を立ててブンブン
唸りだしている。

久々に酒が飲みたくなった。

03. 真珠とツマミと幼馴染

アカネイア暦535年 モステイン 6歳 (b)

うちの村では真珠がとれる。シヨツキングな事実には仰天した俺だったが、村人のみんなに聞いたところ、

「たまに見つかる綺麗な石だよ。捨てるか飾りにするけど。それが？」

お前はなにをいってるんだ？ みたいな顔をされた。

俺が見つけたデカイのを見ても、ほとんど興味無し。若い女性陣からは装飾に使わせてとねだらされたが、男性陣にいたっては綺麗だけで腹の足しにもならない、食事に混ぜて歯が砕けそうになる、と邪魔物扱い。この意識は何なのだろうか。少し悩んだが、理解してみれば簡単だった。

誰も価値がわからないのだ。

宝石を高価なもの、貴重品だと知っていたら、手放そうとはしないだろう。少なくとも大事に扱うはずである。間違ってもその辺に投げ捨てたりはしない。

だが、この村には金銭という概念がない。貨幣経済を理解する下地もない。アカネイアの通貨があっても、石ころ未満の扱いをされるに違いない。だって食えないもの。

いくら宝石が転がっていようと、使う機会がなければ何の意味もない。正しく宝の持ち腐れである。誰もそれに気づかないのだから。

……というような話で、爺様と盛り上がった。王都パレスからの漂流者である爺様は、当然ながら宝石の価値を理解している。ここで無駄に捨てられているのも承知している。どうして止めないのか、知らせないのか。

「危険じゃからな」

顎髭をいじりながらの言葉だった。

「賢いお前ならわかつとるじやろう。この村には何も無い——が、そのおかげで助かることもある。もし村で真珠がとれると広まれば、ガルダ海賊のような外道どもが次々と押し寄せ、あつという間に滅び

よう。何の価値もないから狙われない。『無価値の価値』じゃな」

村のまとめ役として生きた老人は、そんな未来を避けるために、あらゆる手段を模索してきたのだろう。まさに薰陶だった。

それにしたって、何も考えずに捨てるのはまずいのではなからうか。何かのきっかけで流出して、外にバレる危険だってある。

そういうと、爺様がニヤリと笑って床下を指さす。底がやたらと分厚い、頑丈そうな木箱が幾つかあった。開けてみるといわれて従う。

まばゆいばかりの光沢が視界を埋め尽くした。

「ワシが管理しておるのよ。何のために毎日海に出とると思う？ 道すがら拾って集めるのさ、ケツケツケ」

末長く生きてください、お爺ちゃん。

何はともあれ、ワーレン商家との交渉材料はクリアとなった。果たしてその時が来るのかという問題は棚上げのままだが、こればかりは運しかない。待つだけの身はこれだから辛い。

今の自分にできるのは、村の改善案をどうにか思いつくことと、海の男にふさわしいスペックになることだ。漁ができなきや話にならぬ。ゆくゆくは海女さん級の素潜りを披露してみせる。銚とか好きだよ、俺。

……それはそれとして、真珠は捨てずに村で管理できないか親父に相談する。まずいでしょ、色々。

アカネイア暦535年 モステイン 6歳（c）

海……良い……。

海……サイツコー……！

毎日が楽しい。獲物が獲れても獲れなくても充実してる。収穫がなかったら村の死活問題なんだけど、今だけは許してほしい。俺、このために生きてる……！

何が良いつて、半人前でも漁に出る時点で男手として数えられるから、食い扶持がたっぷりもらえるのだ。当然のように全部食う。俺が手にかけて海の恵みなのだから、責任を持って胃袋に取り込まずしてどうする。

その日も投網をせっせと回収していたら、同舟の大人が妙な悲鳴をあげるのが聞こえた。なんだどうした。

「デビルフィッシュだ！ ああ、ついてねえ！」

腕に巻きついた大ぶりのタコを、思いつきり舟縁に叩きつける。ベチャツと船板に落ちたその頭部を憎々しげに睨んだ。

むんず、と掴む。

「おい、気をつけない坊ちゃん。今みたいに引っ付かれるぞ」

「平気だよ。これ、食わないの？」

「悪魔を食う奴がいるか！」

食わんのか。

やっぱりというか何というか、見た目や偏見、迷信で避けられる食材が結構多い。おまけにタコは苦労して仕掛けた投網も食いちぎってしまうので、漁師の悩みの種でもある。

ならばやってみせましょう。

「爺様、今日のつまみはどう？ 美味しい？」

「なかなかイケるな。コリコリとした食感に、ピリリと走る苦味が……こんな食材があったかの？」

「水場の草とデビルフィッシュ」

ブフウツ！ と盛大に噴かれた。

お前はなんて物を食わせるのだ。

悪魔の子め。

それでも海の男か。

などと罵られたが、美味かっただろ？ と聞いたら、苦虫を噛み潰したような顔で頷いていた。

正直になりたまえ、吞兵衛ならタコワサの魅力がわかるだろう。おまけに調味料が塩ぐらいしかなないこの村で、ワサビのツンとくる刺激なんて初めて味わったに違いない。炭酸やトウガラシもどこかにないか探してみよう。ワールンならありそうだが。

結局、爺様が口コミになってタコワサは広まり、だったら別の料理も作れるんじゃない？ と研究が進んだ。そうそう、こういうのでいいんだよこういうので。

俺のやったことなんて酒のツマミを一つ作っただけだが、村を支える女達が新しい食材を前にああでもない、こうでもないと言行錯誤するようになった。みんな口にはしないだけで、現状への不満や危機感があったのだろう。それがわかっただけでも十分だ。

……ああ、羨ましいなあ、お酒。さすがに6歳じゃ飲ませてもらえないので、幼馴染と相撲でもして遊ぼう。俺が教えたのに俺より強くなりやがったし、負けてられん！

(すつごいなあ、こいつ)

マックスは子供心にそう思う。

(おれとおなじ年なのに、なんでこんなにすごいんだろ)

『スモウ』をとりながら考える。相手は一生懸命に踏ん張って堪えている。

モステイン。村長の息子であり、次の村長になる予定の幼馴染。村一番の漁師である父の息子として生まれたマックスにとっては、支えるべき上司になるらしい。父がいうのだから、きつとそうなるのだろう。よくわからないがモステインなら大歓迎だ。

モステインは子供達のヒーローだった。追いかけてこにも飽き飽きしていたマックス達に『スモウ』を教えたのをきっかけに、貝殻を使ったりバース(オセロ)、ジョーカー(だるまさんがころんだ)、スパイク(貝を使った缶蹴り)と、まったく新しい遊びを教えてくれる。今でもそうだ。どれだけの遊びを知っているのだろう。

気がつくと、モステインは大人とも交流するようになっていた。きっかけは村一番の年寄りの先代村長、モステインの祖父の話をもんなで囲んで聞いてからだろう。恐ろしい竜をバツサバツサと斬り伏せる勇者と、彼に恋する王女の悲恋。みんながワクワクしている中で、モステインだけが落ち着いていた。もつと別の何かを考えていたんだろうか。

大人に混ざって毎日漁に出るようになってから、モステインは明らかに力強くなった。前までは自分の方が強かったのに、今では同じか、それ以上の差を感じる。

単純な力の問題ではない。自分のまだ知らない、よくわからない何かを理解して、それでモステインは強くなったのだ。きつとそうに違いない。

悔しくなつて、ついギャフンと言わせたくなつた。密着させた足からわざと力を抜いて体勢を崩す。ガクン、と揺らいだ隙間に膝を滑り込ませた瞬間、あつという声が聞こえた。気づいたようだがもう遅い。重心を崩された軸足をあつさり刈つて、砂浜に転がしてやった。「あーっ！　また負けたー！」

ペツペツ、と口の砂を吐きながら起き上がった幼馴染の横に座る。十本勝負で7対3。さすがに疲れた。

「海に出て鍛えられたから、マックスにも勝てると思つたのになあ」

「コツがあるのさ。力じゃなくて技だよ、モステイン」

「教えた俺より強いってどういうことなの……おかしくねえ？　なら俺に教えてくれてもよくねえ？」

「ぜったいやダ」

「なーんでえ？」

そんなすつげえ奴相手に、たったひとつでも負けられないものがある。それだけで、自分も凄い奴になつたようで、誇らしい気分になれる。

マックスの口が裂けてもいえない秘密だつた。

04. ガルダ海賊の脅威

船が燃える。射かけられた火矢が油樽を巻き込んで爆発したためだ。黒煙をあげながら燃え広がる炎に吞まれ、あるいはパニックになつて右往左往する護衛を見て、ハイエナ達がいっせいに舌なめずりをする。

「いくぞお前ら、略奪の時間だ!!」

「ヒヤッハーハーハー!!」

潮の流れは読み切っている。黒地にドクロを描いた旗の海賊船が三隻、ぐるりと商船を取り囲むやいなや、命知らず達が雄たけびをあげて乗り込んでいく。明らかに素人ではない。何度も繰り返すことで習熟した、船上特有の動作だった。

ガルダ海賊。

構成員はほとんどが犯罪者であり、アカネイアからの追手を逃れて東方へと流れついた悪漢達のなれの果て。数百年の間に海賊村として部族を形成した一団もあるが、たいていは新顔である。

一年後の生存率は三割を下回るかわりに、生き残ったごろつきは凄腕に成長する。彼らは自身のボスがそうであったように船を持ち、仲間・子分を集めて海賊集団を結成する。その活動は多岐に渡るが、今おこなわれているのは一目瞭然だった。

商船の襲撃である。

498年の解放戦争終結から38年の月日が経過し、大陸は平穏を取り戻した。しかし、当時の混乱から回復しないどころか、悪化したエリアも存在する。アカネイア王都パレスから東北にあたるペラティ海近辺である。

アカネイア大陸の囚人をまとめて流刑地ペラティへと船で移送するルート上、どうしても治安が悪い。なにより一度滅亡したアカネイア王国は金が足りず、海軍にかける予算は削られる一方。おまけにアカネイア貴族が中抜きと賄賂で搾取するので、さらに乏しくなる。金が必要れば人員はおろか装備も維持できず、治安が回復するわけもなかった。

必然、ここが海賊達の狩場となる。

「ご主人様、逃げ——！」

「邪魔すんじゃねえや！」

健気にも盾になろうとした従者が、たつぷりと血脂のついた斧で剣ごと両断される。派手に嘔きあがった血しぶきを浴びた頭目の姿は殺人鬼も同然だった。顔を埋め尽くす髭と切り傷の筋、そのすべてに血が走り、絵の中の悪魔が這い出てきたようにしか見えない。少なくとも、足元で震え上がる商人には。

「船から飛びやあ助かったかもしれないねえだろうに。ま、その凶体じゃ無理か。王都でさんざん美味しいものを食ってきたのかい、ええ？」

「ひいっ！」

「積み荷はしつかり見たぜ。サムスーフ山の毛皮にロウソク、マケドニアの竜の牙、おまけに宝石ときたもんだ。ガッツリ稼ごうと奮発したってところか……全部おじやんだがな、ハッ!!」

商船の主の首筋に刃筋をあてがいながら、頭目は笑った。

「せいぜい地獄で広めてきやがれ！ ガルダ海賊バースズ様の名前をなあ!!」

胴体から斬り飛ばされた首が飛ぶと同時に、野太い歓声があがる。今日の稼ぎでしばらくは彼らも大人しくなるだろう。その間だけ、他の商家は少しだけ安全に交易ができる。明日は我が身、と誰もが理解していた。

アカネイア暦536年 モステイン 7歳

「そんなことがあったんだって。こわいなー」

ねー。こわいねー。たいへんだー。

こんばんは、7歳になったモステインです。現在わが村は南の部族との定期交流会を開き、夜になった今は宴会中。大人たちが貴重なアルコールとお互いの収穫した自然の恵みでドンチャン騒いでいる間、俺たち年少組は子供なりに親交を深めあっていた。昼間に俺が教えたとセロ・相撲・だるまさんが転んだなどたつぷり遊んだので、夜はおしやべりに花を咲かせるのだ。

たかがおしゃべりと侮ってはいけない。南の部族は俺たちの村より活動範囲が広く、子供であっても情報量がパンクするぐらいに豊富である。さすがにワーレンとの交易ルートはないそうだが、位置的に近いのもあり、ペラティ海でたむろする海賊の戦闘をしばしば目撃するのだとか。

で、つい先日村の見張り役が見届けた襲撃事件を伝えてもらったのだが……いや、怖いわ。相手の船も立派な造りをしていたそうだが、あつけなく燃えあがって乗り込まれたらしい。そうして手際よく積み荷が運び出された後で、商家の主らしい男の首がポーンと宙を飛んでいくのも見たと。

「それをやった海賊の頭つてのが、これまたすごい面だったんだってさ。遠くからでも見えるくらいモジャモジャの髭で顔中が傷だらけ。まわりの部下もおっかなびっくり従ってるみたいだつて。そんなの相手にしたくないよなー」

「うええええ……」

マックスが悲鳴をあげている。そりや怖いわな、ペラティ海からこっちのガルダ海に来てもおかしくないんだから。そんな海に出なきゃいけない漁師はたまったもんじゃない。アカネイアの海軍が取り締まってくれないかな。期待するだけ無駄だろうけど。

俺たちに身振り手振りも交えて解説する少年はタームくん8歳。南の部族の跡取りで、ついこないだ妹ができたので兄として張り切っているんだとか。良かったね、守ってやれよお兄ちゃん。相撲も教えだが、荒っぽいことが苦手だといって乗り気ではなさそうだった。大丈夫かなこの子。そんなんでこの世界で生きていけるかしらん？

交流会が終わって数日、村もすっかり落ち着いたら頃に爺様と話してみた。

「どうしてこっちに海賊がないのか、じゃと？」

正確には、いることはいろのだが少数グループしかおらず、村の屈強な漁師達が見つけ次第排除しているのだ。俺もマックスも参加させられたので実態は知っている。殺しの童貞卒業？ 吐いたが初日だけだった。つくづく過酷だよ、この世の中。

「そりや簡単じゃ。いくら海賊でも、実入りの多い方を選ぶに決まるところからの」

「安全なここより、ワーレンに通う商家の船を狙ったほうがいいってことか」

「ワシもパレスを離れて久しいが……南の部族の話からするに、アカネイアの海軍はろくに仕事をしとらんようじゃ。ガルダの海賊どもがペラティまで出張って帰らんぐらいにはの」

爺様が呆れた様子であご髭をいじっている。

「南が荒れている間は、ここが襲われる危険はないってわけだ」

「酷なようじゃがな。それが正しい」

海賊が好き放題にのさばっている状況はむかつくことこの上ない。が、俺にも、この村にもできることはない。

今はただ、待つだけだ。南の海からのきつかけを。

「ところでモステイン、新しいツمامミはないのか？ 『タコワサ』が南の連中にも受けたから、そろそろ次が欲しいんじゃないが」

「イカの塩辛の香草和えとか」

「詳しく」

……ワーレンにいけたら、小麦粉をたっぷり仕入れたい。居酒屋のツمامミだけじゃなくてさ、もつとパスタとか作れないものか。さすがに体こわすぞ爺様。

05. グルニアのロレンス

アカネイア暦537年 モステイン 8歳

7歳までは神のうち、という言葉がある。

7歳までに死んだのなら、人間にはどうしようもない天命だったと思え。どんなに大切であっても、その子は自分の子ではなく、神様の子を預かっていたに過ぎない。元の場所に返すときが来たのだ、と。

もはやうろ覚えの前世では、いやそんな言葉は存在しなかった、とか議論になっていそうだが、あいにくとこっちの世界では存在する。口にこそしないが、暗黙の了解として認識されている。それほど厳しい環境だからだ。

ろくに医学や食料の無かった時代、免疫力のない子どもの生存率は極めて低かった。なんでもない風邪や食あたりをきっかけに死んでしまう。実際、これまでに何人かの幼馴染が亡くなってしまった。そうした死因も長じるにつれて減っていく、成長期を迎える頃には無事に生きていく準備が整ったとみなされる。7歳という年齢はひとつの節目なのだ。

そして、どうにか死なずに8歳を迎えた俺にも変化がおとずれた。

めっちゃ背が伸びてきたのだ。

6歳から漁に出て運動し、毎日たらふく飯が食えるようになったおかげか。縦にも横にもたくましくなってきた。コツも覚えて一人でやすい舟を操れるようにもなったし、自前の装備もメンテナンスする。爺様達からも一足早めに大人の仲間入りを認められた。

大人といっても、やることはまったく変わらない。これまで通り漁に出て、海賊がいないか巡回して、村長である親父の仕事を手伝う。違うのは、一人前として扱われるぐらいか。

なお、マックスも数ヶ月後には俺に続いて大人入りになる。こいつは漁も上手いが、とうとう相撲で村一番の腕前に君臨してしまった。まさか児童が大男を担ぎ上げるなんて光景が見られるとは。

ガタイも俺とどっこいどっこいだし、ふたりで並ぶと兄弟のように見られる。顔はまったく似てないのに。どっちがイケメンになりそ

うかといったら……うん、マックスだわ。なんとなくメガネが似合いそう。俺より要領良く立ち回る時があるし、頭が良いんだな。学校とかあつたら優等生だったろうに。

学校……いかん、久しぶりに文明的な言葉を思い出してしまった。

2年前から始まった真珠の一括管理により、家の床下から倉庫へと移した木箱の数はかなり増えた。ミルにアコヤ、白蝶、黒蝶、アワビと、サイズも形もそれぞれ違う。俺の半端に残った現代感覚でも、「これだけあつたら相当な金になる」

ひと目でわかるほどには宝の山だ。商談のカードには十分だろう。その点は爺様も太鼓判を押してくれた。

こちらの準備はとつくに終わっている。なのに――。

「来ないな、船」

「荒れに荒れとる南を越えてまで、寂れた北に来るのはおらん。せいぜい縄張り争いに負けた海賊じゃ」

ですよねー。

わかつてはいるのだ。大陸一の港湾都市でしのぎを削る商家が、だっ広いだけの海にわざわざ来る用事なんてあるのかって。海賊に襲われて逃走中が関の山だろう。

気の遠くなるような、運まかせの計画だと覚悟はしている。それでも、いつその時が来てもいいようにと準備だけは欠かさない。たとえ無駄に終わるとしても、何もしないよりはマシだから。

だとしても――心が折れそうになる。

「あと何回陽が沈むまで、俺たちは待ち続けるんだろう、爺様？」

俺の何十倍も無力感を味わってきた爺様は、何もいわなかった。優しく俺の背中をさすりながら、黙って海のかなたを見つめていた。ここ数年のガルダ海は平穏で、海賊らしき船は見あたらない。

ペラティ海の狩場が落ち着くまで、あと何年保ってくれる？

大小さまざまな船がひしめくワーレンの船着き場へ、また一隻の商船が錨をつないだ。岸へと渡されたタラップから続々と積み荷を担いだ船員が降りていく。航海中に何度も襲撃があつたのだろう、彼ら

の服には大きさまざまな傷があつた。危険な船旅から生還した喜びにひたる間もなく勤勉に働く姿は、明らかに統率された集団の動きだ。

甲板から街並みを眺める少年に、身なりの良い中年の男が並ぶ。

「マケドニア経由での船旅、お疲れ様でした。ロレンス様」

「トワイス殿。こちらこそ、お力になれたかどうか」

「聞いております。相当に激しいものだったと」

商船の持ち主であるトワイスが手すりに目をやった。火にあぶられた焦げ跡は数知れず、ドス黒い血のこびりついた箇所が幾つもある。気の弱い人間なら、一刻もはやく立ち去りたくなる戦場痕。トワイスも長居したくはない場所に、ロレンスと呼ばれた少年は毛ほども恐れを見せることなく、人々の営みに目を細めている。

グルニアからワーレンまでの航海中、少年はこの場から一步も動かずに指示を飛ばし続けた。火矢対策に金属板を加工した盾を即席で用意し、乗り込もうと梯子をかける海賊めがけて矢を射かけ、飛び乗ってきた相手は槍で甲板ごと貫いた。指示の的確さはもとより、本人の美貌と相まった活躍はひとときわ目立ち、

「どつちが船長なんだか怪しいもんだ」

本来の船長が苦笑するしかなかった。その男も有能ではあつたが、ロレンスと比較されては困る、と真顔で抗議してきたほどに格が違ふ。

もともとは商売上の依頼からの縁だった。ロレンスの家は騎士であり、アカネイアから遙か西、グルニア王国で將軍位に就く家系である。何もしなくても父親の位を継げるのに、見聞を広げたいと願い出て、懇意にしている商家の船に乗ってワーレンまでたどり着いたのだ。

グルニアもまた、北を除く三方を海に囲まれた領土である。海上での戦闘は慣れたもので、ロレンスも相当に仕込まれていた。

グルニア東南のホルム海岸付近で一度。

マケドニア南で一度。

ワーレンまでの長い航海で二度。

計四回の襲撃を退け、最小限の犠牲で積み荷を守れたのは、少年の手腕あつての成果である。荒くれもの揃いの船員達が手放しで賞賛するほどに、ロレンスは彼らの心を掌握してしまった。

華があるのだ。

人の上に立つ者には、必ず求められる能力がある。カリスマと呼ばれるそのスキルを持つ者は少ない。持っていないからこそ、相手の恐怖や欲望を駆り立てることで代用する。トワイスもそうだし、ガルダ海賊の凄腕たちも例外ではない。金で、暴力で、あるいは美貌で他人を掌握する。生まれつきの力ではなく、人生で磨いてきた処世術なのだ。

目の前の少年は違う。

彼は、生まれながらにして人の上に立つ存在だ。

ほんのわずかな間に、自分が虜にされているのをトワイスは自覚した。同時に、商人として強大な縁を掴んだことも理解する。

少年が成長して帰国し、家職を継いだなら、間違いなく将軍位につくだろう。その時こそ、目の前の縁が宝になる。少年を保護し、育て、自らが側近となる。未来ある少年に投資し、十数年後の見返りをより大きなものにする。トワイスには、それが何より魅力的な商談のように思えた。

男が膝をつき、何十年も年下の相手へ、深々と頭を垂れる。

「私どもをお使いください、ロレンス様」

「トワイス殿？」

「何年でも構いません。存分に見聞を広め、才を伸ばしてください。トワイス商会は、あなたの手足となって支えます。逗留の間、何不由なく過ごせることを確約いたしましょう」

グルニア將軍ロレンス。

タリス王モステイン。

二人の邂逅は、一年後に迫っている。

06. 初陣海戦・前

アカネイア暦538年 モステイン 9歳（a）

それは唐突にやって来た。

日の出よりも早くから漁に精を出していた俺達は、いつも以上の収穫に手間取っていた。網にかかった魚の量が尋常ではないのだ。まるで群れ全体が生存圏を脅かされて逃げてきたように。

大量だ、と無邪気に喜ぶ村人達をよそに、俺と爺様は震えていた。はつきりとはわからないし、断言もできない。確信だけがあった。時が来たのだと。

「村長、今すぐ指示を出せい」

「父さん？ なにを——」

「はようせんか！ 男どもを全員集めるんじや!!」

先代村長の一喝に、村人達が慌ただしく動きだした。釣竿を片手に笑うだけの姿しか知らない子供達が目を丸くしている。俺もビツクリだよ、顔には出さないけど。

ついさつきまで漁に使っていた舟を大急ぎで点検し、ありったけの装備を積み込む。普段倉庫にしまわれている手槍に弓矢、伐採用の斧、心得のある者は剣まで持ち出した事で、村人達も事態を把握し始めた。

戦いが迫っている。

「相手はどこですか、父さん？ ガルダ海賊が戻ってきたと？」

「最悪はな。断言はできませんが」

「ではどこが？」

「それをはつきりさせるために向かうんじやろうが！ しっかりせんか村長！」

……なんとなく察していたが、村長、もとい俺の親父はどうにも動きが鈍い。おっとりして優しいのは美德だが、争いになった途端に右往左往して決断が鈍いのだ。平時ならともかく、これでは不味いかもしれない。

少々不安を覚えながら、俺も手製の銚と武器をたっぷりと積んでい

く。稽古ならここ数年欠かさずやってきたし、何なら実戦でも試してきた。俺もいつぱしの戦士になっている。

俺と同船になる予定のマックスはというと、肉厚の斧と弓をたずさえ、武者震いで顔に赤みがさしていた。こちらも9歳にして実戦経験は重ねている。並の大人より上手く立ち回るから、俺も頼りにできる戦友だ。

「やっぱり戦いになるかな、モステイン?」

「俺と爺様はそうなると思ってるよ」

「……あの魚の群れか?」

やっぱりこいつは頭が良い。それだけで察するんだから。

「おかしいと思っただ。明らかに来ないはずの群れがこつちに来了。原因っていったら、潮の流れが変わったか、船と船の戦いから逃げてきたってくらいしかない。潮に変化はないから、残りは戦い。もしかして、海賊船がこつちに来るのか? そうなんだな、モステイン?」

「お前は本当に頼りになるよ、マックス。百点満点だ」

「ひゃくてんまんてん……?」

「大正解って意味だよ」

爺様にどやされながら、村長の号令がかかる。村で一番目のいい漁師の舟を先頭にして、四つの小舟が漕ぎ出していく。俺達もその群れへと加わった。

戦況は芳しくない。忙しく指示を出しながら、ロレンスの思考は冷静に分析していた。自身はかすり傷ひとつないが、周囲はそうもいかない。包囲された際にひとり海へ落下したまま戻らず、追い打ちで三人が命を落とした。

船員が減るということは、減った分だけ残された者達の仕事が増えるのとイコールになる。操船の抜けた穴を塞ぐために防衛戦力から回す、あるいはその逆。どちらにしても効率は落ちる。ロレンスも負傷者の手当に奔走していた。

「ぐっ……すみません、ロレンス様」

「無理をしてはいけません、トワイス。肩を射抜かれたのですから」
左肩が固定されたトワイスをいたわる。出血は少ないものの、感染
症が不安だった。化膿が酷ければ死ぬ可能性もある。

「わ、私が甘かった……北の港が落とされるとは、なんといいう」

右手で顔を覆ったトワイスが、信じられないとばかりに首を振つ
た。

今回の航路はロレンスの希望したルートだった。ワーレンを北上
して左に舵をとり、レフカンデイの山脈を背にした港で交易。サム
スーフ山の動物の剥製や加工品を仕入れて、来た道に戻りながらワー
レンの北に位置する港で補給する。ワーレンではよく知られた航路
であり、トワイスも慣れたものだった。

帰りの航海で変化に気付いた。寄港しようとして近づいた北の港が黒
煙をあげ、船着き場が海賊船に占拠されていたのだ。これはまずいと
引き返した時にはすでに遅く、ワーレンに通じる南側の入り口が塞が
れ、北へと逃げるしかなかった。

「一刻も早く戻らなくてはなりません！ 全商會が総出であたらなく
ては、ワーレンという都市そのものが危うい！」

北の港という位置が曲者だった。ワーレンの船が北上するのを抑
えつけられ、北部ルートが塞がってしまう。サムスーフとの交易が消
失すれば、ワーレンは多大な損益を被る。大量の商人が失業しかねな
い事態だった。

「ワーレンへの入り口は封鎖され、この船だけでは突破不可能。とな
れば、ペラティを右回りに迂回するしかない……しかし、このままで
は船が保たない。どこかで補給しなくては」

「……あの北の港を除けば、港はありません。探せば村ならあるで
しょうが、それまでに海賊から逃げられるかどうか」

船員の悲鳴が響き渡る。指差された方角を見て、ロレンスは眉をし
かめた。追手は二隻。ひとつは逃げてきた南から、もうひとつは東側
を塞ぐように蛇行してくる。

「さらに北へ行くと。こちらの窮状はお見通しのようだ」

アカネイア暦538年 モステイン 9歳(b)

五つの小舟が中央を避け、岸に沿うように南下していった。途中、向かいから幾つもの魚群が逃げていくのが見える。こんな時でさえなければ網を仕掛けるのだが、それどころではない。村の存亡、ひいては俺の人生に関わるかもしれない事件が起きている。

先頭の舟に乗った斥候役が片手を挙げた。そのまま左回しにグルグルと肩を動かす。左へ行け、の合図だ。ちょうど岩礁になっており、舟ごと隠れるにはうってつけの場所だった。何かを発見したのだろうか。

全員の舟が集まってから、斥候役が報告する。

「商船が一隻、海賊船二隻から逃げとる。このままだと村まで見つかるもしれねえ」

来た。

ついに来たのだ。

物心ついてから待ち続けた悲願の時が、目の前にやって来たのだ！

「村に戻るか？ 村長達がなんていうか……」

「いかん、近いぞ！ 戻る時間がねえ！」

「このままじゃ俺達まで発見されつぞー！」

慌てふためく大人達。はぐれた海賊と戦闘した経験はあっても、今回のような集団戦は知らないのだ。誰かが指示を出してくれるのを期待しても、まとめ役の父や爺様が不在ではどうにもならない。つまり、ここにリーダーはいない。

好機だ。

「舟を出す前に、爺様からいわれた」

場が静まり返った。全員の目が俺に向けられる。

「村を守れ、だ。舟に武器を積ませたのはこの時のためだ。みんな、考えてもみろ。あの商船がやられた後で、海賊がそのまま帰らなかつたら？ 周囲を警戒して、ここが発見されたらどうする。俺達だけで勝てるのか、あいつらに？」

一番近くの村人に問いかける。首をブンブン横に振っている。

「俺達が見つけたって事は、向こうからも俺達が見つかった可能性

だってある。今すぐ村に戻るのは危険だ。俺達を追って村が襲撃されるかもしれない。そうなったら終わりだ」

「あっ……………」

斥候役の村人が呻いた。戦闘を目視した瞬間、何か確認したのかもしれない。相手にも見られたのか。

状況は説明した。

他の選択肢は潰した。

残った道はひとつだけだ。

「決まりだな。俺達にできるのは、味方がいる内に敵を倒す、それだけだ。幸い、この岩場なら舟も隠せるし、まず見つからない。奇襲にはうってつけだ」

「…………本気か、モステイン？ 本当に、俺達だけで？」

マックスが聞いてくる。舟縁を掴む腕に血管が浮き上がり、日に焼けた褐色が赤く染まっていた。恐怖だけではない。闘志がふつふつと湧いているようだった。

幼馴染を見る。

俺と毎日漁に出てくれた男を見る。

弓の使い方を教えてくれた男を見る。

人を殺す事を実践してくれた男を見る。

俺の村に暮らす男達を前にして、

「やられる前にやれ、だ」

笑ってみせる。腹の底から震えが止まらなかった。

07. 初陣海戦・後

「向きは変えなくていい！ ひたすら漕ぎ続けろ！」

「動けるものは責務を果たせ！」

「負傷者はできることをやるんだ！ 敵は私が引き受ける！」

目の前の馬面を真つ二つに断ち割りながら、矢継ぎ早に指示を出す。心は熱くなりながら、思考はどこまでも冷静に。ロレンスの脳はフル回転で働いていた。

船はひとりでは動かない。漕ぎ手まで戦闘に駆り出された時点で、海戦の勝敗は決している。ワーレンを出港した時から半分までにまで減ってしまった。

無傷の船員はいない。誰もが血を流し、応急手当で傷を塞いでいる。動かなくなった腕や足を固定して、各々の役割を必死に果たし続ける。

絶体絶命の状況にありながら、誰も降伏を選ばない。追手のガルダ海賊も、なぜさつきと白旗をあげないのか、と焦れている。否。理由はとつづくに知れていた。

ロレンスがいるからだ。

撤退が始まって以来、銀髪の少年は先頭に立ち続けている。初めは盾で船員達を庇っていたが、船長の戦死後は戦闘を一手に引き受けた。射掛けられた矢を払い、乗り込んできた海賊を真つ向から叩き切りながら、戦場の流れを把握する。縦横無尽の活躍だった。

ロレンスがいなければ、商船はとつづくに海賊の手に落ちていく。ガルダ海賊も鬼神のような奮闘を見せる少年さえ排除すればと狙うも、これ以上の犠牲を出せないと判断し、遠くから矢を射掛けるしかない。この場においては最善手だった。

嫌がらせにも等しい努力が、ようやく実りつつあった。ロレンスとて無敵ではない。疲労が蓄積され、動きが鉛のように重い。愛槍はとつづくに折れ曲がり、相手が落としたなまくらでしのいでいる。それすら限界が近かった。

なにより、船員達が保たない。自分から降伏を選ぶような真似はしないが、昨日から休みなしに続く撤退戦が船員達の心を着実に蝕みつつある。もって一時間、それすらも危ういか。

もはや船の行き先すら曖昧だった。漕ぎ手まで戦闘要員に回した影響で、潮の流れのままに北上するしかない。ワーレンどころか北の港からも遠く離れ、未開の島へと近づきつつある。このままでは逃げ切ったとしても、ガルダ海を漂流しかねなかった。

(……………ここまでか?)

船首側に梯子が掛けられる。ロレンスから意図的に離された位置。向かおうにも、そうはさせじと矢が飛んでくる。さんざん手こずらされた当てつけのつもりか、対峙する船の頭目が嫌らしい笑みを浮かべた。

「お前ら、やっちまえ！ 三倍は取り返さなきゃ割に合わねえぞ!!」

男達が雄たけびをあげて乗り込んでくる。海賊達にしてみれば、思いがけない商船の抵抗で甚大な被害を受けてしまい、引くに引けない状況だった。このまま撤退しては大損である。なんとしても商船を分捕らなければ、減った船員の補充もままならない。

乗り込まれた直近の船員が力押しに負け、船外へ落ちかかる。最後の気力を振り絞って袖口を掴み、もろともに海へ消えていった。その姿に負傷した者達が奮起し、新手の敵が怒り狂う。

総力戦だった。どちらも瀬戸際であり、決着を急いでいる。一対二からここまで持ち込んだとはいえ、不利なのは変わらない。戦場を変えらるきっかけがない限りは。

そんなものがどこにある？

(故郷から遠く離れた、異国の海賊の手にかかる。これが私の最期なのか?)

ロレンスの心まで折れかけた瞬間、思わぬ方角から歓声が響き渡った。

アカネイア暦538年 モステイン 9歳(c)

「さあ、行くぞー！」

目的の商船は南の一隻にぴったりと張り付かれ、西の一隻が挟み撃ちのためか北へ回りつつあった。岩礁を警戒する人間はいない。斥候役の勘違いで済んだらしい。運は自分達に味方している。

小舟は五つ。俺とマックスの舟を含んだ三艘が西側にまわり、あと二艘が南の注意を引き付ける。潮の流れは北から西へと変わりつつある。岩礁地帯からは追い風となる。天もまた俺達の後押しをしてくれたようだ。

「ど、どこのどいつだ、てめえら!?!」

「カシラ!? お、俺達はどうしたら!?!」

完璧な奇襲が決まった。海賊達が慌てて振り向くも、次の動作が決まらない。どうすればいいかの指示が出せない。

その硬直の間に、決定打をくれてやる。

「マックス、漕ぐのは俺だけでいい! 弓を構えろ!」

「わかった!」

「みんな、やれえ!!」

横つ腹をさらけ出した西側の海賊船に、三艘から飛び道具の雨を叩き込む。マックスの矢、錆び付いた手斧、手槍がわりに鋭くとがらせた木製の銚。村のありったけの武器を積み込んだ全てを、ここで使い切る!

大半はあたらない。船に届かないどころか、明後日の方向に飛んでしまう。それでも構わない。『自分達が奇襲された』と連中に意識させる。そのために揃えた、なけなしの飛び道具だ。

先に立ち直った海賊のひとり、ギロリと俺を睨みつけた。目にもとまらぬ早さで弓を構え、弦が引かれる。次の瞬間、櫂を持つ俺の左手がじわりと熱を訴えた。皮一枚かすっていったらしい。

「あ、あつぶな……!」

思わず冷や汗が流れる。ほんの少し逸れていたら、心臓を射抜かれていた。今日とはとにかく悪運が強い。

「舐めんなあ!」

怒声とともに、俺の後ろからひょう、と風を切る音が響く。追い風に乗った矢じりがみるみる間に距離を詰め、次の矢を構えかけた狙撃

手の胸を貫いた。のけぞった勢いのまま船から落ちていく。

やがて水没音が聞こえ、村人達が歓声をあげた。

「お手柄だ、マックス！」

「コツは掴んだ！ もっと射つー！」

スナイプを成功させたことでハイになったマックスが、立て続けにひとつ、ふたつ、みつつと射掛ける。

漕ぎ手の腕をかする。

マストにかかる綱を裂く。

弓を拾おうとかがんだ男の首を貫き、血しぶきが飛んだ。

「よっしゃあー！ 見たかモスティーン！」

「お前はすごいやつだよ。むしろ凄すぎて引くよ」

「なんで!?!」

9歳児が実戦でツールスナイプかますとか頭おかしいからだよ。外した二射も船の妨害に貢献してるし。改めて確信したが、やっぱり天才だわこいつ。こんなへんぴな村にいい人材じゃないだろう。色んな意味でありがたいけどさ。

俺も負けてはいられない。漁生活で鍛え上げた操船で、小舟をすいすいと近づける。狙うは船上のすべてを射線におさめるポジション。あつさりと到達した。

ここからは俺も参戦だ。櫂を離し、鉈に持ち替える。この日のために投擲を練習してきたのだ。足場をしつかりと踏みしめ、十分に力の伝導を意識しながら、全力で投げる。

一投目は外れ。

二投目で商船に渡りかけていた男の尻に命中して落下。

三投目が船長らしき男の太股に突き刺さり、絶叫が響いた。

「ダメだ、俺の負け」

「やったぜ！ お、また当たった」

「お前ほんとに凄いな!?!」

次期村長としての立場がございませぬ。俺のかわりに村長でも目指さない？ 前にそういつたら怒られたけど。案外いけると思うんだがなあ、マックス村長。

俺とマックスに負けじと他の舟からも飛び道具が放たれる。西側の海賊船は押される一方だった。南の海賊船に回った二艘は抵抗されながらも矢を射かけている。商船も奮起したのか、南と西の二手に分かれて反撃を開始した。

「てめえらあ！ よくも邪魔をしやがったな!!」

西の船から罵声がとどろく。俺の銛で太腿を血まみれにした船長が、髭面を真っ赤にしてこちらを指さしている。

「ぶっ殺してやる!!」

怒りと激痛で完全に切れている。突き刺さった銛もそのままに、腰に提げた斧を構えて突進した。船べりから俺達の舟に飛び乗ってくるつもりか。

だつたら受けて立つ。新しい銛を握ると、横のマックスも弓から手斧に替えていた。考えることは同じのようだ。どちらからともなしに頷く。

頭上を見上げた。髭面の大男が、斧を振りかぶりながら跳躍し、こちらへと落ちてくる。脳天から叩き切つてやる、といわんばかりの下卑た笑みだ。

「マックスー」

「おおー」

投げるタイミングは同時。

俺の銛が心臓を。

マックスの手斧が顔面に。

血に染まった大斧が、俺達の足元にめりこんだ。

「クソ、ガ、キィ——……!!」

断末魔をあげながら、西の海賊船長が海中へと沈んでいった。

……さすがに怖かった。冷や汗が流れているのに気づき、腕で拭いていたが、顔を青くして離れてしまった。子供の力では外せないらしい。どんだけブチ切れてたんだ、あの船長。

「ふ、副頭がやられちま、ギャアッ！」

「俺達もやるぞ！ ガキが全部やりましたなんて事になったら、カカ

アに殺されちまわあ！」

剣を使う村人が船上に上がり、手当たり次第に斬りかかった。相手は何時間も追い続けて疲労困憊のうえに、矢の雨で被害を出している。人数で押し返す間もなく、他の村人にも乗り込まれて混乱の真ただ中だ。

俺達も続く。残りの銛と手斧を抱え、小舟で乱戦の反対側に移動し、垂れたロープを登っていく。何の妨害もなく甲板に足をつけた。「げえっ！」

「あ、あのガキ達が来ちまった！」

海賊達が悪魔を見たような顔で後ずさっていく。失礼な。

残るは五人。あ、後ろから斬られて落下した。これで残り四人。三舟の村人全員が上がったので、こちらは八人。全員が手ごろな斧や弓を拾って武装し、切っ先を突きつけている。

商船からも梯子をつたって乗り込んでくるのを見て、四人がいつせいに膝をついた。手持ちの武器を投げ捨てて、諸手を頭上に挙げる。降参、の意思表示。

村人達の顔が歓喜に染まる。が、声は出せない。戦闘はいまだに続いているのだ。降伏からのだまし討ちを防ぐために、全員を縛り上げる。加勢に来た商船側の半数がそれを手伝い、もう半分が戻っている。く。

残る一隻は!?

南の船を見た。こちらの船が降伏したことで、撤退を決意したらしい。商船から慌ただしく海賊船が離れていき、取り残された男達が置いていくなど宙に飛び出す。その背中めがけて、大量の矢が射かけられる。

この場の勝敗は決した。損切りに踏み切った海賊達が、商船も積荷もあきらめて逃走する。あちらに配置した二艘は……一艘がふたりとも負傷し、残りの一艘が駆けつけて手当てしている。その一艘もひとりが肩を貫かれ、舟縁にもたれかかっていた。追撃は期待できない。

「——まだだ」

足りない。

逃がしてしまつては、何の意味もない！

「駄目だ！ 駄目だ！ 駄目だ!!」

「モステイン!？」

「あの船を逃がしたらまずい！ 商船だけじゃない、俺達のことまで知られる！ ここでやるしかない!!」

歓喜に沸いていた村人達が総毛立つ。考えれば当然の話で、海賊がたった二隻のはずがない。港に戻れば仲間もいるだろう。商売敵の海賊グループだっているはずだ。そいつらに情報を共有されてしまう。もしそうなれば、ろくに戦力のない俺達の村はあつけなく滅ぼされる。

「あの船を止めろー!」

弓と銚を持った村人達が商船に移ろうとするが、無理だった。人が密集しすぎている。逃げる海賊船を攻撃する者だけではない。取り残されて降伏を試みるもの、それを取り巻く味方、転がった負傷者。あまりにも多すぎて、これ以上のスペースがない。

「俺がやるー!」

子供の俺ならギリギリ入り込める。無理でもやるしかない。邪魔者を踏み台にしても飛び越えてやる。村が生きるか死ぬかだ、どう思われようと知ったことか。

リーダーの目星はついてる。船で一番目立つ男。血に染めたバシダナ、牙とヒスイをくり抜いた悪趣味な首飾り。必ず復讐しに戻るからな、といわんばかりの顔でこちらを睨みつけてきた。

何を勘違いしてやがる。

お前の死に場所はここだ。

たった一本だけ残った銚を掴む。制圧した船上を走り、商船に一番近い船縁から跳躍。梯子からは遠すぎる。最短距離はこれしかない。運良く血溜まりを避けて着地できた。勢いを殺さずに駆ける。

「……………」

銀髪の少年が何かを呟いた。聞こえない。構わない。生きて帰れたら、あとでいくらでも話せる。いまはどうでもいい。一秒だって惜しい!

どよめく船員達の中央を突っ切る。

一步。

二歩。

三歩。

助走には十分な距離。それでも足りない！

商船の縁に踵をつけて、勢いよく飛ぶ。自分の身長よりも高く飛んだところで、投擲の構えに移る。足から腰、腹部、胸から肩へ、全ての力を刃先に込めて。

「当、た、れえ——!!!」

鋸が手から離れた瞬間、ビキツ、という音が聞こえた。身体のどこかが負荷に耐えられずに断裂したのだ。構わない。腕一本は覚悟の上だ。

投擲した鋸が船に届くより先に、目の前が青一色に染まった。

「やりやがった！ 本当によっちゃまいやがった、こいつ!!」

海面に浮かぶ幼馴染を救助しながら、マックスは興奮を隠せなかった。船二隻を使った助走からの投擲。鮮やかにやってのけたばかりか、敵の大將首を貫く大戦果まであげてしまった。

一心にひた走り、翔ぶ。その場にいる誰よりも小さな少年が、ひときわ雄々しく映った。弓で鍛えられたマックスの瞳は、驚愕にゆがむ。頭目の額へと吸い込まれるように飛んでいく鋸をはつきりと見た。後頭部を貫いた刃先が操舵輪に突き刺さり、人体を磔のオブジェに変える瞬間までも。

それが海賊達の心をへし折った。自分達を暴力で従えていたボスが、たった一撃で物言わぬ屍に変えられてしまった。恐怖で変わり果てた死に顔がトドメだったのだろう。残された全員が降伏した。

肩に背負った幼馴染の顔を見る。水は飲んでいない。気絶した後にもかかわらず、無意識に体が仰向けを選んだのだ。骨の髄まで漁師の習性が染み付いていた。

やっぱりだ。

こいつは、いつだって俺の誇りだ。

商船の奮闘あつての戦果だろうと関係ない。村の小舟とは桁違いに立派な海賊船を二隻に、強そうな船長をふたりも仕留めた。王都の兵隊だつて不可能だろう。それをたかだか9歳の小僧がやつてのけた。子供達のヒーローは、ついに村の英雄になったのだ。

背中から、ぐつ、と声が洩れる。怪我をしたのか、意識を失つた友の顔が苦痛に歪んでいた。

(村に帰ろう、モステイン)

潮の流れに負けじと泳ぐ。どうやって自分達の舟に戻ろうかと考えていると、頭上からロープが垂れさがつた。商船で奮闘していた銀髪の少年と、部下らしき男が笑っている。そばには村人の姿まであつた。

「捕まつてください！ 君達を引き上げます！」

「驚いたぜ！ このガキども、大金星まで挙げちまいやがった！」

「モステイン、マックス！ お前らなんて無茶しやがる！ いま助けてやるからな!!」

全員が傷だらけだつた。痛々しく血に染まつた痕を残しながら、それでも笑つていた。どこの誰とも知らない人間と、長年を過ごした友人のように打ち解けながら。

(ああ——終わつたんだ)

彼らの笑顔を見て、マックスの張りつめていた神経がぷつりと切れた。船上に引き上げられると同時に、モステインごと甲板に倒れこんで意識を失つたのだと、翌日になって村の自宅で知らされた。

08. 異才の邂逅

アカネイア暦538年 モステイン 9歳(d)

起きたら丸一日たつてました。

腕の激痛で飛び起きたら、見慣れた我が家だった時の驚きよ。思わずキョロキョロと見回していたら、駆け寄ってきた母に抱きしめられた。されるがままに状況をたずねると、小言をたつぷり添えて返される。

まったく意識していなかったが、朝の漁からぶっ続けの初陣で俺の気力と体力は限界だったらしい。銛をぶん投げたところで気絶してしまい、戦闘終了までプカプカ浮いていたそうだ。泳いで救助してくれたマックスもぶっ倒れたとか。あいつ本当に良い奴だな……！

商船は無事だったものの、船員の半分を失い、残った者達も大なり小なり負傷している。降伏してきた捕虜は10人。それだけのお客さんが一時的に来たことで、村は現在でんてこまいになっている。なお、戦闘に参加した村人は全員無事である。頭目を足止めしていた二艘のうち三人が重傷だが、命に別状はない。あとでたつぷりねぎらわなくては。

村の代表として父と爺様、商船からはトワイヌにロレンスという責任者ふたり、以上の面子で話し合いが行われている。詳しい内容は極秘で、村人の誰も知らないのだとか。察しはつくけどね。

痛みにも慣れてきたので、母をなだめすかしながら起き上がる。寝てる暇なんかない。自分で現状を把握しなくては、全部かやの外で終わってしまいかねなかった。

浜辺にいつてみると、あるんだな船が。俺達が必死になって守り、襲い、食らいついた三隻がデデデンと並んでいる。生き残った船員達が商船を、村人達が海賊船二隻を手探り状態で整備しており、非常に賑やかだった。

「すっげー！ 父ちゃんの舟と全然違う!!」

「乗りたい！ 乗りたいーい！」

「ダメだダメだ、見るだけにしとけ！ ……ああ、いいなあ。俺だつて乗ってみてえよ。あれで漁をやったら、どんなに良い気分だろう」

ド田舎の村に突然観光スポットが出現したようなもので、子供達が目輝かせている。見張り役の大人も気になるようで、作業の様子をちらちらと伺っていた。気持ちはわかる。

そんな微笑ましい光景をブーツと見ていたら、銀髪の美少年に話しかけられた。そういや商船にいたな、と思い出したが、俺の中で長い間使われなかった嗅覚まで反応した。

「ふ、」

「ふふ。」

「文明の匂いがする……！」

右腕をぐるぐる巻きにしたガキが膝から崩れ落ちておいおいと号泣する異常事態。さすがの銀髪美少年も困惑したのだろう、落ち着くまで背中をさすってくれた。ごめんな、マジでごめん。

だってさ、明らかに違うんだよこいつ。生まれも育ちも、受けてきた教育も、生き方の価値観も、何もかもがこの村とは違う。洗練された立ち居振る舞い、何気ない言葉の選び方、内に秘めたプライドをほのかに匂わせる社交性、観察眼の広さ。すべての次元が違う。

こんな村にいるのがおかしい、天文学的な確率を引き当てて迷い込んだ、本物の貴族。

これだよ。

この、ひと目ではつきりと理解できる《異文化》こそ、俺が一番欲しかった刺激なんだ！

人種レベルで何もかもが違う異邦人。村の外、島の遥か先には、こんな人間がぞろぞろ生活している。異なる食事と、娯楽と、衣服と、住居を持っている。文明を築いている。

未来に生きている。

この狭い村で完結してしまった村人達。島の外への関心を捨ててしまった大人達。将来の選択肢を狭めざるを得ない子供達。彼らの意識を変えていくきっかけに、こいつは最高のシンボルになる。

「どうして泣くんさい？」

思いのたけを正直にぶつちやけると、珍獣を見つけたハンターみたいな顔をされた。もしくは第一村人を発見した探検家。確かにここは未開の島の果てだが。

「国を出てから二年、色々な人種を見てきたが、君みたいな思想の持ち主は初めてだよ。そんなことをいわれたのも」

そりゃそうでしょうよ。こんな9歳児がほかにいたら怖いわ。こっちは後先考える余裕なんてないから、いつだって手札フルオープンでぶつかるしかないのだ。

初っ端からインパクトを与えてしまったが、気を取り直して会話したところ、この少年こそがロレンスだと判明。向こうも爺様から俺の事は聞いていたようで、一度話してみたかったと笑っていた。

生まれはこの島から王都パレスを挟んで反対にある開拓地、グルニア王国。501年にオードウィン將軍が建国した国で、面積は同じくらしいの島国だという。ただし文化レベルは比べるのも失礼、月とスツポンぐらい違う。原住民と漂流民しかないこちらに対して、パレスから任務を受けて移住した本物の騎士階級とその従者、さらに専門の兵士達で構成された、極めて文明的な国家である。なにそれ超羨ましい。

グルニアは国の成り立ちからして軍人氣質が強く、ロレンスが生まれたのもアカネイアに代々騎士として仕え、將軍も輩出してきた由緒ある家柄なのだそう。幼い頃から貴族としてのマナーに加えて、槍術や水練、用兵術、軍略を叩き込まれ、芽があると認められてからは算術まで仕込まれたという。万能にも程がある。

しかし、話していてつくづく思うのだが、

「どうしたんだい？」

「いや、自然体だなあって」

まったく嫌味がない。

これだけ完璧超人で住む世界が違う人間にも関わらず、相手に嫌な心地を与えないのだ。その半生もエリートそのもの、特権階級の自慢話にも取れるのに、聞く側はするりと受け入れてしまう。これが人徳というものか。おそろしい能力だと思う。

ありがたいことに、向こうも俺に興味を持つてくれたらしい。また話そうと約束して去っていった。トワイヌとの相談事ができたので、とぼやいていたが、貴族と商人がいったいどんな会話をするのやら。後学のために聞いてみたい、切実に。

「鬼子（おにつこ）ですね、あれは」

夕食後に改めて開かれる商談に備えての作業中、ロレンスがそう洩らした。

「モステイン。私達を救助し、頭目達の首をとった子です」

「あの少年ですか。先代村長の老人が自慢げにしていましたな」

孫を可愛がっているのがひと目でわかる溺愛ぶりだった。その一方で、父にあたる現村長は苦労が絶えないらしく、何度も胃を抑えていた。次期村長が幼い内から大暴れしているのだから、心配するのも無理はない。

「破天荒だとは思いますが。二桁にも満たない子供があれだけの戦果を挙げたばかりか、村人達を戦うように先導したとか。確かに並の子供ではない。しかし、鬼子とは？」

鬼。

魔獣と呼ばれる怪物の一種である。人間のこめかみにあたる両側、もしくは額の中心から角を生やし、人のおよそ十倍の力を持つ。肌の色は赤や緑、青、もしくは闇色であり、人間のものではない。

生息地は不明。発生条件も不明。大陸のどこからともなく出現し、村や集落を襲う。壊滅的な被害を出したところであろうやく兵士達が出動し、討伐すれば数年は現れない。間に合わなければ、最初からいなかったように姿を消してしまう。

ひとつの噂がある。鬼とは人間が変容した怪物なのだ。それまで人と何ら変わらない生活を送っていた者が突然変わってしまうために、周囲は避難も間に合わず、被害を防ぐこともままならない。さながら災害である。

ロレンスをして、少年を鬼の子といわしめる。その真意がどこにあるのか、トワイヌには判断がつかなかった。

「あり得ない存在だからですよ」

本人から『あり得ない人間』といわれたロレンスが断言する。

「考えてもみてください。この村は極めて原始的で、海賊との対抗手段が乏しい上、造船技術もないために、町との交流がない。当然、文明の知識は得られず、文化が発展する事なく停滞する。これでは優れた人材が生まれてこない。多少の才の持ち主はいても、大成はしないでしょう」

にも関わらず。

「モステインという少年は、明らかにその前提を飛び越えている。生まれ育った島しか知らないはずなのに、他の先進的な都市を知っているかのように比較する。その上で、自分の村がいかに原始的かを理解し、変革しようと動く。いったい、誰が教育したのでしょうか？」

「……親ではない。善人ではあっても、どちらも凡庸です。となれば、あの老人かと」

モステインが気絶中に進めた商談では、現村長ではなく先代の古老が責任者として進行していた。商船についての知識量が豊富なため、気になったトワイスが事情を聞き出したところ、老人がパレスの住民であったことが判明したのだ。

元々は、少年の祖父も村の異物だった。長い年月をかけて村に溶け込み、一員として認められ、村の長として舵を取った。あの老人も常人ではない。半世紀近くに渡って執念を燃やし続け、ついに機会を得たのだ。商談中の熱意は狂氣的ですらあった。ふたりはおろか、血縁上の息子も勢いに吞まれてしまったほどに。

あの祖父ならば、あるいは。

「本当にそう思いますか、トワイス？」

じつと見据えてくる年下の主に、部下は答えられなかった。

「あれはね、誰に教えられることもなく、当然のように知っていたのでしよう。常人とは異なる存在。あり得ない異端児。まさしく鬼であり、鬼の子です」

本人が聞けば怒るでしょうね、とロレンスが笑う。鬼子という怪物扱いをする割には、ずいぶんと好意的な、親しい友人への愛称のよう

な気軽さだった。

（――ああ、なるほど）

トワイスは思い当たる。

目の前の少年もまた、恵まれた故郷からたったひとり、危険を承知で飛び出してきた奇人なのだ。

ロレンスは喜んでいるのだ。遠い異国の地で、自分と同じか、まったくの異才に出逢えたことが。生まれてきた環境も、受けてきた教育も、すべてがでたらめに食い違う。なのに不思議と噛み合ってしまう。

異物という点において、ふたりはこの上なく近い存在なのだ。

「面白いですよ、彼は。何をしでかすのかまったく予測がつかない。それぐらいでなくては、この島の改革は不可能でしょう」

「お気に入りのようすな」

「ええ、とても」

ふたりは笑う。年相応の子供らしい笑みと、息子の成長を見守る父のような笑みを浮かべながら。

瞬間。

ロレンスの視線が村の一角に走る。ガルダ海賊の捕虜達を数力所に分けて押し込めた、村の倉庫が点在する区画である。

「トワイス。ひとつ、無理をしたいと思います。ワーレンへの帰還が遅れてしまいますが」

「あなたの望みであれば、何なりと」

「聞かないのですか？」

「お気づきではありませんか？」

ワーレン有数の商人が、色とりどりの宝石を散りばめた手鏡を見せた。

「恐ろしい顔で笑っておられますよ、ロレンス様。あの海戦で見た少年そっくりだ」

09. 貸し借りは無しだ

アカネイア暦538年 モステイン 9歳（e）

「10人。降伏した捕虜の人数です」

「商会は彼らをワーレンまで連行した後、牢屋につなぎます。それが義務ですからね。しかし、不正や脱獄によって彼らが元の海賊に戻る可能性は否定できない。そうなれば、この村の所在が明らかになってしまう」

「海賊船を逃さないために頭目を殺したあなたなら、なんとしても避けたいはずです。可能であれば、あの海戦でひとり残さず殺してしまいたかった。そうではありませんか？」

「それを踏まえた上で、私から提案があります」

「あなたは村を守りたい。私は借りを返したい。悪い話ではないでしょう」

「どうです、モステイン？ 私の手をとりますか？」

ちよつと何言ってるかわからないです。

俺が丹精込めてこさえたバツカラ（タラの塩漬け干物）と海藻サラダを夕飯に済ませた後、改めて開かれた商談の一幕である。父も爺様も初耳らしく、目が点になって……いや違うわ、ドン引きしてるんだわ。俺もとつさに言葉が出てこない。だから、アレと同類を見るような目でこつちを見ないでくれ。

最初はごく普通のビジネストークだった。昼間に参加できなかつた俺のための復習がてら、海戦までのお互いの成り行き、村の活躍を加味した真珠の割り増し取引、村の滞在費用と船の修理用木材の経費請求。さらにはワーレンおよび北の港が置かれた情報共有、今後を見据えた定期的な交流計画。

さすがは大陸一の貿易都市でのぎを削る商家というべきか。語り口から具体的な数字の並べ方まで、いっさい無駄がない。人生で初めて味わったであろう異文化の知識量にオーバーヒートを起こした父が即脱落し、俺もついていくのがやっとだった。事前に爺様からア

カネイアの通貨単位と相場を習っていないかったら、話のさわりも理解できなかっただろう。爺様にしたところで何十年も昔の相場である。顔を真っ赤にして脳内アップデートに励んでいた。

どうにか商談らしい形を整えて、今後も真珠を基本にした取引をやっていきましょう、とにこやかに締められた矢先である。ロレンスが捕虜について切り出したのだ。

俺も爺様も、ややうっかり気味な父でさえも降伏した海賊達については危惧していた。いまでこそ大将が一撃で殺されたシヨックでおとなしいが、恐怖が薄れたら即座に元の海賊に戻る。断言してもいい、確実に知り合いのグループに加わってこの村を襲いに来る。それが海賊という生き物なのだ。

だから。

正直にいうと。

ほんの少し。

(面倒だから全員やっちゃってよくない?)

心のどこかでそう思ったのは否定しない。だって間違いなく復讐に来るもん。さつき連中を押し込めた蔵を覗いたら、俺のことをめっちゃ睨んできたし。あれはやるよ、絶対にやる。

たとえわかりきった未来だとしても、一応は捕虜だから殺害はどうかのかと躊躇していたのだ。爺様達が賛成するかも怪しいし。やるなら俺ひとりで全員殺せ、なんて事態もおそろしい。いざとなったらやるけどさ。でもなあ、うーん。

そんな葛藤を抱いている時に、商談相手から

「降伏してきた連中をこの世からオサラバさせるけどどう?」

とかいわれたわけ。俺は思わず二度見した。向こうはニヤニヤ笑ってやがる。やってほしいんだろ? って顔してる。ちくせう。

その通りだよ、誰かにいつてほしかっただけだよ。

だが、答える前に。

俺の望む案を示してきた相手に、これだけは聞かなくてはならない。

「どうしてそんなに俺を買ってるんだ?」

これは商談とは関係ないはずだった。本来なら、村から商会へ持ちかけるべき案件である。今後の村の障害を取り除くために、10人の捕虜を始末する。自分ではなく、相手の手を汚させる。正式の依頼なら多額の金銭が動くだろう。それをタダでこなすという。裏がある。としか思えない。

正直に疑問をぶつけると、ロレンスは少しだけ目を伏せた後、俺を真つすぐに見つめて口を開いた。

「あなたとは、貸し借りを作りたくないんですよ。対等でありたい。生まれや身分も関係なしに、ただのロレンスとモステインとして向き合いたいんです」

ずい、と突き出された手は、いま思うとカリスマ少年なりの照れ隠しだったのかもしれない。あの時は有無をいわせぬ迫力に呑まれて、無意識に握手してしまった。ちよつと早まったかもしれない。

トワイスを連れて颯爽と出ていく後ろ姿を見送りながら、俺は爺様に問いかけた。

「あいつはいったい、なんだって俺を過大評価してるんだろう?」

何かを言いかけた爺様が、諦めたように首を振ってから、深々とため息を吐いた。なんだその思わせぶりな仕草は。

「……わしも長いこと生きとるが、お前のように斜め上へ突き抜けた輩が世の中にもうひとりいるとは思わんかったわ。下手をすると、お前の腐れ縁になるかもしれないぞ」

おそろしいことをいうなよ、お爺ちゃん。

男達の悲鳴が聞こえたりしながら夜も更けていった、翌日。

「ぎゃあああ! 死にたくない! 死にたくない!!」

朝一番、めつちややかましいのを連れたロレンスが村長宅にやって来た。遊びに来ていたマックスが何事かと部屋から覗いている。

「おはようございます、モステイン」

「うん、おはよう。なにそれ」

「フィットマンという名の捕虜で、少々変わった経歴なので連れてきました。ワーレン北の港で船大工をやっていたところを襲撃に遭い、

雑用に使われたそうです。本人いわく、あの海戦が初陣で盗みも殺しもやっていないとか」

「ホントだよお！ 信じてくれよお！」

「聞いたところ、あの二隻の整備も手掛けたといっています。この村に専門の船大工がいらないなら、必要になるのではありませんか？ 処遇はお任せします」

俺に生殺与奪の権利が移った瞬間、フィットマンと呼ばれた青年が見事な土下座をかまししながら俺の足にしがみついた。動きが早すぎてまったく反応できない。よほど怖い目に遭ったのだろうか。

「た、頼む！ お願いだからここに置いてくれ！ いや置いてください！ もうやだよお、海賊なんてやりたくないし、戻ったら牢屋行きとか地獄じゃないか！ しかも断ったら殺すって！ あいつらみたいに殺すって!!」

フィットマンが断れないように、目の前で残りの9人を始末したらしい。ひどい。手並みが鮮やか過ぎていよいよ俺もドン引きだよ。商談のあらましを聞かされたマックスが事情を察知したのか、奥でガタガタ震えている。足元のフィットマンも生まれたての小鹿のようだ。ロレンスはさも良い仕事をしたといわんばかりの微笑み。まともなのは俺だけか。

「……とりあえず、飯でも食ってく？」
「喜んで」

マックスは逃げ出した。

超絶美形のおでましに狂喜した母とお手伝いさんの給仕を受けながら、ロレンスは見事なテーブルマナーで完食し、俺の手作りのトコロテン（木苺を添えて）に舌鼓を打ちつつ帰っていった。

……トワイス達にも食べさせてやりたいというので、作り置きのコロテンも全部持っていかれたんだが。都会ではああいうのが好きなんだろうか？ 真珠のほかにグルメ路線もありかもしれない。

10. 都会に行く人この指とまれ

アカネイア暦538年 モスティン9歳（f）

契約は無事にまとまったので、村としては次の課題に取り掛からなくてはならない。

「それで、誰がワーレンまで行くんです？」

今回の商談で、村は秘蔵していた真珠の大半をトワイス商会に「預けた」。商会は「預かった」真珠を管理運営し、村に必要な物資や人材を確保して村へと送り届ける。そこまで達成させて、はじめて契約完了となる。

普通の取引なら、ここまで面倒な手順を踏む必要はない。真珠を丸ごと渡して相場の金額を受け取ればおしまいである。それが不可能だからややこしいことになる。

まず、商船には金銭がまったく積まれていなかった。海賊に追われる直前に貿易を終えていたので、村では使い道に困る剥製やら毛皮しかない。こんなものを受け取っても困る。

次に、金銭を渡されても村ではどうしようもない。誰も価値のわからない代物だけ用意されても、交換相手がいないのでは詰みである。「船が手に入ったんだから、自分達でワーレンまで行って商売したらいいのでは？」

と思うかもしれない。自分でもそんな考えがよぎったが、すぐに諦めた。村の小舟とはわけが違う。ろくに運用ノウウハウのない道具で海に出るなんて恐ろしい真似はできない。口に出すまでもなく却下。なにより、いまの村ではどうしようもない問題にぶつかると。

「ワシらのようなぼつと出の田舎者を、誰が相手にするんじや？」

商売における大前提。『信用』が村にはこれっぽっちも無かった。

個人と個人の小額取引なら問題はないのだ。夕飯のおかずが大根一本とブリ一尾を買うのに信用も何もない。これが真珠と物資の高額取引になると、話がまるで変わってしまう。もし取引に使われた真珠が贖物や盗品、いわく付きで価値の無いものだったら？ 騙される

リスクを背負ってまで大金を払う商人は少ない。いたらそいつは闇商人か何かだ。

まったく爺様のいう通りである。存在すら知られていない村の間を名乗る連中が大量の宝石を持っていったところで、誰も買おうとはしない。窃盗団の疑惑をかけられて牢屋に放り込まれるのがオチだろう。これがド辺境の辛いところであり、おらが村の悲しい現状だった。せちがらい。

よって、村にできることは一つ。ワーレンの商家として信用のあるトワイス商会と契約し、諸々の取引を代行してもらう。その上で契約が適切に行われているかの監視、また要求した物資の点検も兼ねて、村からも数人を派遣する。これには当然アカネイアの経済を理解している者が必要不可欠。となると、

「ワシは外せんな」

爺様は確定である。100人前後の村において、都会の知識が多少でもあるのはこの人だけだ。先代村長の肩書も十分に格を満たしている。さらにもう一人、

「俺だよな」

「当然じゃ」

次期村長候補としての俺が立候補。村の5年後10年後を考えれば、爺様のようにアカネイアの知識を持った人材の育成が必要不可欠である。俺が都会の経験者第一号になって、村の子供達にアカネイア文化を浸透させてみせる。今回の船出は願ったり叶ったりだった。腕はまだビキビキいってるが、まったく気にならない。痛いのは生きてる証拠だから、ヘーキヘーキ。

「私には荷が重いよ。ふたりがいつ帰ってきてもいいように、村を守ることに専念したい」

村長である父は残留。本人の気質も相まって、都会を拒絶する引きこもりオーラが見えてしまうのが悲しい。本人がそのつもりならいいけどさあ……大丈夫だろうか。帰ってきたら爺様と説得する必要が出てきた。

その他、商船の人員不足もあり、海戦に参加して無事だった男衆の

うち4人も漕ぎ手で参加。3人が負傷のため除外、村を守るために4人が残る。残留組には幼馴染の名前もあった。

「マックスは無理か」

「村の守り手も残さなくてはならんからな」

苦渋の決断である。できれば俺と一緒に都会の空気を味わってほしかった。後で本人にそう伝えたところ、

「俺は次でいい。それより、お前がいない村を守る奴が必要だろ？」

なんとも男前な意見を返されてしまった。おまけで付いてきた答えがまた凄い。

「あの銀髪の兄ちゃんの又聞きだけど、ワーレンにだって兵隊がいるんだよな？ そいつらは当然北の港を取り返すために戦うわけだ。もし勝ったら、負けた海賊がこっちまで逃げてくるかもしれない。その時に村を守るやつがいなかったら、それこそヤバイじゃないか」

お前なんでそんなに頭が回るの？ 本当に教育受けてないの？

俺の知らない間に幼馴染が謎の成長を遂げてるんですけど。妙なやる気に満ちた親友がちよつと、いやかなり怖い。どこまで有能になるつもりだこいつは。

頼りになり過ぎる親友がそういつてくれるので、村については一心。続いて二日前の戦利品ごと、鹵獲した海賊船二隻の扱いに移る。

「村の小舟とはまったく違う。今日明日で使いこなせる代物じゃないよ」

俺とマックスがぶつ倒れた海戦の帰りは大変だったらしい。商船の生き残りが数人ずつ二隻に乗り込み、村人を指導しつつえつちらおつちらと村にまで帰港したのだとか。実際にはろくな船着き場もないので帰港ではなく、浜辺に乗り上げただけでもいう。

この二隻は現在、ロレンスのお眼鏡にかなったフィットマンが全力で整備している。こいつも村に受け入れてもらうために必死である。海賊に捕まってこき使われていた事情は村人達にも伝えてあるので、監視役という名目で付けた優しいおっちゃん漁師が心配して休むようにいうのだが、

「あの残忍銀髪美少年がいる間は休まない！ 殺される!!」

と叫んで取り付く島もない。よっぽどトラウマになったらしい。限界が来るとスヤスヤ眠るそうなので、本人の気が済むまで好きにさせてやることに。

今回のワーレン行きにあたっては、運用の技術が足りないこと、メンテナンスが間に合わないことから二隻は用いない。海側から発見されるのも怖いので、船をすっぽりと隠せる木々まで村人総出で引っぱり上げた。全身に汗を流す男達と、それを拭ってやる女達、突然おこなわれた綱引きイベントにキャツキャと楽しそうに笑う子供達。ちよつとしたお祭り気分である。

それはいいのだが、毎回これはしんどい。トワイス商会のツテを頼って船着き場の建設を依頼しなくてはなるまい。定期的に交易するのだから、向こうも乗り気になってくれるはずだ……真珠代で足りるかな？ 勉強してもらいたい。

俺達がこんな調子でひとつずつ問題を片づける間に、トワイス商会の船員達も数人が回復した。どうにか出発の目途がついたのは、海戦から四日後のことである。

北の港の一件には間に合わないんじゃないかと思ったのだが、専門家の意見は違った。

「この騒ぎは長引きますよ」

商会のオーナー、トワイスが苦笑いで答えてくれる。

「ワーレンにはアカネイアの兵がいません。自由貿易都市として独立するために、多数の傭兵を雇うことで軍隊にしているのです。彼らを動員するには、会議の多数決をとらなくてはなりません。これがまた時間のかかる段取りでして」

「頭を抑えられた状態なのには？」

「敵の敵は味方、という言葉があるのですよ」

どうか内幕に、と頼まれた後の説明が以下である。

ガルダ海賊にも複数の組織があり、中には知恵を巡らせて利益をむさぼる者達もいる。その一部はワーレンの幾つかの商家ともコネクションを持ち、略奪の戦利品を横流しすることで討伐の対象から除外させるなど、したたかな面を持っているのだとか。

このコネは相当に太く、過去には同じガルダ海賊内の敵対組織をワーレン傭兵達に討伐させる、力を付けてきた商人を意図的に狙って襲撃させるなど、目を覆いたくなるほど黒い事件が頻発した。結果、首謀者の商会長はワーレンから追放され、自らが利用したガルダ海賊の手にかかったそうなの。

「今回の占領も十中八九、商会の誰かしらの意図が働いています。奪還に可決するまで何日、何週間とかかるでしょう。実際に襲撃された私が戻って詳細を伝えれば、無駄な日数を短縮できるはずですよ」

負傷した肩も痛々しいトワイスが胸を張って告げる姿からは、なんとしてもワーレンを救う気概が漂っていた。商人として都市を守ろうとする在り方は、ちっぽけな村を変えようと動く俺にどこことなく似ているようにも思える。彼からも学ぶところは多そうだった。

しかし、思った以上にガルダ海賊が手ごわい。ただの暴力集団ではない、ワーレン内部にまで結びついた活動は海賊というより、大規模な傭兵組織に近いのではないか。

色々と不安を抱えながらも、明日はいよいよ島を出ての初航海。いつか何の心配もなく、みんなで遠洋に出られるようにしたいものである。クロマグロの一本釣りとかさ。

……はたして、無事にたどり着けるんだろうか？

11. あの海のかなたへ

アカネイア暦538年 モステイン9歳（g）

ワーレンはアカネイア大陸でもっとも栄える港町であり、大陸の外からも多くの貿易船がやってくる。彼らの情報を元に作成された海図には、国ひとつともいわれるほどの大金が動くという。ワーレンに生きる大商家は、誰よりも先んじて多くの海図を確保し、未知なる航路へと漕ぎ出すのだ。

ガルダ海の地図はあるのかと聞くと、微妙との答え。まず、ドルーア戦争前から頻繁に海賊が行き来していたため、ろくな航海ルートが確立されなかった。さらには戦争によって失業者や逃亡兵の海賊が激増したことで、近隣の治安が最悪まで落ち込み、正規の測量士を派遣する余裕はなかったらしい。出どころの怪しい地図ならあるが、村や港の位置が不明瞭で信用ならないのだと。

つまり、この船上にはガルダ海の渡航経験者はひとりもおらず、正式な海図もない。ほとんど未知の航海に、腕利きの船員達も不安そうだった。

周囲が小難しいことで悩むのをよそに、俺はひたすら喜んでいた。漁で見慣れた景色のさらに先へ、飛ぶように突き進む大型船の楽しさよ。片腕が使えないために任された見張り役で一日中ずっと海を眺めたり、爺様と並んで釣竿を振ったり、休憩中には銚を片手に海へと沈んでいった。

朝焼けの光をほのかに受けたサンゴの輝く姿。

何千という群れをなすホタルイカが遠洋に繰り出す様。

ちっぽけな人間など気にも留めず、盛大に潮を噴き上げる巨大クジラ。

村では見たことのない魚や生き物が、海の向こうにはごまんといた。なんて素敵なんだろう。あの戦いが無ければ、商船が迷い込んでこなければ、こうして新しい景色を見ることもなかったのだ。生き残れた以上に嬉しくて、潜るたびに泣いてしまう。

「君は大人物か大馬鹿のどちらかですね」

「お前も人のこといえないだろう」

昼の休憩中、俺と並んで釣竿を垂らすロレンスと軽口を叩き合っている、それは突然こたえました。

爆音。

船上の全員が武器をとる。村を出て三日目、現在位置は島の南東。内陸を挟んで村の反対のあたり。ガルダ海からペラティ海へと抜けつつ、ペラティ王国を右に見ながらワーレンへ一直線に進むのだと説明された。そろそろ海賊の襲撃があるかも、と危惧していたので、ついに来たかと構えたのだが。

「どこから聞こえた!？」

「船影無し! はぐれ飛竜も見えない!」

「……上じゃ! 島の崖を見るんじゃ!」

いち早く発見した爺様の指差す先では、無数の人影が入り混じっての乱戦が繰り広げられていた。

一方は民族衣装に身を包んだ、反りの深い山刀と弓を駆使する部族。戦闘慣れしているのか、身のこなしがうちの村、南の部族とは明らかに違う。刃物を扱うことに何のためらいもない。陸地であれだけの動きをされたら、俺などあつという間に殺されてしまうだろう。

そんな集団と戦う相手は、何者なのか。

「……なんだありゃ」

黒い集団だった。

服も。

フードも。

手に持った杖も。

陽に照らされることのない、影に隠された顔も。

恐らくは——下着さえも。

「前に話したじやろう。あの山刀の連中が首狩り族。集落に伝わる神への捧げ物として、敵の首を斬り落とす風習をいまだに続けておる。そして、やつらの戦う相手こそが、長年敵対する別の神の信者どもよ」
黒一色に染め上げた男女が、斬りかかる敵から一定の距離を保ちつ

つモゴモゴと口を動かす。何かをしようと企んでいるのだろうか、間に合わずにひとりが切り刻まれる。トドメをさした男が離れかけた瞬間、

人体が爆炎に包まれた。

「はあ!？」

あまりにも非現実的な光景だった。周囲には火の気もなかったし、ガスの臭いで苦しむ様子もなかった。あの場で炎が発生するような条件はいつさい存在しない。にもかかわらず、突如として炎が現れ、ひとりの戦士が絶叫をあげながら焼け死んでいった。

あそこで何が起こった!？」

「ファイアーですか。こんな辺境で魔道とは、大したものですね」

「ロレンス?」

天才児にしては、珍しく感心した様子だった。

「剣でも槍でも斧でもなく、かといって弓でもない。かつて人智を超える力を行使していた竜族が人間にもたらした、新しい術理です」

「あの炎が?」

「火だけではありません。風や雷、光と闇、どんな傷もたちどころに癒す聖なる力、相手を呪い殺す邪なる力。才ある者が用いれば、とてつもない驚異になるでしょう。たとえばそう、魔道の使い手で構成された部隊を作ってしまうとか」

「こんにやろう、自分が作りたいっていったのと同じじゃねえか。」

俺が生まれ落ちたこの世界は、竜だの魔獣だのとファンタジーに片足どころか全身漬かり切っていると頭では理解していた、そのつもりだった。だが、目の前で現実に見てしまった魔道は、とんでもない衝撃をもたらした。いや、もっとショックなのは、

そんなトンデモの使い手が同じ島にいるということだ。

この島には様々な部族が根付いていると爺様から聞いていた。つまり、あの民族衣装に山刀の部族も、黒一色の集団も、ひとつの島の住民なのだ。同じ島で暮らす以上、あの連中と接触する可能性はゼロではない。いつか衝突するかもしれない、明確に危険な力を備えた相手の存在を、俺はいま知ったのだ。

考える。もし、俺の村が戦になったとして、目の前の連中が相手だったら？ 恐ろしく強い山刀の戦士達か、魔道を使いこなす集団か、あるいは両方ともか。
勝てない。

俺の村の戦力では、片方でも全滅する。

あの海戦は運が全てだった。真っ向からのぶつかり合いでは絶対に勝ち目がなかったからこそその奇襲。全てが俺達に都合良く味方した、奇跡の勝利だった。その現実を忘れたら、俺達はあつという間に殺される。

「……あの連中をいま見られたのは、幸運かもしれない」

目の前の驚異から目を逸らさないために。村が越えなくてはならないハードルを設定するのに、あれは最適な基準になるだろう。いま、この目に焼き付けてやる。

食い入るように見つめる俺の視線に気づいたのか。いよいよ佳境を迎えつつある戦闘の中で、二刀の山刀を振るう黒髪の少女がピタリと動きを止める。

こちらを見下ろす視線が、はつきりと俺を捉えたのがわかった。

「……!?!」

「!」

乱戦の最中である。周囲の男達に促されるように、少女がくるりと背を向けるや、再び黒装束の集団へと斬り込んでいく。あの恐ろしい魔道が発動するよりも早く飛び込んでいき、一瞬たりとも止まらない。動き続けることが対魔道戦の肝要なのだ、俺に教えるような戦いぶりだった。

「モステイン?」

声をかけてきたロレンスが、たちまち眉間に皺を寄せた。手拭いがわりの布を渡してくる。

「これは?」

「使ってください。ひどい汗ですよ」

自分が足元を濡らすほど汗をかいていることに、初めて気がついた。

「見られた」

「あの距離で？ 魔道相手の戦闘中に？」

「一瞬。その一瞬で、俺の何もかも見られたような寒気がした。あれはなんだ？ あれも魔道か何かか？」

口にしなから、違う、と本能で理解する。

あれは別の力だ。魔道とも錯覚とも違う。もつと別の、人間本来が持つような感覚。よくわからない、言葉にしにくいもの。なんといえればいいのか——ほとんど覚えていない前世の言葉。

霊感。

それに近いものだと思う。あの少女は霊能力でもって俺に気づき、同じようにその力で俺を観察した。確かにされたのだという体感が、極度の緊張から解放されたショックで冷や汗として流れている。そうとしか思えなかった。

自分で整理するためにブツブツ呟いていたのを、興味深げに聞いていたロレンスがなるほど、とうなずいて、

「あなたといい、その少女といい、この島は退屈しませんね」

感謝しているとばかりに笑いやがった。思わず頭をはたいた俺を許してほしい、ものすごくイラツと来た。向こうも本心ですから、とまったく懲りてないのでチャラにしてもらえないかね、ずっと睨んでくるトワイスさん。

部族同士の争いに関わる余裕はない。満場一致の意見のもと、俺達は全力でその場から離れたのだった。

アカネイア暦538年 モステイン9歳(h)

島の南東部での争いから一週間。ペラティ海賊を警戒しつつ南下していき、目標の経緯度に到達したところで、商船は一直線にワーレンへと突き進んだ。

「思ったより海賊がないな？」

俺の呟きに、船員達も首をかしげている。遠洋に向かって開かれたペラティ海では、ガルダ海以上に海賊船が出没すると聞いていたのだ。にもかかわらず、俺達はほとんど遭遇していない。いったい何が

起こっているのか。

「おそらく、ペラティの海賊もガルダ海賊と結託したのでしよう。ガルダ海賊だけでは戦力が足りずに申し出たのか、あるいはペラティ海賊が嗅ぎ付けて勝手に参戦したのか。どちらにせよ、このあたりの船のほぼすべてが離れたとみていい。絶好の機会です」

それだけ北の港が激戦区になったわけだ。おかげで俺達は無事にワーレンへと向かえるので、ある意味では助かったことになる。その後の面倒は考えたくない。

十分な警戒を払いながら、さらに二日。俺達の乗った商船は、とうとうワーレンの船着き場へと到着した。

「錨を下ろせー。お前達、宴の前に最後のひと仕事だ！」

「へい！ 全員、積荷に急げ！ 今日は飲めるぞ!!」

大歓声の中、船員達が積み下ろしにかかる。どんなに負傷していても、全員が自らの役割に従事する。ロレンスにトワイス、ふたりの教育が行き届いた証拠である。なにかマニュアルがあるならぜひ欲しい。いつそ粘土板に日本語でメモしてやろうか。

片腕の使えない俺では力仕事の邪魔になる。船から降りるのは最後にしよう決めて、人通りの絶えないワーレンの街並みを気持ちよく眺める。村人達もキョロキョロとあたりを見回して、おのぼりさんだとひと目でわかる有様だった。

「すげえ……すげえ数の人だ！ 人だらけだ！」

「当たり前のこといなよ！ もっと他にあるだろ！」

「それしか浮かばねえって……うわあ、いいなあ。可愛い子がいっぱいだあ」

「あそこにすらつと並んでるの、屋台つていうんだろ？ 金つてのが無くちや買えないってマジか？ どうすりゃ手に入るんだ？」

村人達が興奮を抑えきれずにはしゃぐのも無理はなかった。物心ついてからずっと、爺様から戒めのように聞かされた話。絶対にたどり着くことができないと、村の誰もが諦めた憧れの大都会。俺達はいま、そのワーレンに着いたのだ。

「へへっ」

嬉しかった。あの海の一戦まで、俺の人生はきつかけずらいまま終わるのではないかと、心が折れかけていた。無力感に押しつぶされそうになる胸の苦しさを、海にすべてぶつけることで耐えてきた。耐えて、耐えて、耐え続けて、ついにこの地へやってきたのだ。涙がこぼれそうだった。

う、
う、

小さな声が響いた。無意識に顔を向ける。

「……爺様？」

爺様は泣いていた。膝をついて、顔を覆いながら。こみあげてくる嗚咽にもがき、苦しんでいた。

二度と目にする事はなかったはずの、都会の喧騒。もはや記憶にも残ってはいない光景を目の当たりにした瞬間、祖父の心の堰はぶつりと切れてしまったのだ。言葉にはできない感情が次から次へと現れては爆発し、行き場を失った熱が涙となつてあふれ出てくる。涙も、鼻水も、よだれも、どれだけ流しても止まらない。それは祖父が理不尽に奪われた数十年の人生そのものだった。

事情を知る村人達は、老人を守るように囲んで、その背を黙って見つめていた。気の荒い船員達も何かを察したのか、誰ひとり近づこうとはしない。トワイヌとロレンスは船首に立ち、祖父を静かに見つめていた。

足が自然に動いた。かたわらに座つて、骨の浮いた背をさする。

「爺ちゃん」

いまだけは、そう呼ぶのが正しいと思った。

「爺ちゃん、良かったな。アカネイアに帰つてこれたんだ」

「うう」

「無駄じゃない。無駄じゃなかったんだよ、爺ちゃん。あの島での暮らしは、何一つ無駄なんかじゃなかった。誰にも馬鹿になんてさせない。爺ちゃんの人生は、無駄なんかじゃなかった。だって、これからも続くんだから」

「うう」

「ここからなんだよ。俺とやろう。一緒にやっついていこう。できなかつたことを、やりたかったことを、ひとつずつ取り戻していこう。俺も手伝うから。まだガキだけど、絶対力になるから。だから、頼むよ。頼むよ、爺ちゃん」

「うううううう」

か細く、皺にまみれた腕が二本、俺の背に回された。沸騰しそうなほど熱くて、重い。祖父の顔が俺のすぐ横にある。皺くちやになりながら、うん、うん、と何度も頷いていた。

港町の西日は、どこまでも暖かかった。

12. 欲望の町の聖者

アカネイア暦538年 モスティン9歳（i）

ワーレン滞在二日目にして、俺は早々にギブアップ宣言をする羽目になった。

「くっせえ……い！」

忘れていた。村の共用スペースは俺の執念により、常に消臭炭をセツティングする習慣を根付かせたのを。そんな環境から離れた先がどうなっているか、まるで考えもしなかった。

ワーレンにも消臭グッズはあるのだが、いかんせん都市の規模が村とは比較にならず、ほとんど普及していない。トイレの利用者層はガテン系や運搬業のおっちゃん達ばかりで、アンモニア臭なんぞ気にしてたら仕事ならん、とひつどい有様である。そこを発生源に拡散していくものだから、街中のいたるところで鼻をつまみたくなる。これが都会の洗礼かよ。

田舎者の俺だが、村では結構な綺麗好きの部類に入る。潔癖症とまではいかないが、使ったトイレや水場の備品まできっちり手入れする。衛生面の問題もあるし、次に使う人間の気持ちも考えてのことだ。

初めは「なんでわざわざそんなことするの？」と気味悪がられたりもしたが、何年もかけて認識を変えていった。綺麗な方が良くない？と女達をひとりずつ説得したり、子供達にご褒美をかけた掃除レースを毎日開催したりと、村の生活態度から改善していったのだ。そうした涙ぐましい努力がようやく実り、いまでは俺が何もいわなくても当番制が設けられ、自分から掃除するまでになった。俺は男泣きに泣いた。キモい、とマックスに相撲でぶん投げられるまで泣いた。あの野郎、技のキレ味が増してやがる……！

そしていま。ド田舎とは思えないくらいに清潔な村から遠く離れた都会に來た俺達は、久方ぶりの悪臭にぶっ倒れかけていた。いや無理だよ。思い出したくなかったよこの感覚。やつと忘れかけてたのにちくしょう！

にっちもさっちもいなくなり、トワイヌとロレンスのふたりへ対策するように直訴したところ、ぽかんと口を開けて固まってしまった。

「……そういえばそうでした。あの村ではほとんど嫌な臭いがしませんでしたね」

「確かに、帰ってきてからは妙に鼻がツンとしますな。気のせいだと思っていたのですが」

「自覚がなかったのかよ。」

快適に過ごせたのならありがたい。おかげでここの環境がいかに汚臭まみれか、身をもって理解したはずである。それをどうにかするための消臭炭。はやく用意してくれ、と説得を始めたのだが、ふたりはお互いに顔を見合わせたと思うと、意味深にうなずきあった。

「モステイン殿、そのネタを売りましょう」

「ネタ？」

「あなたの炭の話が本当なら、原価もそれほどかからずに商品として販売できます。包装と形状を揃える手間はありますが、専用の工場を用意すれば雇用も生み出せますし、新たな流行にもなり得る。そうです、トワイヌ？」

「間違いなく。加えて、ワーレンの衛生改善につながるとなれば、多くの客層からも支持を集められる。労働の効率も上がるなら、と雇い主も反対はしないでしょう。定着させれば一定の需要が見込めるのもすばらしい。真珠よりも手堅く、地に足をつけた商売といえるでしょう」

話を持ちかけた俺の目の前で、ふたりの会話がトントン拍子で進められていく。原価計算、初回生産、客層分析、販売範囲、宣伝告知、と難しい単語のオンパレードが続き、いよいよ俺の脳内がパンクしかけたところで、

「では、そちらの取り分はいかほどに？」

目を金貨のマークに変えたふたりに詰め寄られ、大急ぎで爺様にヘルプを求めた。村のみんな、都会は怖いところだ。

「せっかくなので『タコワサ』もツマミで売り出しましょうか。滞在中

に食べて以来、なぜか癖になってしまいました。漁の悪魔として捨てられていきますし、元手もゼロで仕入れられますよ。ワサビも調味料店をあたりましょう」

「トコロテンも良いと思いますよ。栄養が足りないのと薄味なのが若者には物足りないでしょうが、美容を求める婦人層には期待できます。何より、あの透き通る色が良い。着色料で複数の種類を販売するという手もある」

「それでモステイン殿」

「他に」

「ネタは」

「無いのですか？」

むらにかえりたい。

駄目？　そうですか、じゃあトコロテン作るのに余った木材の水鉄砲とかどう？　筒の後ろからスコスコ突いて小穴から水を飛ばすやつ。マックスに作らせたなら村の子供達のおもちゃになったんだけど。え、これもやるの？　作って実演しろと？　いまから？

……マジでやるの？

「怪我人にノコギリ持たせるとか、鬼かよあいつら……」

成し遂げてやったぜ。商会の工場に連れ込まれて、道具と素材に四苦八苦しながらも玩具をこさえて実演に成功。ロイヤリティ（権利使用料）になるならって爺様まで加担するとは思わなんだ。俺だって真珠以外の収入は喉から手が出るほど欲しいけどさ。少しは手加減しなさいよ、と愚痴を洩らしつつ町中を歩く。

時刻は夕方。市の露店はとつくに店をしまい、軒屋は従業員が明日の準備を早々に始めている。あと一時間もしないうちに、ワーレンは夜の町へと変貌するのだ。男達が日の出の内に稼いだ金を、女達が日の沈む内に受け止める。ただの一銭も無駄にはしない。道にこぼれた銅貨一枚をかけて殴り合う、そんな光景もめずらしくないのがこの町である。

当然ながら、9歳の俺が夜の町を歩くのは厳禁とされている。子供

の窃盗団にでも絡まれたら、片腕が使えない状態ではろくに抵抗できない。急ぎ足でトワイヌに用意してもらった宿場へと向かっているのだが。

「もし、その人」

悪意のかけらもない、耳に心地よく残るテノールの声をかけられ、無意識に立ち止まってしまった。

この町で声をかけてくるのは知り合いか、それ以外はタチの悪い客引きだとロレンス達から何度もいわれている。その忠告に従っていたのだが、足が自然に止まるのは初めてだった。

「良かった。お急ぎのようですが、止まってくれましたか」

年頃は14、5歳か、青地のローブをまとった少年だった。ところどころに布を当ててはいるが、薄汚れた印象はない。艶々と光る茶髪を後ろにまとめて垂らし、背筋はピンと伸びている。品行方正、いたって誠実な修道士にみえる。

「急いで宿に戻らないと叱られるんだ。おれに用？」

「はい。その腕が痛そうに見えたので、手助けをできないかと」

「薬の行商か何かで？」

「たまにやりますが、いまは違います。いかがでしょう。お辛いのでしたら、多少でも楽になれるよう、私がおまじないをしてさしあげます。もちろんお代はいただきません」

おまじないときたか。妙なのに出くわしたな、と思ったが、腕の痛みが酷いのは確かだった。俺が安静にしていけないのが悪いとはいえ、状況がそうさせてくれないのだから仕方がない。ずっと耐えてきたが、このままだとまずいかもしれない。楽になれるなら治したいのが本音だった。

「じゃあ、頼もうかな」

「わかりました。では、杖を軽く当てますね」

少年が節くれだった杖の先を持ち上げ、俺の肩に触れるか触れないかの位置で止める。迷いのない動作だった。何百回と繰り返ししてきた自然体。もし振るうのが剣だったら、と一瞬寒気が走る。

「我らが神に祈り奉る——」

何かの祝詞が歌うように唱えられる。テノールの声が耳から脳をくすぐるように浸透していき、目の前の少年から意識が離れない。信仰心には縁のない俺でも、不思議と心の安らぐ気がする。リラックスで眠くなってしまうような視界の端で、

杖の先がぼんやりと光っていた。

「!」

眠気が一気に覚めた。ガルダ海で見た黒装束の魔道を想起する。あれとはまったく違う、聖なる光のような力。これも魔道の一種なのだろうか？

「終わりました。腕はどうでしょう?」

俺の警戒を知ってか知らずか、少年が柔らかな顔で聞いてくる。

「……痛くない」

治った。治ってしまった。あの海戦以来、何日経つても続いた痛みが、嘘のように消えている。愕然としつつも肩をぐるぐるん回す。まったく痛くない!

「あ、ありがとう! あんた凄いな!」

「修行ですから」

「助かったよ! ……なあ、いくら払ったらいい? いまは待ち合わせがないけど、しばらくしたら大口の契約がまとまるんだ。必ず払うに行くよ」

「先ほどいったように、お代は受け取りません。これは私の修行なのです。師はおっしゃいました。私がこの目で見て、善かれと信じた相手を探せと。通りすがるあなたを見たときに思ったのです。師はあなたのことをいったのだと」

本物だ、と俺は確信した。目の前のこいつは何の打算も計算もなく、自分の信じた教えに従って動いているのだ。敬虔な修道士。人間の欲望で作られたこの町にも、欲望とはかけらも縁のない人間が存在できるのか。

「俺はモステイン。あんたの名前は?」

聞かなければならない。この恩を忘れてはいけない。この場だけの繋がりにはないために、俺は名前を聞いた。

「リフといます。どうかよろしく、モステイン君」
艶やかな茶髪をふわりとまとめた少年が、柔らかな笑みでそう名乗った。

13. パスタ・ラ・ビスタ

アカネイア暦538年 モステイン9歳(j)

北の港を占拠されてから、約二週間。ワーレンの商家達が連日参加しての会議は、トワイスの予想通り難航していた。否、させられていた、というべきか。

「進行を遅らせる者が複数います。偵察の報告を改竄する情報係と、ヤジを飛ばして混乱させる聴衆、さらには彼らを放置する議長役。良識派の商家達が告発の準備を整えてくれたので、今晚には動けるでしょう」

同じワーレンに生きる商人であつても勢力争いは発生する。ガルド海賊と組むことで勢力を増そうと企むグループもあれば、トワイスのように良しとしないグループもある。ほとんどはどっちつかずの日和見であり、その場の勢いで流れてしまう。昨日までは声の大きい妨害側が優勢だった。それを一気に崩そうと、水面下でトワイス陣営は動いていたのだ。

「派閥ってやつか」

「難しい言葉を使いますね。似たような経験が？」

「村でもあるからな」

『三人集まれば派閥ができる』はその通りだと思う。うちの家の四人にしたって爺様と俺の改革派、父の保守派、母の消極的保守派で三つに分かれてしまっているのだ。村全体の意見をまとめたらどうなるやら。

「いずれにせよ、ワーレンの軍が動くにはまだ数日かかります。それまでに契約の物資を揃えるのが商会の仕事であり、あなたの関心でもある。手を抜くことはありませんので、ご安心を」

「そこは心配してない……で、だ」

「俺はいまめっちゃ気合入れて粉こねてんだけど、手伝おうとは思わんのか？」

小難しい話を持ち込まれてげんなりしてるモスティンです。皆さ
んいかがお過ごしでしょうか。

ワーレン滞在四日目、ようやく腕の痛みから解放された俺は、前か
らやりたかったパスタ製作にチャレンジしていた。村では揃えられ
なかった材料がここにある。元手？ もらったよ、ロレンスからな！
「私の懐から出たものがどうなるか、見届けるのも責任では？」
そうですね。

ワーレンには既にパスタが存在した。ただしラザニアに使うラ
ザーニヤのような、板状の平たい麺が主流である。もしくはラザー
ニヤを数等分して捻じりを加えたニョッキみたいなショートパスタ。
基本的にはこれしかなく、ロングパスタがない。

違うんだ。

ワーレンのシェフの腕前は高水準だった。不味かったら客が寄り
付かないので当然とはいえ、村の貧乏舌に染まった俺にはすべてが絶
品だった。なにしろ牛も馬も羊も村にはいないからな！ 乳製品が
どれだけ食事の選択肢を広げるのか、身をもって理解した。口の中
でとろけるチーズの芳醇な味わいは罪そのものだよ。トマトの酸味も
あわさったラザーニヤの触感絶品だった。それは認める。

でも違うんだ。

俺が食べたいのはこれじゃない、もつと別の形をしていた、と味覚
が訴えてくる。中途半端に見た目が近いせいで、前世の記憶が刺激さ
れたのかもしれない。そんなことを本能にいわれても困るのだが、と
うとう身体が勝手に動いた。気がついたらロレンスに、

「新しいパスタを作るから、研究開発の資金をくれ」
「ほう」

舌が勝手に話したと思ったら承諾されていた。いよいよおかし
い。ロレンスも笑ってるんじゃないよ。またおかしなことを始めた、とか
いってないで止めてくれ。いまの俺は明らかにおかしいだろ。でも
止まらない。身体が市場へ向かって走り出している。

渡された財布を握り、駆け足で店という店を吟味する。小麦粉は産
地によって分類されているが、どれがどれだかわからない。俺がほし

いのは柔らかく、それでいて地面に落としたら頭まで弾むやつだ。店員に聞いたら苦笑されて、そこまで弾まないけど近いのがある、とアリティア産の小麦粉を渡された。そうかアリティアか、覚えておこう。

続いて新鮮な鶏の卵と、オリーブから抽出したオイル。卵は虫や菌が怖いのだが、見つけた店は生卵専門として長年ワーレンで商売する老舗だと紹介された。それを信じて買う。食中毒で死んだら怨霊として呪ってくれるわ。オリーブオイルは調味料店で難なく買えた。トマトと香草は途中の露店で済ますか。

物は揃った、あとは作るのみ。だが、

(本当にいいのか?)

キッチンナイフを握りながら考える。躊躇してしまう。

ロレンスの金も有限だ。そう何度も協力してくれるはずもない。できればこの一度で成功させてしまいたい。それにはもつと考えるべきではないか? 忘れ去った前世の記憶が鮮明になるまで待つべきでは?

悩む。手が動かない。木製のボウルにぶちまけた小麦粉の表面に顔が浮かび、はよやれ、と煽ってくる。うるさい黙れ、俺は前世の魂をパスタで取り戻すんだ。

パスタ。そう、パスタだ。名前はもうわかつている。舌から転がり落ちるようにスムーズな発音ができる。なのにイメージが浮かばない。あと少しなのだ。なぜそれが出てこない。ああ――!

「悩む必要はありません」

声がした。

「私はあなたを（おかしなやつだと）信じています」

「失敗こそが成功の道筋になるのです（失敗作も別の商品開発に使います）」

「資金ならご心配なく。その程度の蓄えなら、尽きることはありません（経費で落とします）」

「本能は時として理性を凌駕する。あの海戦で、あの島の争いで、それは十分に理解したでしょう。あなたはただ、あなたの手の動くままに

従えばいい（無駄に考えてないでさっさと手を動かさない）」

「さあ、やってくださいモステイン！ あなたの作るパスタが、アカネイアに新しい食をもたらすと信じて！」

「おおおおお!!」

よくわからない情熱と興奮が麻薬と化して脳を支配する。無駄に気合いの入った叫び声をあげながら卵をかち割り、塩と一緒に小麦粉へ投入。骨も砕けよと両手を突き刺し、親の敵とばかりに揉んで揉んで揉まれて間違った自分の指だこれ揉んで揉んで揉みしだき——

「俺はなにをやってるんだ」

「揉んでるだけですわね」

ひたすら生地をこねるだけなので熱も冷めた。いま思うと、ロレンスも明らかにおかしかった。目が金貨のマークになってたような気がするのだが、さすがは名門貴族のお坊ちゃんらしく立ち直りが早い。自分だけ何事もなかったかのように振る舞っているが、あいにく俺は覚えてるからな？

わりとあっさり思い出してしまった。苦勞することもなく、生地に指先を突っ込んだ瞬間にイメージがすべて浮かんだ。初めて漁に出たときと一緒に、習慣に染みついた記憶は死んでも忘れないのかもしれない。タコワサもすぐに出てきたしな。

こねるのはおしまい。寝かせるのにかかる2時間でロレンスとの商談を終わらせ、トマトソースもこきさてしまう。ここからが本番、丸めた生地を薄く伸ばしたら、いよいよナイフを手取る。ラザーニヤなら長方形だが、俺がしたいのはスパゲッティだ。危なげなく棒状にカットしていく。

「確かに、これは見たことがない。ロングパスタとでもいいですか。麵そのものが主役になれるのですわね」

「ラザーニヤもいいけど、こっちもいけると思うんだよ」

切ってしまえばあとは流れである。オリーブオイルと一緒に茹でて、ざるで湯を切り、トマトソースと和えたらハーブを散りばめて完成。辛味が欲しかったらスパイスを買って足せばいい。男の素人飯

としては上出来だろう。

「完成ですか」

「美味そうじゃな」

「鼻をくすぐりますね」

食卓まで運んでいったら、明らかにそれまでいなかった顔がふたつ増えている。爺様はまだいいが、なぜあんたがいるんだリフ修道士。「ミサの帰りに通りがかったところ、モステイン君の料理する姿が見えたので。こちらの方に事情を聞いたところ、お誘いをいただきました」

「腕を治してくださいさつたそうではないか！ 失礼をしちやいかんぞ、モステイン。お前の作るメシは美味い。この方にも味わってもらえ」「リフ殿の噂は存じています。これを機会に、私も教会に足を運ぼうかと」

「教会か……いつか村にも建てたいのう。いろいろと問題が山積みじゃが」

勝手に盛り上がる三人の前に、俺は盆に乗せたトマトパスタの分量を見て、盛大に肩を落とした。

四人分はないだろ、これ。

集団にはトップの性質が色濃く反映される。

規律を重んじるなら軍隊のように整然となり、自由を求めるなら風紀が乱れやすく緩やかな組織になる。自分達のボスが求める色に染まろうと、部下が空気を読むためである。つまるところ、集団とは率いる者の内面が具現化された結果に過ぎず、上に立つ者の顔を見れば行き着く先はおのずと知れる。

では、無駄に力だけはある脳筋が率いれらばどうなるか？

バーンズ率いるガルダ海賊は、リーダーの意のままに北の港を破壊し尽くした。何十年もかけて整備された船着場はドクロの旗を掲げた大量の海賊船に占拠され、すべての商船は停泊の邪魔になるからと徹底的に破壊された。市場の店という店は略奪され、町のいたるところで黒煙が上がっている。すべての人間は突然やってきた暴虐王の

所有物となった。気まぐれに殺されるか、犯されるか、奴隷にされるか。そこに本人の意思は存在しない。

住民は逃げることもできなかつた。逃げようにも行き先がない。彼らの暮らす土地は三方を海に囲まれ、唯一残された西方には長く険しい山脈がそびえ立っている。魔獣に喰い殺されるか、海賊の気まぐれに怯えながら生きるかの二択しかないのだ。

たった二週間で町の火は消えた。道は汚物と死体が転がるままに放置され、掃除する者もない。悲鳴と嬌声と破壊音がこだまする中、元凶はアルコール片手に酒場の席を設けていた。

「この北の港は、サムスーフの山の恵みを海路でワーレンに送り届ける中継地だ。陸路なら数倍の時間と労力をかける道のりが、この有無で大きく変わる。戦略的な価値はもちろん、商売の点でも欠かせない。もちろん、あたしらにとっても大事な金づるさ」

「ふうん」

話などお構いなしに、手元の瓶からワインをがぶ飲みする。オレルアン産のブドウというが、個人的には美味ければどこでもいい。今日の酒は口に合った、それで十分じゃねえか、と心中で呟く。

「——そんな重要な拠点を、商人すべて皆殺しにしたうえに、何もかも台無しにして飲む酒は美味いかい？ ええ、バーンズさんよ」

「最高だな。いうことがねえや」

げふ、と酒臭い息を吐きつける。浴びせられた相手が眉を寄せるや、握り締めていた乗馬鞭をひび割れたテーブルに叩きつけた。

「ふざけんじやないよ！ これのどこが最高だい!? ここが金を生んだのは、貿易の途中に寄った商家がたんまり金を落とすからだ！ それをあんたは港ごとぶち壊しやがった！ ここがまた金を落とすようになるまで、あんたはどうやって食ってくつもりだ!？」

「小難しいこと抜かしてんじやねえよ、クソアマがあ！」

お互いを隔てていたテーブルを蹴倒す。空になった瓶を叩き割り、刃先を突きつけた。

「俺達は海賊だろうが！ 気に入らねえやつをぶつ殺して！ とびきり良い女を抱いて！ 浴びるほど酒を飲んで！ 自分の思うままに

生きて死ぬ！　それが海賊の生き様だろうが！　都の貴族みてえな能書き垂れてえならよそでやれ！　俺のやり方に文句があるってんなら、てめえだろうと容赦はしねえぞ、ブレンダ!!」

「……そうかい。付き合ってられないね」

愛想が尽きた、といわんばかりに冷笑し、ブレンダが背を向けた。破碎した瓶と家具の散らばる店内を、艶のあるブーツが進んでいく。

「どこへ行く気だ？」

「帰るのさ。あたしらの家にね」

「命令だ、許さねえ。ここの頭は俺だ。俺に従え！」

「あんた、いま自分でいったことも忘れたのかい？」

ランタンの灯に照らされた鞭が、海色に澄んだ青髪豊かな頭を指した。

「気に入らねえやつはぶつ殺す。あんたは昔から気に食わなかったが、どうやら潮時が来たらしい。次に会ったら殺し合いだ。せいぜい、自分だけしかない猿山で生きるんだね」

「待つ……」

男の声に耳を貸すことなく、緋色に染め上げたマントを翻して女海賊ブレンダが店を後にする。海賊の身を隠して訪れた店は、そのことごとくが破壊されていた。次に訪れるときがあったとしても、同じ店には戻るまい。あの上等なラムをくれたバーテンは、店の二階で無惨に横たわっている。

ブレンダの指示で街中に散っていた部下達がひとり、またひとりと列に加わる。見た目こそ海賊だが、いずれも軍人じみた風格さえ漂わせる。明らかに他の海賊達とは練度が違っていた。

女傑を先頭にした一団がとうとう船着場に到着する。道を遮る海賊達を片っ端から殴り飛ばし、抱え上げては海に投げ込んでいく。罵声も悲鳴も意に介さず、全員が一隻の船に乗り込むと、ひととき大きな海賊旗が風に揺られた。

武装船ガルディア。

ガルダの名を冠したこの船こそが開拓都市ガルダの公用船であり、ブレンダの城だった。

「婆様のお使いは終わった！ ガルダに帰るよ、お前達!!」

「了解！ お嬢のお帰りだ、全力で飛ばせ！」

有象無象の群れを散らすように、ただ一隻の船が北へ進む。目的地はガルダ港。モステインの村とは反対の、西方に位置する開拓港である。

14. 上下にきらりと光るたま

アカネイア暦538年 モステイン9歳(k)

「ダメよ。話の前提が整ってないもの」

「駄目かあ」

「駄目もだめ。ダメダメよ」

「……」

突然のダメ出し三連発で撃沈したモステインです。俺はまだいいが、隣の爺様は意気消沈を通り越して沈痛に至っている。もっと早くからやっておけば、という後悔の呟きもセットだ。

トワイス商会との真珠取引は滞りなく行われ、村に必要な物資がある程度は揃ってきた。消臭炭や食材の新メニュー、子供用玩具などの売上の一部をロイヤリティとして受け取る契約など、真珠に頼らない収入源も着実に増えつつある。ワーレンで売れば売れるほど村も儲かるのだから、俺も爺様もウハウハである。だからって毎日毎晩カインズメにされるのは困るが。

物はひと段落がついたので、次は人を雇わなくてはならない。トワイスにアドバイスを求めたところ、まずはと紹介状をひとつ渡された。名前はブラックリー。五十歳にさしかかった細身の男で、ワーレン郊外の一軒家で悠々自適のひとり暮らしを楽しんでいるとか。

元々は建築技師で、ワーレン中のあらゆる商売の建物に関わっていたが、途中から町そのものの機能性に興味を持った。住宅と店が乱雑に並ぶ通りと、市場と家とを分けた通り、どちらが町として機能的かを徹底的に調べたのだという。自腹で区画整理と行政の研究をしたわけだから、凄いというほかない。天才はどこにでもいるんだなあ、としみじみ思った。

新しいものに目がないと聞いたので、俺特製の寒天(ブルーベリー仕立て)を土産に持っていくと、こころよく出迎えてくれた――
までは良かった。

「あらあら、いらっしやい！ トワイスさんから聞いてるわよ、ずいぶん苦勞してるんですって？ お爺様も上がって上がって、ステキなお

土産をみんなで食べましょう！」

オカマさんだ。

なるほど細身である。後ろから見たら女と間違えてもおかしくない線の細さ。服も装飾品も、そこらの男達とはセンスがケタ外れに違う。本物の審美眼をもった知識人なのだ。

でもオカマさんだ。

雑多な人の往来を避けて郊外に暮らすのは、自分の感性に集中するため。壁という壁、あらゆるスペースに木炭で描いた建築のデッサンが貼られ、机には驚くほど立体的に描かれた建物をずらりと並べた一枚絵があった。ここは彼のアトリエなのだ。これほど繊細な感性を発揮するには、場所が限られるのも頷ける。それを可能にするだけの資産と人望も兼ね備えた、当世一流の職人といえるだろう。

つまり、最高のオカマさんだ。

俺が妙に納得してしまったのをよそに、横の爺様は完全に機能停止してしまった。数十年の村暮らしどころか、人生でも会ったことのない人種に遭遇したためだと思われる。何度か肘でこづいたら復帰した。

「ありがと、美味しかったわ！ 口寂しい、でも太りたくないって乙女の願いをかなえてくれるステキなお菓子ね。あんまり栄養はなさそうだけど、美容食品としてとびっきりの需要がありそう！ いいわいいわ、あたしからも宣伝してあげる！」

気に入ってもらえたら何よりです、本当に。この人に認められたら本物だろう。俺も鼻が高くなる。

掴みは上々。最高の滑り出しから本題に入っていく、村の置かれた状況、俺と爺様の目標、そのためにトワイヌ商会と結んだ契約について説明する。興味深そうに頷いていたのだが、村そのものについての話題にさしかかったところで突然目を覆ってしまった。

「……モステイン君、それはダメよ。いけないわ」

「ブラックリーさん？」

「村を変えたいと夢を持つ。ステキなことよ。こんな辛い時代に生まれて、海賊とも戦って、遠い島からここまで無事に渡ってきた。誰に

だつてできることじゃない。もし仕事を受けるなら、私も張り合いがあるつてもものよ……でもね？ あなたも、お爺様も、肝心なことを置き去りにしてしまっているわ」

柔和な笑みを一瞬で消し去り、職人として生きた男の顔が俺と爺様の心を殴りつけた。

「村のみんなはどう思ってるの？」

痛いところを突かれた。気づいてはいたが、触れてこなかった致命傷を見事に貫かれた。

「町も村も、ひとつの共同体なの。長が道を示すのは義務であり役目よ。けれど、長の下で生きる人々にだつて意思があるの。それもひとつだけじゃないわ。一人ひとりが、嘘みたい複雑な心をもっているのよ。長は彼ら全員に心を砕かなくちやいけない。たとえ良かれと思つた行動でも、全員が望むものとは限らないから。あなたの村に100人いるのなら、100個の思いが返ってくるはずよ。まずはそのことを確認して。村に住む人達が、本当は何を考えているのか、何を望んでいるのか。それも知らないで、適当な仕事はできないわ」

言葉がない。何も出てこない。言い訳ならいくらでもあるのに、口に出すのも情けない。その瞬間、俺は自分の甘つたれな心から目を背けることになる。

放置していたつもりはなかった。状況があまりにも急展開に過ぎたせいだ。トワイス商会の商船員達の介抱に捕虜の始末、ワーレン行きの選抜と村を守る人員の指名、自分達がない間の打ち合わせ。とてもではないが、村全体で話し合うような余裕はなかった。それでも。

その時間を無理にでも作っていたら、目の前の逸材をスカウトできたかもしれないのだ。

ちらりと横を見る。爺様は目をつむっていた。テーブルに隠された拳が震えている。ブラックリーの言葉への怒りではない。この状況を招いた自分への怒りだろうか。

いま、爺様の脳内では村の改革に反対する顔ぶれがありありと浮かんでいるに違いない。筆頭は現村長、爺様の息子であり俺の父。中高

年層には父の支持者が多数いる。一家の大黒柱に無条件で従う妻子も含めれば、おそらくは村全体の三分の一か、多ければ半数が父につく。

彼らとぶつかる 때가 来たのだろうか。もはや避けては通れそうにない。どんな結果になるにせよ、俺は村を二分する覚悟を決めなくてはならない。でなければ、村の改革そのものが頓挫しかねなくなつた。

意気消沈した俺達に、ブラックリーは紅茶で唇を潤してから、にっこりと笑った。

「次よ」

「？」

「またワーレンに来るんでしょう？ そのときまでに、村の意見をまとめるの。もちろん反対する人もいるでしょうけど、賛成する人だつて大勢いるはずよ。そうしたら、お互いに話し合うの。何をやっていいか、何をしたらダメか」

指折り数えていく。

「たとえば……もう決めたかもしれないけど、商船の停泊する船着き場は作るのか、とか。これは誰も反対しないでしょう。次に、海賊と戦う兵隊は何人まで雇うのかも必要ね。そして、新しい仕事をどの村人が担当するのか。これが一番揉めるんじゃないかしら。ただでさえ毎日大変なのに、これ以上できるか、なんてね。そういう面倒なことも、せくくんぶ話し合うの。そうやって、ひとつずつ解決していくのよ。石を積み上げるように」

片目をつむり、人差し指を一本だけ立ててみせた。

「村をひとつにしなさい。その時こそ、あなたのステキな夢をこの私、ブラックリーが支えてあげる」

「フラれたなあ、爺様」

とぼとぼと宿場への帰り道を歩きながら、ため息をつく。トワイスの人選は的確だった。ブラックリーは自分の仕事にプライドを持つた、ワーレンでも一、二を争う職人に違いない。

二流三流の相手なら、目先の金に飛びついたはずだ。しかしブラツクリーは違った。丁寧に断りながら、俺達への助言も、仕事を受ける条件も提示してくれた。要求をクリアすれば受ける、とまで宣言したのだ。破格の対応といっても過言ではない。

ともかく、言質はとれた。村を変えていくために必要な頭脳とのコネが作れた。今回はそれで良しとしよう。くよくよしても始まらない。次に向かって動かなくては、村の寿命が縮んでしまう。

「……爺様？」

俺に返事をするのも忘れて、爺様は黙り込んでいた。思えばブラツクリーとの商談の途中から様子がおかしかった。沈痛な面持ちのまま、何かを必死に案じているような。

覗き込む俺に気づいて、爺様が立ち止まった。

「む？ どうした、モステイン？」

「どうしたじゃないよ、爺様。さつきからずっと黙ったままじゃないか」

「……そりゃあ、の。年甲斐もなく手抜かりを残してしもうたわ。情けなくてな」

あごの白髭をいじりながら、爺様が首を二度、三度と振る。

「ま、仕方がなからう。今日のところは帰るぞ、モステイン。こうなったら海賊船二隻を停める船着き場だけでもこさえにやらん。それだけは村の全員が賛成するじやろう。いや、意地でもそうさせる。反対するものを説得して回らんとな」

自分に言い聞かせるように話しながら、爺様が再び歩き出す。ブラツクリーの家を後にするときよりも早足だった。慌てて俺も追いかけながら、離れていく背中を見る。

ほんの少し、爺様が小さくなってしまったような気がした。

15. 暴威失墜

アカネイア暦538年 モステイン9歳(1)

ブラックリーに断られた俺達だったが、やるべきことは確認できたし、いまできることを果たそうと気持ちを切り替えた。ついてきた村人4名も総出で輸送船に物資を詰め込んでいき、着々と準備を整える。

今回村へと持ち帰る品目は以下。

・村にはない食料(アリティア・オレルアン・グルニア産の小麦など)

・武器(消費した矢、新しい剣・槍・斧)

・書物(アカネイアの文字手習い本)

・工具(建築・船)

・衣類(アカネイアの一般流通品)

・海図(トワイヌ提供。村―ペラティーワーレンの航路)

・嗜好品(酒)

もつと詰め込みたかったが、今回は断念。むしろ物資よりも人員で収穫があった。

トワイヌに村の本格的な船着き場の建設を相談したところ、引退して間もない職人がいるとのこと、大急ぎで紹介してもらおう。短く刈り込んだ白髪にハチマキを締めたいぶし銀の初老男性だったのだが、なんとフィットマンの師匠だと聞かされてお互いに驚いてしまった。

「三年間みっちり仕込んで北の港に送ってやったつてのに、海賊に占拠されたっていうじゃねえか。柄にもなく心配してたんだが、まさか下っ端にされてあんたらに助けられたとはなあ。ま、いいだろ。あいつの顔を見るついでに、住みやすければそのまま移住させてくれや」
さすがは腕一本で生きてきた職人というべきか、フットワークが凄まじく軽い。向かう途中で海賊に襲われる危険もあるのに、そんなきやそんときよ、で笑い飛ばされてしまった。見習いたい、このクソ度胸。

次に、これは父にも頼み込んで許可してもらった人材で、村の護衛

と稽古をつけてくれる教官役。こないだの海戦ではつきりと思いきらされたが、俺達には戦う力が圧倒的に足りない。毎日のように鉄火場を生き抜く海賊相手に、いまの村の戦力だけでは勝てないことを痛感した。どんなに漁が忙しくても、一日の中で武器を手にとって稽古する時間がほしい。それには信頼できる教官が絶対に必要だった。

航海前から伝えていたおかげで、こちらは早々に確保できた。かつてワールンの闘技場で新米を鍛え上げてきたベテランで、魔道以外の武器をあらゆる使いこなせるプロだという。なぜそんな人がド辺境に来てくれるのか疑問なのだが、本人いわく

「飽きた」

の一言で済まされた。十五の歳から剣闘士デビューして三十歳で引退、それから二十年を教官として生活してきたが、いい加減ワールンから離れたくなったそう。自分を必要とする危険な村があるならぜひ行きたい、とまでいつてくれたので、俺も爺様も喜んで承諾。彼も村に移住となった。

村へと戻るための船は二隻。どちらもトワイヌ商会の船である。北の港での失敗を教訓に、選りすぐりの船員達を選抜したという。物凄くありがたい。一流の船員がどうやって船を操るのか、じっくりと勉強させてもらおう。

物資も揃い、人員も集まった。治安についても、ワールン東の海には依然としてペラティ海賊の船は少ないと報告があった。やはり北の港付近に集結しているのだろう。無事に帰るなら、いまが絶好のタイミングである。

期待と不安に包まれながら村を出たのが二十日前。ワールンでの生活は八日間で終わりとなった。大量の船がひしめく船着き場の一角に集合した俺達は、見送りにきてくれたロレンスとトワイヌ、リフ、ブラックリーに別れを告げる。

「あなたと過ごした時間は面白かったですよ。新しい商品開発も進みましたし、次回もよろしくお願いしますね」

「おい、目が怪しくなってる」

「おっと失礼」

……もしかして、ロレンスがおかしくなったのは俺の影響なんだろうか？ 初対面のときはもう少し猫を被っていたというか、貴族のお坊ちゃんをやっていたはずなのだが。いくらなんでもここまで酷くはなかったような気がする。

「冗談です」

本当か？

「これでも感謝しているんですよ。あなたと会ってから、肩の荷が下りたように動きやすくなった。もう少し自由にやります。ですから、生きてまたこの港町に来てください。村のためにも、私のためにも。何より、あなた自身のためにね」

突き出された拳に、俺の拳を合わせる。お坊ちゃんにはありえない拳骨が音を鳴らした。

「青春ですね。美しきかな」

「素朴な田舎少年と貴族の美少年の取り合わせ……いいわ！ ステキよ、あなた達！ 有名になったら本にしてあげる!!」

「その暁には出版しましょうか。版元も兼ねますので」

リフ修道士、そのふたりを止めてくれ、はやく。得体のしれない寒気がするんだが。

なんとも締まらない別れになってしまったが、これで俺達のワーレン滞在は終了となり、村への航海が始まった。次の定期便はおよそ三カ月後になる。

果たしてそのとき、村はどうなっているのだろうか？

モステイン達が帰りの航海に発ってから三日後。

ワーレン商会議は全会一致で北の港の奪還作戦を可決し、多数の傭兵を軍船で派遣。ペラティ西の入り口を封鎖していた海賊船が慌てて北の港へ逃げるのを、すべての船が一糸乱れぬ操船で追撃する。

相手はガルダ海賊とペラティ海賊の混成。普段から縄張り争いで衝突する両者にチームワークはいつさい存在しないが、勝ち馬に乗ったときの勢いは恐ろしい。伏兵による再包囲を警戒しつつ北の港へと向かったのだが、事態は思わぬ方向に転がっていた。

「船多数、海に出てくるぞ！ ……いや、違う？」

「どいつもこいつも、船首がバラバラに向いてるじゃないか。まるで連携がとれてないな」

海戦に慣れたワーレン傭兵が呆れるほど、眼前の海賊達は慌てふためいていた。目の前に幾つもの軍船が迫っているにもかかわらず、戦闘態勢に入っていない。本拠のガルダ海・ペラティ海に撤退するのはいいとして、逃げ場のないサムスーフ側へ走らせる船もあれば、あろうことか一隻で船団に突っ込んでくる船まであった。さては囷か、と警戒するも、先頭の軍船に軽くひと当たりされただけで降伏してくる軟弱さである。

「どういうわけだ、こりゃ？ 襲うものがなくなって、仲間割れでもしたのか？」

「……ああ、そういうことですか」

困惑する傭兵の隣で、見学がてら参戦したロレンスが北の港を指さす。船着き場からルートを辿るように西へなぞり、天高くそびえる山脈で止まった。

「サムシアンですよ。この港は、彼らの縄張りでもあったのですね。収入源を台無しにされたのだから、報復に動くのは当然です」

サムシアン。

サムスーフ山を根城に活動し、山脈の隅々までネットワークを張り巡らす一大山賊組織である。ガルダ海賊やペラティ海賊が海を荒らすように、サムシアンは山を縄張りとする。陸路の商人を襲い、鎮圧にきたアカネイア軍にもゲリラ戦を仕掛けて返り討ちにするほどの猛者集団。陸に足をつけた海賊が勝てる相手ではない。

ロレンスの推測は正しかった。サムシアンは彼ら独自の情報収集によってワーレンの行動を知り、完璧にタイミングを合わせる形で北の港の西側出口を急襲。我が世の春を謳歌していた海賊達を片っ端から排除していった。三週間もだらけきったバーンス達に、険しい山で毎日を死に物狂いで生き抜くハンターの群れと戦う力はない。あつという間に港の支配は崩壊し、我先にと船に飛び乗って逃げ出す始末だった。

「山猿どもがあ！ 同じ賊だろうが、俺達を敵に回すつてのか、ああ!？」

ひと暴れもできない内に敗者となったバーンズが船上から罵倒するが、サムシアンは鼻で笑って答えない。お返しとばかりに鳥羽根の矢を飛ばし、バーンズの頬を皮一枚かすらせてみせる。

バーンズはおろか、ロレンスの指摘も彼らには的外れだった。そもそもサムスーフ山脈に生きる彼らを山賊として認識するのは、アカネアの粹組みに属する人間の都合でしかない。もともと彼らはサムスーフ土着の先住民であり、あとから支配者として乗り込んできたアカネアは敵以外の何者でもなかった。ろくに恩恵も与えずに山賊扱いしてくるアカネア貴族のサムスーフ候ベント家に従ういわれは当然なく、かれこれ数十年に渡るゲリラ戦を続けている。

彼らにとっても北の港は重要な収入源のひとつだった。縄張りに入侵されれば襲うし、敵対商家を誘拐して身代金を要求することもあがるが、彼らも市場には欠かせない客であり、同時に商売人でもあった。木彫りの民芸品や動物の剥製、船用の木材を売るかわりに、良質な塩をはじめとした海の幸を購入する。彼らなりの持ちつ持たれつの関係を築いていたのである。

バーンズは、その関係を根本から消滅させた。ブレンダが怒り狂ったのは、山賊という言葉では簡単にくくれないサムシアン存在を重視していたからに他ならない。サムスーフ山脈はガルダ港のすぐ左である。大急ぎでバーンズを切り捨てて、ガルダ海賊を代表してサムシアンと交渉しなくてはならなかった。

「クツソがあ……撤退だ！ ペラティ海に走れ！」

「ガルダには戻らねえんですかい!？」

「俺にあのアマの下につけていいいてえのか!? とつとといけや、能無しがあ!!」

自分が集めた仲間達を囷にして、ワーレン北部を機能停止に追い込んだバーンズの船が離脱する。大混乱になった海上の制圧にワーレン傭兵が手一杯になってしまい、船は追撃されることなくペラティへとたどり着く。男の悪運はいまだに尽きる様子を見せなかった。

16. 躰というもの

アカネイア暦538年 モステイン9歳（m）

「なぜそこまでやった!？」

物心ついてからいままで、一度も聞いたことのない父の怒声が響いた。普段の穏やかで、誰に対しても角の立たないように接する気弱な姿からは想像もつかない。父の本気の怒りが俺に向けられていた。

「私が君達に任せたのは、村として取り決めた物資と人員の受け取りについてだけだ！ なぜそれ以上の、村全体に関わる事案を私や古株達に相談もなく決めた!？ そんな許可を出したつもりはない!」

「俺は村のために考えてやった! 父さんが村に残るっていうから、爺様と相談した上でやったんだ!」

「それこそ筋が通らない! 父さん、あなたもあなただ! どうして断りもなくそんな真似を許したんです!？ 子供を守るだけじゃない、道理を教えるのが大人の役割でしょう!」

矛先が隣の爺様に向けられる。黙ってうつむいていた爺様は、意を決したように口を開き、

—— 深々と頭を下げた。

「……すまん。今回はワシの独断じゃ。お前や村の者に反対されたとしても、絶対に叶えたかった」

「爺様!？」

シヨックだった。父に何の反論もせず、淡々と謝罪する爺様の姿が信じられない。それも、俺をかばって、すべては自分のわがままだったと責任を被ろうとしてまで。

違うだろう。そうじゃなかった。俺も爺様も、ふたりで一緒に商談を進めたじゃないか。俺がネタを出して、爺様がそれを修正して、トワイズ達にうんといわせるまで毎日悩みぬいた。俺も納得してやったんだ。爺様ひとりのせいじゃない。

一カ月ぶりの村への帰還。マックス達と再会のあいさつを交わし、ワーレンでの活動を報告していたときに、和やかなムードは一転して険悪そのものになった。船大工と武芸の教官ふたりをスカウトした

こと、予定通りの物資を調達できたところまでは順調だったと思う。ところが、俺の考案した消臭炭や食事、玩具のロイヤリティについて触れた途端、父の態度は急変した。

「私がどうして怒っているのか、君にわかるかい」

いわれなくてもわかってる。ただ単に、俺が納得できないだけだ。子供の言い訳でしかないのだ。俺の言い分など百も承知なのだろう、父は続けた。

「君が何の権利もなく、村の今後にかかわる契約を結んだからだ」

今回の航海において、俺の役割は世間を知ることだった。ワーレンという大都会で見聞を広めて知己を得る。その体験を村に持ち帰って、マックスのような若者組、まだまだ動ける大人組に伝えてまわる。それ以上のことは任されていなかった。いや、許されてはいなかったのだ。

「君が自分ひとりのために働くなら文句はなかった。都会の空気を味わうのも経験になるからだ。しかし、君はいま、村のために契約をしたといったな!?! 村長の息子でしかない君に、そんな権利があると思っているのか!?! 君ひとりの独断で村を左右させる、そんな真似を許すはずがないだろう!」

村に引きこもるだけのあんたにいわれる筋合いはない。

誰のおかげでワーレン相手にコネを結べたと思ってる。

俺がいなければ真珠以外の取引もなかったじゃないか。

……反論ならいくらでも浮かんでくる。けれど、いえない。いったら俺の負けになる。

『たとえば良かれと思った行動でも、全員が望むものとは限らない』

ブラックリーに諭された言葉が頭をよぎって離れない。彼はこのことを予見していたのかもしれない。

俺は何の権限もないままに夢を語るだけの小僧で、爺様は先代の村長であっただけの老人でしかない。そんなふたりだけで、どうして村のすべてを決められるのか。利に明るい者からみれば、とんだカモである。トワイヌも助けられた恩こそあれ、商売人としてギリギリまで天秤にかけた利益配分を持ちかけたはずだ。

「……君の村を思う気持ちが悪いとはいわない。頑張っていることも知っている。家族だからね。けれど、必ず筋を通しなさい。道理をふまえて、ひとつずつ解決していきなさい。それを省いてしまったら、どんなに正しくても、すべてが無意味になるんだ」

俺と爺様のしたことは、村長である父からみれば越権行為だった。父だけではない、村に生きる人々の総意も確かめないまま、村の責任で幾つもの契約を結んだ。村のために動いていたはずなのに、村に生きる人々を置き去りにしてしまったのだ。

何もいえず黙り込んだ俺に、父が一瞬だけ穏やかな顔つきに戻った。すぐに強張らせて、

「次の定期便に乗せる面子だけれど。君と父さんが指名した面子は、村長として許可できない」

「なんでだよ」

メンバーの選定はあらかじめ、若者優先の構成にしてあったはずだった。それも否定されるのか。

不機嫌な声を洩らした俺に、父が懐から麻布に包まれた袋を渡してきた。指の腹にあたる感触が硬く、鋭い。注意して広げてみる。

それは矢じりだった。黒く変色した血と、こびりついた脂肪の臭いが俺の鼻腔に突き刺さる。強烈な刺激臭に目がくらむと同時に、この凶器が誰を殺したのかを理解してしまう。

「ベンソンの肩の深くに残って、死ぬまでとれなかったんだ」

背筋が凍る。あの海戦で二手に別れたとき、頭目の乗る船に向かわせたひとりの名前だった。肩に矢を受けて横たわっていたが、俺達の出発する朝には笑顔で見送ってくれたのに。

「ベンソンは二週間以上も高熱にうなされて、苦しみながら死んでいった。だが、君を恨むようなことは一言もいわなかった。俺のかわりに村を頼む、村を守れ、そう伝えてくれと私に言い残した。ベンソンに家族はない。彼の家は、彼の死をもって途絶えたよ」

強烈な吐き気が胃の奥から襲い掛かった。全身の熱が一瞬で消え失せる。自分が自分でなくなってしまったような錯覚がする。掌に乗った小さな金属が、とてつもなく重いナニカに変わってしまった。

持てない。

持ちたくない。

放り捨ててしまいたい。

できない。それだけはやってはいけない。この重荷を捨てれば、俺は彼の遺志を踏みにじってしまう。商会とのコネが欲しいという、どうしようもなく自分勝手な俺の欲が彼を死なせたのだ。その事実から目をそらせば、村の跡継ぎとして俺がやってきたすべてが否定される。震える手を、もう一方の手で無理矢理おさえつけた。

「村長として伝える」

父の言葉は平坦だった。いまの俺がまともではないから、そう聞こえたのかもしれない。

「モステイン、君は今晚の村会議を欠席し、明日の朝まで家から出ないように。おそらく深夜までかかるだろう。子供は先に帰らせるから、マックスが訪ねてくるはずだ。そのときに詳細を聞きなさい」

掌中の塊を前にうなだれる俺を背に、父と爺様が家を後にする。茶を入れてくれた母がなにかいつている。耳に入らない。なにも聞こえない。ただ、血錆の苦味だけが意識を支配する。後悔というには重すぎる味だった。

母もお手伝いさんも会議に出席するため、残されたのは俺ひとりという生まれて初めてなぐらい静かな家で待っていると、真っ先にマックスが来てくれた。

「どうしたんだ？ やけに沈んでるな」

「……いや、大丈夫だ。会議はどうなった？」

「揉めたよ。あんなに大騒ぎになったのは初めてじゃないか？」

ワーレン派遣組が無事に帰還したことで、今後の村はどうしていくべきか、村人全員の意見を忌憚なく出すようにと前もって伝達されていた。その結果、村長と中高年のまとめ役達のグループ、爺様とそれ以外の者達とで大紛糾がおこり、解散となつたいまでも大論戦が繰り広げられているという。

なぜそうなったのか？

「村長さん……お前の親父さんは、何日も前から村の爺さん達と話し合ってた。こうなることを予想してたんだよ」

遠いワーレンの地で、俺と爺様が懸念していたように、父もまた準備をしていたのだ。当たり前のように、当たり前前の段取りを踏み、当たり前前のことをする。それが父なりの、村への筋の通し方ということか。

村は二分され、村人全員が自分なりの旗色を掲げなくてはならなくなつた。

時が来たのだ。

「お前は慕われてるよ、モステイン」

マックスが見たところ、俺を支持してくれる層はそれなりに多いらしい。子供達はもちろん、同年代から二十歳までの青年組は全員が味方するといつてくれた。憧れの都会を経験したうえに、コネまで作ってくれた英雄だからだそうな。

中年層でも、あの海戦で俺の活躍を見た全員が支持。意外なことには、老年層でも何人かが認めているという。どうしてだろうか？

「まだ幼いのに、村のために率先して戦ったから、だつてさ。村を救ってくれた人間を信じなくてどうするって笑ってた。あの戦いが認められたんだよ、モステイン」

まとめてみれば、村は改革派が7割、保守派が3割とまでわかつた。思ったほど状況は悪くはない。

なら、俺にもやれることがある。

「反対するみんなと、ひとりずつ話し合おう」

中年層はまだ鞍替えの希望が持てる。頼りにするのは、連れて行った4人の漕ぎ手だ。彼らはワーレン滞在中、毎日を驚きと興奮で過ごしていた。会議中も、聞かれてもいないうちから都会の凄さを大声で広めたらしい。

「俺達はそれを止めない。むしろ、全力で応援する」

ワーレンからの船は定期的に年3回、多ければ4回を目処に来てもらうことになる。その度に、新しい若者を連れて行く。たつぷりと贅沢してもらい、都会の魔力に首っただけになつてもらおう。彼らが帰つ

たとき、また別の村人に吹聴して羨ましがらせる。これが一番の高い薬であり、毒でもある。

一番厄介なのは老人達だ。俺が漁に出る前もそうだし、いまでも苦言が多いっただらなかつた。その割にはタコワサもトコロテンも美味そうに食うあたり、やりにくくてしょうがない。説得は相当骨が折れるだろう。

「俺はやるよ」

懐の麻布に手をあてる。

この重みを、俺は死ぬまで忘れない。

「何年かかるかもわからない。それでも、村のみんなを説得する。わかつてくれるまで話し続ける。手伝ってくれるか、マックス？」

「わかりきったことをいうなよ、モステイン。付き合うに決まってるだろ」

胸を叩いて応じてくれる親友に、俺は深々と頭を下げた。

はつきりわかつた。俺は、やり方を変えなくてはならない。文句はあつても、父の言葉は正しかつた。自分ひとりでは変えられない。村のみんなと話して、話して、また話し合う。そうして理解者をひとりでも多く増やすのだ。

『筋を通す』

それが父の教訓なら、従ってみよう。いまなら正直にそう思えた。

「……どうにか、体裁は整つたの」

「いささか無理のある筋書きでしたけどね」

遅くまで討論していた村人達が解散した後、お互いの派閥を牽引してきた親子がふたり、やれやれと息を吐く。先ほどまで対立していたとは思えない、穏やかな空気だつた。

「私のときは、もつと緩やかでした。誰からともなく集まり、なんとなく大人達に反抗して、辛い現実を思い知らされる。それを何度も繰り返し、そのたびに大人達から諭されて、さらに反発する。そしていつか気づくんです、世間とはそういうものだ」と

モステインは知らない。誰よりも気弱で、温厚篤実な父親にも、か

つては大人達と激しく衝突した過去があることを。都会に暮らしていた父を妬み、見たことのない世界に憧れ、単身海に飛び出しては連れ戻された。村でもっとも手のかかる子供だったのだ。

「世の中は自分の思い通りにはなってくれない。では、どうしたらいいのか。その中で自分は何を果たすべきなのか。不思議なもので、ひとりがそうやって悟ったら、他のみんなにも感染していくんですね。そうして最後のひとりが答えを出したとき、村は新たな形で団結する。それぞれが自分の責任を果たして戦うんです。みんなで生き残るために」

若者と老人の対立。

未開の地に開かれたこの村にとって、それはひとつの慣習であり、絶対に欠かせない儀式だった。

若者はどんなに未熟であっても純粹で、熱く、夢に燃えた思いをぶつける。大人はそのすべてを受け止めて、あるいは流して、ときには身体を張ってでも現実を見せつける。絶対に手は抜かない。未熟なまま育ってしまったえば、村を取り囲む脅威に食い殺されるからだ。これまでに何人もの若者が死に、助けようとした老人も巻き添えになった。そんな悲劇を起こさないために、大人は心を鬼にして若者の壁になるのだ。自分を育ててくれた、かつての大人達のように。

今回は事情が違った。憧れでしかなかったワーレンという都会への道が開かれ、若者達が熱狂しつつある。このままでは、村を守ってきたタガが完全に外れ、未熟なままの子羊達が世間の狼に食い殺されかねない。それだけは断じて防がなくてはならなかった。

「厳しい躰になるぞ」

「恨まれる覚悟はしていますよ。私が敵役になりますから、父さんは妻と一緒にあの子を助けてやってください。どんなに優秀でも、まだ9歳なんです。厳しいだけでは壊れてしまう」

「任せておけい。そうやってきたのじゃからな、いままでも」

集会場から遠く離れた家を眺める。おそらくは、怒りと後悔に苛まれているだろう息子を思い、父である村長は呟いた。

「この村に必要なのは、物語の中の英雄じゃない。地に足をつけた一

人前の男なんだ。酷い父を許してくれよ、モステイン」

少年期 11歳 17. 次世代達

(何年経っても変わらないわね、この町は)

生まれ育ったガルダの街並みを屋敷の窓から見下ろすたびに、ブレンドは同じ感想を抱いてしまう。進歩のなさへの呆れと、ほんの少しの諦観。振り払うように思いを新たにするところまで一緒だった。

海と山の恵みを存分に享受しながら、人々は満たされることなく争いを止めない。大陸から略奪した金銀財宝に高値をつけた詐欺まがいの取引を、時には暴力まで行使してふっかける。気の短い者は詐欺すらも行わず、ただひたすらに暴力でものにする。およそ真つ当な街とは程遠い。老若男女を問わず、誰もがその日を生きるのに必死な悪徳の華。

だが、それがいい。そうでなければ一族の悲願はなし得ない。この荒れ狂った人でなしの群れだからこそ、道理を越えた野望は叶うのだ。

鏡台に映された姿を眺める。海賊の都には似つかわしくない、貴族の令嬢がそこにいた。純白のドレスは透き通るような輝きを放つ鋳石細工が散りばめられ、艶やかな群青色の髪は美貌を際立たせる真珠のヘッドドレスにまとめられている。薄紅をひいた唇とたわわに膨らむ双丘を見れば、男達は是が非でも我が物にと望むに違いない。

これが焦土と化した北の港で、一時はガルダの頂点に立ったバーンズに啖呵を切った女だと誰が信じられるだろう。海賊達が生き血をすすめるその街で、少女はひとときわ異彩を放つ存在だった。

白亜に染められた邸内をしとやかに歩く。好きでそうしているわけではない。幼くして母を失ったブレンドを育て上げた祖母の望みだった。

(それも、今日でおしまいかもしれない)

一晩いくらの娼婦からガルダ有数の海賊に成り上がった女帝は、いよいよ心身が病み衰えていた。余命幾ばくもないと誰もが察してい

る。どんなに馬鹿げたふるまいであっても、愛を注いでくれた唯一の肉親の願いなら叶えてやりたい。孫としての最後の孝行のつもりで、屋敷で過ごすブレンダは貴族の令嬢としてあり続けた。

扉を二度ノックする。返事はない。もはや祖母の体力はわずかもなかった。一呼吸の間を置いて、ゆっくりと室内に踏み入れる。

「ただいま戻りました、お祖母様」

「ああ……お帰り」

祖母は半身を起こしてブレンダを迎えていた。とうとうブレンダの名前も呼ばなくなってしまった。頬は痩せこけ、鼻もくぼんで死相が際立つ。それでも瞳の力だけは変わらなかった。ギラギラと光を放ち、映るものに噛みつきかねない攻撃色で染まっている。

一礼し、寝台の座椅子に腰掛ける。一ヶ月の奮闘の報告をしなくてはならない。聞いて理解するかもわからないが、祖母の心に何かか響いてくれさえすればいいと思った。

「サムシアンとの交渉は滞りなく終わりました。すべてはガルダから離反したバーンズ一味がペラティ海賊と結んだ結果の凶行として片付きます。北の港の復興援助も要請されましたが、下積みの人足を派遣できると考えれば負担にはなりません。彼らにはせいぜい、アカネイア式の技術を磨いてもらいましょう」

当のバーンズが消息を絶っているので、好きなように捏造できる。ペラティ海を東に逃げていくのを目撃した部下によれば、敗走中とは思えないほど大きな声でわめいていたという。次はペラティ海賊内でのし上がるかもしれない。

それならそれで、こちらも願ったり叶ったりである。

「バーンズが敵対派閥ごと玉砕させたおかげで、いまのガルダは虫食い状態です。幾つも空いた地位に座ろうと、頭の回る者は活発に動き始めました。待ちに待った飛躍の好機です」

こうなることを見越した上での封鎖離脱だった。置き土産にサムシアンへ情報をリークし、交渉の下地を用意させたのもブレンダの手際である。結局のところ、バーンズは彼女に利用されていたに過ぎなかった。

にっこりと、労りの気持ちを含めて悪党が笑う。

「お喜びください。お祖母様の夢に、また一步近づきましたわ」

ブレンダの掌が強力に締め付けられた。船上での斬り合いでも動かない少女が驚愕するほどの力だ。枯れ枝のような、骨と皮だけの両腕が寝台から伸ばされ、ブレンダにすがりついている。

「ゆめ」

ぜひ、

ぜひ、

かすれた声ができる。潰れた肺に残った息が漏れ出す音。

「あたしの、ゆめ」

わなわなと、骨の浮き上がった背が震えていた。落ち着かせなくてはならない。そう思っ手を手を伸ばす。だが触れられなかった。指一本でも触れたら最後、首筋に噛みつかれるのではないか。それほどの殺気がブレンダに放たれていた。

「ころせ」

違う。殺気はブレンダに向けて放たれたのではない。彼女の血の中に潜む、怨恨の対象に注がれているのだ。

「あいつを、殺せ」

締め付けが緩む。汗に濡れた掌が解放され、手形をつけた両腕がほとりと膝に落ちた。不気味なほどの静寂が室内を満たす。それもわずかな時間に過ぎなかった。

「ヒヒッ、ヒヤッハハハ！」

狂笑。

「ざまあみろ！　ざまあみろ!!　ざまあみろ!!!　あたしを捨てたあの野郎！　何もかもやった！　全部くれてやった！　家も、金も、純潔も！　すべてを捧げたあたしを捨てやがった、あのクソ野郎め！　あたしは生きたぞ！　この地獄の果てで、お前を殺す種を撒いてやったんだ!!」

一瞬喉を詰まらせてから、ごぼりと鬼女が黒い血の塊を吐いた。焼けるように熱い呪詛が少女を濡らす。避けられない。いつの間にか、細い両肩は亡者の腕にしがみつかれていた。

虚ろに開いた口が、何かを言いたげに二度、三度と開閉する。言葉にならない、少女だけが知る符丁だった。祖母のいわんとしている遺志を理解し、うなずいてみせる。

死の間際まで妄執にとり憑かれた老婆が、口元を引きつらせた。笑おうとしたのだろう。笑みの形になるよりも先に、孫娘の胸の中へ崩れ落ちて、やがて動かなくなった。

およそ40年前、ガルダに現れた女帝は、人肌の温もりの中で生涯を終えたのだ。

「安らかにお眠りください、お祖母様」

真紅に染まった純白のドレスを脱ぎ捨てて、事切れた肉親の身体を包む。ヘッドドレスにはめられた最も大きなルビーを外して、胸の前に組ませた掌にそっと握らせる。すべて祖母に贈られた品だった。果たしてどれだけ心の慰めになったのだろう。ブレンダにはわからない。

自分を守ってくれる存在は消えた。もはや帰る家の灯火もなく、たったひとりで嵐の海に乗り出さなくてはならない。その空虚さを予感した少女は、一度だけ背筋を震わせた。

魂の欠けた双眸の奥で、暗い光が少女を照らしている。

「今日はもう出てけ！ これ以上、お前らと話すことはねえ！」

張り手の一撃で家から押し出され、ふたりして地面に転がる。扉代わりのすだれが下げられ、望まぬ来訪者を拒んでいた。

奥歯を強烈に噛み締める。完全にキレていた。転がっていた棒切れを握り、すだれどころか家の何もかもぶち壊してやると本気で思った。

駆け寄ろうとした肩を羽交い締めにかされる。

「マックス、よせ」

「止めんなー！」

「止めるに決まってるだろ。ほら、頭を冷やしに行くぞ。今日は酒瓶の点検がまだなんだから」

なおも暴れようとする幼馴染の首筋に、ささやくような声で伝え

る。

「見られてるぞ」

「！」

「目の前だけじゃない。右のトム爺も、左のアシユリー婆ちゃんもだ。後ろの木の上じや、ネイサンの坊やがウキウキして俺達を見物してる。このまま見世物になるつもりか？」

トム爺は二年経ったいまでも若者ふたりを試して認めず、アシユリーは敵なのか味方なのかもはつきりしない。ネイサンは運動神経が抜群のうえに、やたらと目がよく見えるお調子者だ。今日も特等席で鑑賞するつもりなのだろう。

頭が徐々に冷えていく。棒切れを放り捨てようとしたが、モステインの咎めるような視線に負けて正しい場所に戻す。家から離れるにつれて、背中中の視線がひとつずつ消えていった。

「よく我慢したな」

「いつ気づいた？」

「最初から」

「マジかよ」

「ずっと同じ面子だからな。またかよって気にもなる」

自分が熱くなっている間に、親友は周囲の目線に気づいたという。驚く反面、感情的になるほど真剣なのは自分だけだったのかと、マックスは少しだけ疎外感を覚えた。

それを察したのか、褐色に焼けた頬をニヤリと歪ませたモステインが目を細める。

「それより聞いたか、マックス？」

「何が？」

「ジョンソンのやつだよ。昨日まで問答無用だったのが「今日は」に変わったぞ。思った通り、付け届けのワインが効いたんだ。おまけに気づいたか？ また持ってきてくれないかって顔しながら、外の俺達を見てるんだよ。あいつは漁師より酒蔵の管理人の方が向いてるんじゃないか？」

「絶対反対。そんな奴に任せたら、三日で全部飲まれちゃう」

「そりやそうだ！」

さつきまでの激昂が、マックスの胸から嘘のように消えていく。いつもそうだった。どんなに腹が立っても、隣を歩く友人のおかげで自分は踏み止まっている。モステインがいなかったら、自分は三日と保たずに乱闘騒ぎを起こして村を追放されていたかもしれない。

この二年、ふたりは毎日をとともに活動している。朝の日が昇るよりも先に漁をこなし、昼飯をたっぷり摂ってから教官の稽古に参加する。その後は頭の運動が待っている。疲れた身体を引きずるようにして会合に混ざり、これはと思つた村人と分け隔てなく話し合う。それが終わっても宿題は続き、村に関わる情報を自分の目で確認し、疑問を見つけて村長や爺様に問いたです。どんなに些細なことでも、解決しなければ先に進まない。自ら望んでの問答であり、修行漬けの二年間だった。

「賄賂用のワインなんて、まだあつたのか？」

「あつたんだなあこれが。ロレンスお墨付きの白ワイン。マケドニアの山奥から獲ってきた葡萄で作るらしい。王都の貴族しか飲めないんだぞつて脅してやろう。いい加減、あいつの旗色も明日ではつきりさせないとな」

こいつは変わった、とマックスは思う。村を変えたいという思いは、物心ついてから今も変わらない。そこにもうひとつ、見えない何かが加わったようなのだ。

最初は思いをぶつけるだけだった。聞いてもらえるだけマシな方で、たいていは力尽くで追い出され、道で会つても無視される。何度も繰り返し内に、だんだんとやり方を変えていったのはモステインの発案だった。

「ベティは左足のケガを隠してる。漁のときに手伝ってやってくれないか？」

「なんでメイスンが反対派になったのかわかった。あいつ、こないだワールンに行ったときに悪い女に捕まって財布ごと盗まれたんだよ。それで拗ねてるんだな。今度トワイヌに頼んで、とびつきりの店に連れてってやろうぜ」

「ウツデイは……なんていうか、男なら何人かにひとりが若い内に発症する心の病気になっただけだから。治るまでほっといてやろう。なんでわかるのかって？ 聞くなよ」

当時は横で見ているもわからなかった。いま思えば、村人それぞれに最適な接し方を探るようになったのだろう。言葉で、態度で、あるいは物で意識を引き寄せる。そうして作ったスペースにするり入り込んで、逃げられないように距離を詰める。気が付いたときにはもう遅く、相手は交渉の場に引きずり込まれている。ワーレンで聞いた詐欺師の手口とはこのことか、とマックスは合点した。親友に詐欺師扱いされたモステインは海辺でひとり泣いた。

「あー、もう交流会の時期か。そろそろ連れていく面子を決めないとなあ」

「これまでみたいには、村長さんが決めるんじゃないのか？」

「そう思ってたんだけど、今年から俺がやってみろって任されたんだよ」

頭を掻いてそう話す幼馴染を、マックスは目を見開いて凝視した。

「それは」

村長が代わるということか。

「俺、まだ11歳なんだけどな。父さんだってまだ若いのに、思い切ったこと考えるよなあ」

酒瓶を整理するモステインの手が小さく震えているのを、マックスは見逃さなかった。

何かが変わろうとしている。村が、人が、すべてが大きく揺れ動く瞬間を目の当たりにしつつあるのだと、マックスはただひとり理解した。

18. 旧き時代の者達

「ここが頃合と思いますが、いかがでしょうか？」

開口一番の村長の問いかけに、集まった一同はそれぞれの反応を示した。

「異議なし」

「まったく」

二年前から賛同していた者は、即座に応じた。

「あれだけ熱心に誘われたら、断れんわな」

「婆さんと嫁さんを先に口説くのは卑怯じゃろ。ワシやなんもできんわ。よその家の力関係まで調べおつて」

日和見を決め込んでいた者も苦笑いで応じる。

「で、お前さんは？ トム爺さん」

先代村長の声のもと、居並ぶ古株達の視線を集めた老人が、ふてくされたようにそっぽを向いた。槍ダコで節くれだった手だけが親指を立てている。文句は無い、の意思表示だった。

「ほっ、とうとうあんたも認めなすったんか」

「そらあそうだな。トムさんご自慢の槍勝負で、マックスの坊やに一本取られちまったんだもの。男に二言はないっちゅーたんを嘘じゃないと示さなきゃな」

「負けとらんわ！ 都会もんを叩きのめすために鍛え直すだけじゃ！」

「それを負けたというんじゃないかのう」

活気に溢れる老人会の面々の顔は、いずれも晴れ晴れとしていた。二年前の会合では不安げに沈むものが多かったのに比べれば、天と地ほどの差がある。

あの子達がやってのけた偉業だ。

大陸の船を受け入れてからの二年間。村に生きるすべての人間が、まったく新しい価値観に触れてきた。食事も住居も衣類も違う、人の命の重さまで異なる文化が、まぎれもなく海の向こうに存在するのだ

と実感した。たかだか100人と少しの村でさえ、たったひとつの事実を受け入れるのに二年近くも時間を要したのだ。

その時間が次世代の急成長に繋がった。スパルタに近い詰め込み教育だったが、モステインは11歳とは思えない成長速度を見せだし、マックスもよくそれを補佐した。同年代の他の子供達もふたりに触発され、自分に何ができるかを常に考えるようになった。

影響はさらに上の世代にも浸透している。自分は村で人生を終えるしかない諦めていた青年達は、ワーレンという都会への道が開かれたことで、改めて自分の生きる道を考え始めた。大人達の若い世代も同様に悩み、年を経た世代は若者がいなくなってから村の守り手としての在り方を覚悟するようになった。

村は変わりつつある。凧のように緩やかだった歳月の流れが、激流のように流れ出した。眺めることしかできない老人達にも、新しい価値観の息吹がはつきりと聞こえるようになった。

「しかし……本気かね、村長？　いくらなんでも、11歳の子供に代わるというのは前代未聞じゃぞ。いまさら反発はせんが、お前さんが後見についた方が良くはないかの？」

心配そうに眉を寄せる老人に、父親は笑って首を振る。

「それこそいまさらでしょう。あの子には幼い頃から驚かされてばかりですが、村の新しい形を実現したのは、ほかでもないあの子の力です。私が教えられるのは、いままでの村の在り方だけ。ここからは、あの子が自分で作り上げていくことになる。そこに古い代表がいては、村が立ち行かなくなってしまう。代替わりにはいまが一番良いんですよ」

「なら構わんが……息子の影響を受けたのは、父親のあんたも同じかもしれないな」

「否定はしません」

村秘蔵の酒が注がれた木碗を掲げる。モステインのおかげで、村の酒蔵にはワーレンから届けられた異国の酒が置かれるようになった。だがこれは違う。世界が村の中だけで完結していた頃から作られてきた、この村だけの酒だった。

村長にならない、老人達がひとり、またひとりと木椀を手にとっている。トム爺さんが最後に天高く掲げるのを見届けてから、万感の思いを込めて音頭を取った。

「新しい村の未来に、乾杯」

飲めない自分には珍しく、その日の酒はとびきり美味く感じた。

ガルダ海賊として散々敵対した上に、口約束で北の港の襲撃を手伝わせたあげく、自分でろくな指揮もとらずに大敗させたペラティ海賊にのうのうと鞍替えした男。恥知らずという言葉がこれほど似合う男もいないだろう。

事実、バーンズは2年前の敗北が自分のせいだとは毛程も思っていないかった。黙って男に酌でもしていればいいものを、女のくせに海の上までしゃしゃり出てきて足を引つ張り、あろうことか船ごと逃げて帰った女がすべて悪いと責任転嫁している。

ブレンドが全ての責任をバーンズに被せたように、バーンズもまたブレンドに敗戦の責任を押し付けたのである。もつとも、ブレンドが計算づくでやったのとは違い、こちらは本心からその通りだと信じて疑わない。

幸か不幸か、バーンズのよくいえば単純明快、悪くいえば厚顔無恥の振る舞いは、ペラティ海賊にはおおむね好意をもつて受け入れられた。ブレンドのように頭脳派の海賊は極めて少数派であり、ペラティ海賊にはバーンズと似たりよつたりの脳筋しかないのだ。

初めこそ白い目で見られていたが、悪意をまったく意に介さない凶太さと、相変わらずの暴力至上主義が男を再びのし上げた。一年もしない内に船長の座を奪い取り、10人、20人と部下を増やしていく。いまではガルダ海賊時代よりも規模が大きくなっていった。

敗戦の傷は癒えた。雪辱を晴らすためにも、ここらで大きな仕事が見たい。ペラティ海賊だけでなく、古巣のガルダ海賊にも喧伝できるような功績が欲しかった。自分を追い落としたあの女を屈服させられるような手柄が。

部下を走らせて情報を集める内に、バーンズの直感に触れるものが

混ざってきた。

「ガルダ海の入り口に村がある？」

「はつきりした話じゃないらしいですが。なんでもワーレンのそこそこデカイ商家が絡んでるとかで、船が泊まってるのを見たって噂を聞きやした」

それだけなら珍しくもない話である。たいていはブラフであり、商家の撒いたデマでしかない。だが気になった。忘れもしない2年前、自分の敗北を招いた北の港封鎖中の出来事。

自分の従えていた船が二隻、いつまでも帰ってこなかったのだ。どうせ獲物でも追っていたのだらうと気にもせず、集まった大船団に浮かれていた。今まですっかり忘れていたのだが、あの二隻はどうなったのか。

——まさか、噂の隠し村を襲って返り討ちに遭ったのではないか？

バーンズらしからぬ発想だった。普段ならしようとしてもしない推論を重ね、足りないところを空想と妄想で補強する。絵に描いた餅でしかなかった獲物が、脳裏で現実へと昇華されていく。

「もう一つありやすぜ、頭」

「あん？」

考え事を止められて不機嫌な声にも気づかず、部下が続ける。

「ペラティから上にでっかい島があるんですが、その南西から上がった奥に集落があるんじゃないかって話です。海から見た限りじゃ、身なりも貧相でろくな武器もない。そのくせ、若くてそれなりの女がそろそろ見えたって噂も聞きやした」

「ふうむ」

顎髭をつまんで考える。

いつもなら鼻で笑う噂話だった。しかし、いまは違う。何かがバーンズの琴線に触れている。これはとてつもない儲け話に繋がると、海賊としての勘がささやいている。

嘘か真か、確かめてみればいい。

「乗ったぜ、ふたつともだ」

「おお！」

「骨折り損は御免だ。お前らふたりとも、適当な船を駆ってそれらしい場所をあたってこい。水と食い物、酒も好きなだけ待ってけ。きつちり見つけてきたら、褒美をたっぷりくれてやろう」

「さすがはバーンズの頭だ！　すぐに行つてきやす！」

駆け出していく部下ふたりの背を睨みながら、バーンズは下品に舌舐めずりをした。

この運をモノにしてやる。商家が絡むほどの儲けの種と、奴隷に最適な女ども。すべて売つ払つてしまえば、自分の勢力はさらに大きなものとなる。それらを率いて、自分を追い出したガルダに戦争を仕掛けるのも悪くない。

（待つてやがれ、ブレンダ。俺に赤つ恥をかかせたことを後悔させてやる！）

あの女を這いつくばらせ、許しを乞わせて、汚れた靴を舐めさせてやる。いままで何度妄想を現実にしてやろうと迷ったか、数える気もない。だがもう終わりだ。

夢を現実に変えてやる。どこまでも独りよがりの欲望が、男に実力以上の力を与えていた。

19. 火種ふたたび

アカネイア暦540年 モステイン 11歳(a)

村の人口は120人に届こうとしている。2年でおよそ2割増し。横ばいだったこれまでに比べたら、驚きの右肩上がりだった。

この2年で亡くなったのは老夫婦が寿命で2人、海賊の襲撃で若者と大人が1人ずつ。生まれた子供は9人、村の護衛役としてワーレンで雇った傭兵が10人、職人が2人移住した。21―4で17人が増えたことになる。

村が変わりつつある中、俺はひたすらに交渉を続けていた。雨の日も風の日も、村人達と話し合いの場を作り、膝を突き合わせて唾を飛ばし、ときには拳まで飛んだ。自分の考えをまとめて、誰が聞いても理解できるように噛み砕いて、それが相手にどんな利益になるかを説明していった。たったひとつの、それこそどうでもいいような議題のために、何度でも席を囲んだ。喧嘩別れになった回数は数えきれない。お互いに嫌な顔をしながら、それでも途中で止めることだけはしなかった。

一番しんどいのは古株達とのやり取りだった。はなから話す気がないんじゃないか、と思うくらい手応えがない。何をいってもはあ、ふうん、ほー、の繰り返し。正直キレそうになった。昔から世話になったとはいえ、手近にあった棒でぶっ叩きそうになったこともある。その前にマックスの方がキレて暴れだすのを必死になって止める羽目になるので、どうにか暴力沙汰にはならないでいる。自分より興奮してる奴がいると冷静になるって本当なんだな、と納得した。

こんなことを2年もやれば、色々と察することもある。

俺は試されているのだ。村を台無しにするような人間なのか。夢を現実に変えるためなら、気の遠くなるような忍耐を続けられる男なのか。求められるのは派手な活躍ではない。もつと地道で、泥臭くて、誰も興味を示さないような日陰の下積みなのだ。それをどんな相手にもできるか、誰が相手でも折れずに貫けるか。

華なんてない。誰も望んでやるようなことではない。それでもや

らなければならぬ。漁に出て、稽古に耐えて、疲れ切った体に鞭打つようにして頭を酷使する。何度も知恵熱を出した。心労で潰れかけた。海がなければ耐えられない2年間だった。潜水は7分を記録した。カニミソ美味しいです。

そんな生活の中で、俺は父からひとつの試験を課された。毎年恒例の南の部族との交流会を、俺が代表として取り仕切るように、との裏で父が何をいわんとしているのか、すぐにわかった。

これは最終テストなのだ。誰を村に残し、誰を向かわせるか。いつ出発し、あちらで何日滞在し、どんな段取りを踏むか。持っていく物品と、それとは別の食料の持ち出し分。あちらに渡す情報と、こちらに引き出させる情報。どこまでを知らせて、何を伏せるかの駆け引き。すべての要素を点検し、確認する。この手間こそが重要なのだ。

「今回連れて行くのは30人、この内15歳から35歳までの男手20人を中心にする。世話役として40歳までの大人も5人。ワールン傭兵も護衛として5人を連れて行きたい」

「村の守り手を割く理由と、連れていく村人の人数の根拠は？」

「傭兵には万一のため、この村以外の地形を知ってもらいたい。若い村人だけの理由はふたつ。今回の交流が大人入りの試験であること、もうひとつは……まあ、新しい血の入れ替えのためというか」

「ようは村同士のお見合いである。恋愛をすつ飛ばした妊活セミナーともいう。」

何十年、何百年も100人かそこらの人間だけで交配していると、血が濃くなりすぎる恐れがある。近親婚を避けるためには、どうしても外部の血を入れなくてはならない。閉鎖気味なコミュニティの生き残り方としては、ごく普通の儀式といえるだろう。

なお、俺は村長試験のためか、ひとりだけお見合い禁止令が出された。辛い。とつても辛い。しかし我慢する。これくらい耐えられずに村が救えるか。マックスのやつがめっちゃ楽しみにしてるのが腹立つ。おのれイケメン。せいぜい妾も抱えて子沢山な家庭を築くがいい……！

「よろしい、理由も的確だ。人員の選定も問題ない。私も同じ面子に

するだろう。準備は万端だね」

「ほっ」

思わず安堵の息が漏れる。何日も前から、俺ひとりの判断で各工程の数字を割り出してきた。今回ばかりは爺様の手も借りられず、不安との戦いだっただのだ。それも合格をもらえたことで、ようやく肩の荷が少し降りた。来年は絶対マックスにやらせるからな。首を洗って待つがよい。

「……もう気付いているかもしれないが、モステイン。今回の交流会は、2年間の君の成果が試される。お祖父さんがついていくのは、経過を見届けるためだ」

「ああ、わかってる」

「連れていく面子は、今後君が村長としてやっていくための原動力になる。彼らは君の手足であり、君は彼らの頭脳でもある。適材適所を心がけるんだ。しかるべき場所にしかるべき人材を配置する。それができれば、失敗はほとんどない」

「大丈夫、ちゃんと頼るよ。誰が何をできるのか、逆に何ができないか、俺の頭にしっかり入ってる」

「村に残る面々も心配ない。全員が君を認めている。信じられないかもしれないけど、あの老人達も君を応援してるんだよ。今回の試験を言い出したのも、一番厳しかったトム爺さんだからね」

トム爺さんは村一番の豪傑である。若い頃は自己流で槍を振り回し、村を襲った海賊をなぎ払っては追い返した古強者だそうな。今では爺様とのんべえ生活にふける、怒ると怖いひねくれ爺さんだ。この人が俺の話を書かない筆頭だったのだが、実は認めてくれていたのだろうか。

俺が感慨にふけっていると、父が無言のまま、俺の背中に手を回しかき抱いた。思いがけない抱擁に戸惑っていると、情の深い声が漏れる。

「君はもう、私より大きくなったんだな」

父にいわれてから、俺はようやく気づいた。俺の背は、いつのまにか父を越えていた。並んでしまえば肩幅が細身の父よりも広く、俺が

すっぽりと隠してしまう。

少し前から違和感があった。父が小さくなったのではないかと、そうではなかった。俺が父よりも大きな凶体になってしまっていたのだ。一緒に暮らしているにもかかわらず、なんでそんなことにも気づかなかつたのだろう。俺の観察力は、まだ父に及ばないらしい。

「好きにやりなさい。君はもう、立派にやっついていける」

ほんの少しだけ赤くなった目の父がくれた、餞別の言葉だった。

アカネイア暦540年 モステイン 11歳 (b)

交流会は問題なく進行していた。

若い男と女が大人数で揃ってしまえば、広場は盛大なパーティー会場と化す。なにせこちとら、ありがたくも色々とお世話になってしまいう男どもである。そりやもう奮発せにやなるまいと、前もってワーレンで集めた異国の品々を惜しげもなく提供した。

島ではお目にかかれないガラス細工の杯に、血のように赤く澄んだアルコールの上物を注ぐ。ガラスどころかワインすらも初めて目にした女性陣がどうしていいのかわからず、隣の男性陣に手ほどきを受けながら少しずつ嚙下する姿はなんとも可憐で愛らしく、男達を一発でKOさせた。テーブルの下でガツツポーズ。これで掴みは上々よ。

最初のお膳立てさえ手伝ってやれば、お偉いさんはお邪魔虫でしかない。俺と爺様は早々に席を立ち、あちらの老集落長と孫の兄とでまじめにかかるとめにかかる。

「去年よりもさらに豪華になったな、モステイン。食い物から食器まで、見たことがないものばかりだ」

「みんなを驚かせたかったんだよ。おかげで盛り上がったろ?」

「いやいや、つくづく信じられん……まさかのお、あの坊主がここまでやってのけるとは。爺殿の鼻も高いの」

「それほどでも……ま、おひとつ」

「では、乾杯」

「こっちは果実酒の薄いやつにしよう」

「俺達まで酔っ払ったら收拾がつかないもんなあ」

歳の近い男達が2組ずつ、新月の夜の下で酒を酌み交わす。隣のテントはいよいよ盛り上がり上がってきたのか、美声を披露する男と乗ってきた女のデュエットが聞こえてきた。

まとめといっても簡単なもので、抜け出す口実が欲しかっただけである。というのも、お互いのコミュニティがそれぞれ転換期に直面したことを昼間に知ったためだ。

俺の村は父が早すぎる引退を決意したので、来年からは俺が村長としてまとめることになる。うちはまだ穏便だから良いのだが、もう一方の南の集落は深刻な事態に陥っていた。

今年に入ってからペラティ海賊の侵略が頻発しており、つい先日には集落の長を務めていたタームの両親が戦死してしまったというのだ。いまは先代の長だった祖父が代理を務めているが、すみやかにタームへと継がせるべく奔走しているのだとか。

それを聞いたとき、俺はいよいよか、と胸中で呟いてしまった。ワールンでもペラティ海賊の活性化は噂されていたからだ。なんでも2年前に取り逃したガルダ海賊の頭目が潜りこみ、一大勢力になりつつあるという話だった。はた迷惑なことである。どうせなら海賊同士で潰し合えばいいものを。

というか、

「そういうことは事前に伝えろよ！」

村長夫妻が海賊に殺されました、なんて知らなかったぞこっちは！
前もって知らせてくれたら、対応策でもなんでも協議できたじゃん！
持つてくるものだって武器なり傷薬なり吟味したのに！

かなり強めに抗議したところ、親の死があまりに急だったのと、毎年欠かさなかったイベントが中止になるのを恐れたためだと説明された。ははあ、そうですか。実に真つ当な理由ですね。

……この2年、人間観察を修行させられた俺は、裏の事情をなんとなく察した。

- ・ひとつ下の俺への嫉妬と対抗心。
- ・自分が村を背負うのだというプレッシャー。
- ・交流会という公の名目で、数日間だけでも足りない男手を確保で

きる打算。

チーム本人も自覚していない心の動きと、先代族長の計算が入り混じった結果が報・連・相の欠落なのだろう。たて続けに不幸が起こったせいで、組織としてまともな判断が下せなくなっている。いや、わかるよ、そうしたくなる気持ちは。いまなら理解できるとも。でもさあ、そんなことされたら今後の付き合いにも関わってくるでしょうが。中・長期的には信頼を無くす悪手だよ、それは。

正直もによる。が、もちろん表には出さない。それぐらいの顔芸は身に着けたつもりだ。不承不承ながら納得した、という顔を見せるに留めておこう。

俺の方も手抜きだったのだ。自分の村に手一杯で、隣の集落まで気にかける余裕がなくなっていた。この交流会が終わったら、改めてお互いの在り方を考え直さなくてはなるまい。もつと密に連絡を取り合わない、両方共倒れになりかねん。

……どうなんだろうなあ。俺の見たところ、伝えなかったのは祖父の判断だと思う。チーム自身が俺達の戦力を計算に入れたのは間違いないが、こいつは根っからの常識人である。卑怯な真似を嫌う性格上、こんな手は取れない。となると、後見人として補佐する祖父に押し切られたか。うちの爺様が相手をしてくれてるが、ふたり揃ってちらちらと俺に視線を寄せてくる。むず痒いんですけど。

(こつちも大変だな)

俺同様、チームも苦勞するだろう。祖父に認められるまで何年かかるかもわからない上に、狭いコミュニティ内で肉親と対立する可能性だってある。俺は2年かかったが、こちらはどうなるやら。

幸いなことに、チームは俺と違って集落の信頼を最初から得ている。11歳と12歳、一年の重みが違うからだ。チームはいうが、単純に人徳の差だと思ふ。俺にそんなものはない。あつたらこんな苦勞をする必要はないだろう。羨ましくて涙が出そうだ。

ともかく。若くして群れの頂点に立たざるを得なくなった共通点を通して、俺とチームは改めて協力していこうと握手した。もう相撲を嫌がって逃げ出していた内気な少年はいないんだなあ、としんみり

してしまおう。

突如として悲鳴が響いた。

果実酒で酔うほど弱くはない。互いに頷くと、自分達の祖父に隠れるよう伝えて走り出す。チームは宴中の護衛を買って出た集落の男達のもとへ向かい、俺は急いで会場に飛び込む。

「宴は中止だ！ 全員武器を取れ!!」

「おう!!」

空気はすっかり戦場のものに切り替わっていた。ワーレン教官の指導の賜物である。マックス主導で村の男達は既に戦闘態勢に切り替わり、世話役の大人達が集落の女達を守るように囲んでいた。

鋭いものが風を切って進む音のあとから、幾つもの悲鳴があがった。

「二手に別れる！ 世話役5人はここを守れ！ 傭兵3人と男手10人は俺とチームの加勢に動く！ 残りは全員マックスに従って周辺を遊撃！ 行くぞ!!」

「了解!!」

頼もしい声が返ってくる。2年前では到底叶わなかった動きができていく。本職の兵隊とまではいかななくても、自衛なら十分に可能はずだ。

ワーレンの鍛冶屋特注の槍をしごきながら、俺の率いる隊はチームのもとへと駆けていった。

20. ほろびのとき

アカネイア暦540年 モステイン 11歳 (c)

寄せ手が火矢を使うのは、相手の動揺を誘うのと同時に、守備側の手間を増やすのが目的だとロレンスから聞いたことがある。ただの矢なら盾なり壁なりで防げば済むのに対して、火矢は火の粉を撒き散らしていたるところに着火させる遅延用の兵器である。消火に人手を回さざるを得なくなり、その分だけ守り手の戦力が減ってしまうのだ。

火を消すのが先か、反撃するのが先か。

その場にふさわしい判断を下せるのが優秀な指揮官であり、間違っても一貫した行動を取れるならマシンリーダーである。

チームがどちらだったのかはわからない。惜しむらくは、経験を積む前に処理し切れないほどの敵を抱えたことだった。

集落の男達がひとり、またひとりと倒れていく。火矢から森に燃え移った炎の消火作業。たび重なる襲撃で武具を消耗し、傷を負ったままの戦力。すべてが後手に回った状況の中、どっちつかずに右往左往するままに切り込まれ、矢に貫かれる。

視界の奥で、断末魔をあげながら崩れ落ちる少年が映った。

「――突撃！」

無傷の新手、それも14人の集団が殴り込みをかけてきたことに相手は驚き、まったく反応できなかった。いまは火なんぞ捨てておく。斬って、突いて、払えばいい。あつという間に刃先が血と脂で染まる。全員が似たようなものだった。俺の隊はひとりの死者もなく、目についた賊を制圧する。

無惨に横たわるチームの亡骸を拝む。できればこのままにしておきたくなかった。安らかに逝けるように整えてやりたい。だが、そんな時間はない。マックス達がどうなっているのか確認しなければならぬ。武器の点検後、俺達は再び来た道を駆け戻る。

広場は激戦の真つ只中と化していた。方向からして、敵は南の海辺から上陸してきたらしい。チーム達が相手にしたのは別動隊か。侵

入を防ごうとした狩人達の壁を強引に突破して、数を頼みに集落中へ散っていく。

その横っ腹を、これ以上ないタイミングで戻ってきた俺とマックスの隊が挟撃した。

「タームの村を、好き放題にさせてたまるか！」

「女達を守れ！ こいつらにやるのは死だけだ！」

多対多の集団戦は、敵味方が入り乱れての乱戦になりやすい。どうしても個人の力量に左右されがちになり、敵が強ければ貴重な村の戦力をいたずらに失ってしまう。被害を防ぎつつ、効果をあげるにはどうすればいいか。

「訓練と同じだ！ ふたりでかかれ！」

ツーマンセルの徹底。これに尽きる。

相手は暴力を振るうことにためらいのない力自慢であり、その時点で差がついている。おまけに日頃から海戦と略奪で無駄に経験豊富なせいで、強いやつはやたらと強い。が、こいつらに例外なく共通する弱点がひとつある。スタンドプレーにしか興味がなく、連携しようという意識がこれっぽっちも無いことだ。

基本は群れで行動するくせに、手柄の横取りを恐れて独り占めしようとする。よほど優秀な指揮官がいらない限り、勢いに任せて自分の好きなように動くだけの獣がこいつらの本性である。

必然、面は無数の点になり、あとは一点ずつ確実に潰していけば勢いを殺せる。

「畜生！ 男らしくひとりで戦いやがれ、卑怯者が！ それでもキ○タマついてんのか!？」

戦いに泣き言を吐くやつが卑怯とかいうなよ。目へのフェイントで上半身を硬直させつつ、全力で右太股を刺し貫く。動脈を斬ったらしい。血の海に沈む大男を蹴倒して次に向かう。

撃退は間違いなく成功する。問題は、どこの誰が襲撃を計画したのかだ。ワーレンの噂通り、北の港を破壊した男によるものか？ それとも別のグループなのか？ 情報を仕入れなくては、集落の今後もおぼつかない。

と思っていたら、マックスが投げ飛ばした海賊をワーレン傭兵にすぐさま捕縛させている姿を目撃した。お前つてやつは本当に……！

「もう駄目だ、逃げる！ 船に戻れ!!」

「俺達を置いてくなあ！」

ようやく海賊達の戦意が喪失し、我先にと南へ走っていく。全員で追撃しなかったが、二連戦の疲労が響いている。元気な村人を数人ワーレン傭兵に付けて追わせるだけに留めて、俺は状況をまとめにかかった。

「おお、おおお……！」

広場に横たえられた無数の屍。12歳で逝ったチームの亡骸にすぎる祖父が、慟哭に震えていた。まだ幼い妹がその袖を握り、ポロポロと涙をこぼしている。

「何故じゃ！ 老い先短いワシから、息子だけでなく孫まで奪うのか!!」

残された者達も同様だった。家族なのだろう、横たわる男達に寄り添って泣くか、あるいは放心したように動かない。シヨックの大きさに感情が追いつかないのだ。

やりきれない気持ちを抑えながら、集落側の被害を数える。チームから聞いた話では、集落の人口は82人。たび重なる襲撃の中で、チームの両親を含めた戦士6人が亡くなった結果だという。

今回の被害はそれどころでは済まない。これまでの襲撃で備蓄していた武具も底を尽き、捨て身で戦わざるを得なくなったせいだ。戦って死んだ男は17人、重傷で動けない男が11人。逃げられずに背中から斬られた老人が6人、抵抗むなしく殺された中年の女が4人。

82人の集落から27人が亡くなり、頼れる男達も全滅した。残されたのは女子供と戦えなくなった重傷者、かろうじて働ける老人が数人だけ。

「……もう、しまいじゃ。何十代と続いてきたこの集落も、ワシらの代で途絶えるのか」

絶望した古老の呟きは、全員の心を代弁するものだった。

他人事ではない。この光景が俺達の村でも起こる可能性は、決して低くはないのだ。ワーレンの情報をまとめてもガルダ海賊の動向が掴めない現状、村は常に警戒を強いられている。その合間を縫っての交流会だった。

俺達が滞在しなければ、集落は全滅しただろう。足手まといは殺され、女子供は散々なぶられてから奴隷として大陸に拉致される。目の前の惨劇すら生温い、この世の地獄に変わっていったのは間違いない。生き残ったのは幸運なのか、明日の見えない現実を見せつけられるのが不運なのか。彼らはどんな決断を下すのだろう。

(……もっと早くに知らせてくれれば、こっちも協力できたのに)

頭に浮かんだ『たられば』を振り払う。いまは現実を見るときだ。雑に集められた海賊の死体置き場に向かい、逃げていった人数を足してみる。

ここに転がる死体だけでも18人。森で見つからずに捨てられたままの屍も数人分はあるだろう。追撃から帰ってきた傭兵によると、岸に着くまでに抵抗してきた4人を殺し、置き去りにされて自暴自棄になった3人を返り討ちにしたと報告があった。島から離れていく二隻の船上には併せて20人ほどの姿があったとも。

確認できただけでも死体が25人分、生き残りが20人以上。多く見積もって、50人からなる集団が攻撃してきた計算になる。

尋常の数ではない。いままで生きてきて、これほど大規模な襲撃があったという話は聞いたことがなかった。ガルダ海賊からペラティ海賊へと鞍替えした頭目によるものか。組織の成り上がり者が、力を示すために群れをけしかけたのか。そもそも、

これで終わりなのか？

どうにも腑に落ちなかった。頭では納得するのに、喉に刺さった小骨のように気にかかる。それが何を指しているのか、言葉にできないもどかしさが強くなっていく。

わからないのなら、聞けばいい。

両腕を後ろ手に縛られた上に両足首まで繋がれた男が、ふてくされたような顔つきで地面から見上げてきた。マックスに投げ飛ばされて気絶した捕虜である。目が覚めたら自分以外の仲間がひとりもない状況が信じられず、自棄になっているらしい。

「どうだ、マックス」

「駄目だ。いくら痛めつけても吐かない」

棒切れで腹を小突きながら、友人が苛立ちを隠さない。マックスにとってもタームは親友だった。殺し合いの熱が冷めても、生き残った敵への憎しみだけが燃えている。

「いっそ、殺した方が面倒もなくならないか？」

二年前の俺みたいなの殺意を真顔で漏らすマックスに、まな板の上の鯉同然の男が憎たらしく笑った。

「はっ、さっさと殺したらいいだろうが！ それともなんだ、腰ミノ巻いた原住民には殺す度胸もねえのか！ 大人しくメシの種になりやいいものを、無駄に抵抗しやがって！ おかげでこっちは商売上がったりだ！」

まったく元気なことである。マックスに股間を蹴られても、脂汗を流すだけでまた騒ぎ出す。正攻法では埒があかないと見た俺は、とうとう剣まで取り出したマックスと代わることにした。

どうせこんなことになるだろうと、宴会場から持ってきた酒瓶のコルクを勢いよく抜き取る。瓶底に溜まった酒精をゆらゆらと振り起こして香り立たせ、何事かと硬直する男の鼻先に近づける。

「オレルアン産。赤の27年物」

ごくり、と喉が鳴る。酒豪は時として、酒瓶一本を白金貨と交換しても惜しくないと言いつ切る。そんな馬鹿野郎達が、喉から手が出るほど求めてやまない年代物のひとつ。ペラティで奪うだけしかできない男の人生で、こいつを飲める機会はないだろう。憧れの香りを鼻腔に浴びせられた男が、俺と酒瓶を交互に見つめる。

「縄は解けないからな。我慢してくれ」

筒先を口に当てた瞬間、バキュームのように食いつかれた。内心うわあ、と思いつながら傾ける。最初はこぼれないように気を使ったが、

途中から男の方が器用に顔を動かして、酒瓶を垂直に立てて最後の一滴まで飲み干しやがった。

もういいかな、と離そうとしたら、ぬらぬらした舌が半ばまで瓶に潜り込んで舐めとっていた。そこまでやるか。

強引に引き離す。盛大なゲップを吐いた男の顔にはまだ余裕があった。しゃあねえな、もう一本いくか。懐に入れていた小瓶を空ける。

「グルニア王家御用達の酒造、小ボードウイン15年」

蒸留を重ねてアホみたいな度数にまで高めたアルコールである。ウオツカの亜種か何かか。ロレンスいわく、飲んだらバカになる。用途は自白剤とのこと。ああ、御用達ってそういう……。

5分後。

「ウツヒヤヒヤヒヤ！ なんらあ、あんちくしょうらよお！ 新入りのくせして、俺らをあごで使いやがってえ！ バツカにすんじやねえっての、ヒック！」

チャンポンが良い具合にキマツたらしい。自分が捕虜なものも忘れるほど前後不覚に陥ったのなら、とことんヨイシヨしてやろう。受けがいい、これが二年間で鍛えられた俺の交渉術——！

「そうだよな、お前も苦労してるもんな」

「ああ〜？」

「おかしいよな。なんであれだけやらかした能無しが偉い顔してのさばってんだ？ 靴磨きでも肩揉みでも、何でもやって先輩に尽くすが筋つてもんだろ。それが当然じゃねえか？」

これのミソは、具体的な名前をいつさい出していない点である。酔っ払って脳内処理が低下した人間なら、自分にとって都合の良い人間のことだと勝手に解釈するのだ。ありがとうジョンソン、お前の醜態は墓場まで持っていくからな。

訳知り顔で適当なことをベラベラまくし立てる俺に、マックスが悪魔を見るような顔で距離をとった。やめろよ、傷つくじゃないか。大人になるってこういうことだぞ。

「そうらよお!!」

めっちゃビクンビクンのたうち回りながら、男がボロボロ泣きだした。

「バーンズのアんにやろう、なあにが強いやつに従え、だ！ 元はとあったら、あいつが俺らを巻き添えにして北の港をめちやめちやにぶつ壊したのが悪いんだあ！ おかげで俺らまでとばつちり食らつてお尋ね者になったんだぞ?! そおれを、ムグツ、てめえはなんにも悪くねえなんて白々しいことほぎきやがって、どの口がいつてんだ！」

「そうそう。なんでこんなとこまで来ちまったんだろうなあ、俺らは」
「ほんつとだよお！ なんでわざわざ、こんなド田舎の、なんにもねえ島に俺がこなきやなんねえんだ!? どうせうまくやったら副頭目なんて嘘ばつかりだ！ なあんもいいことがねえ！ どうせならあつちに回りや良かった！」

カチツ、と俺の中で何かがはまった。知りたかった情報はこれだと確信する。

「……ああ、本当だな。それで？ バーンズはそつちに回つたんだっけか？」

「つたりめえだ！ なんとつて、ワーレンのでけえ店が相当入れ込んでるつて噂の本命よ！ 部下100人、あつちとこつちに割つての大戦略だあ！ ちつくしよう、俺もそつちに行きたかつ、ダ!」

俺の足が首をへし折るのと同時に、マックスが心臓を貫く。人を騙す罪悪感よりも、圧倒的な焦燥が感情を上書きした。

村が襲われる。これまでにない、大規模な集団によって。

もはや一刻の猶予もなかった。吐き気をもよおす悪寒に襲われながら、ふたりで広場へと駆け戻る。俺達の村に残された人数はおよそ90人、戦力になるのは半分にも満たない。傭兵5人に教官1人、40代の大人が15人。これだけで50人以上の海賊と戦わなくてはならないのか。

——間に合うのか、俺達は？

奥歯が軋むほど強く噛み締める。言葉にしてしまえば、最悪の仮定が現実になってしまうのではないか。そんな予感がした。

21. 重き荷を背負いて

アカネイア暦540年 モステイン 11歳(d)

捕虜の明かした絶望的な情報は、南の集落に滞在する俺達を恐慌状態へ突き落とした。次代の担い手達を失った集落も心配だが、俺達の村そのものが危険に晒されている状況で割ける余力はない。

非情と蔑まれるのを覚悟で出立しかけたのだが、さらなる不幸が発生した。

「う、ぐっ……い！」

「先代!？」

たび重なる襲撃に息子夫婦だけでなく、部族の後継者たる孫まで失った心労がとうとう限界をきたしたのか。先代族長の老人が苦しげにうめくや、頭から昏倒した。数日前から心臓を抑えていたというから、兆候はあったのだろう。意識がいつこうに戻らないばかりか、脈が止まりつつある。素人目でも回復の見込みはない、その顔には死相がはつきりと浮かんでいた。

「……最悪だ」

集落の人々を見渡す。唯一指揮のとれる老人が倒れたことで、完全に戦意を喪失した羊の群れがそこにあった。ほとんどの人間が放心して座り込むか、のろのろと怪我人の介抱に従事している。

万一海賊が引き返してきたら、彼らはどうなる？

「モステイン、これを見捨てていくのは……」

「後味悪いよなあ。うちも余裕ないってのに……ん？」

ぼやくしかない俺の袖が引かれた。下を見ると、まだ4、5歳ぐらいの少女が、真っ赤に腫れた目を一心に向けて俺を見つめている。

兄のチームが死に、祖父が重篤に陥り、たったひとり残されたわずか4歳の妹だった。さっきまで倒れた祖父にすがりついて泣いていた少女が、何かを覚悟したように俺達の元にやって来たのだ。

「おじいさまが、いいました」

舌足らずな声で、少女が懸命に続ける。

「わたしたちは、これいじょう、たたかえません。わたしたちだけでは、ほろびます。どうか、わたしたちをたすけてください。わたしたちを、つれていってください。あなたのむらにくわえてください。おねがいします。おねがい、します」

……俺はどうしたらいいんだ？ 助けを求めてマックスを見る。俺と同じように硬まっていた。そうだよな、これが普通の反応だよな。

少女自身がどこまで理解しているのかはわからない。意識を取り戻した老人が、最後の力を振り絞って少女に伝えたのだろう。もはやそれしか集落の生き残る術がないと判断した、族長としての執念が為した決断である。

だが、状況がまずい。あまりにも切羽詰まっている。村の危機で一刻を争うときに、集落の命運までポンと渡されては困る。

どうしたらいい？

俺に何ができる？

いや、どこまで許されるんだ？

思考が真っ白に塗り潰される。焦りと困惑、苛立ち、無力感が胸を満たす。どうすれば。俺は、俺にできることは、俺がすべきことは――
――？

「好きにやればええ」

爺様の声があった。普段の笑顔はない。集落の長が愛用していた杖を借りていた。若かりし頃のふたりは親友だったという。形見として譲り受けたのだろうか。

「村を出るときに、村長から言質をとつとる。いまのお前さんの決断なら、何であろうと村長として信頼する、とな。古株連中も同意の上じゃ」

「爺様」

「安心せい、前のようにはならん。お前さんがすべきと思うことをするんじゃ。みながそれに従う」

パニックになりかけた頭が冷静になっていく。爺様を、マックスを、家族を失った少女を見る。気がつけば、村と集落の人々が全員、俺

のことは見つけていた。

覚悟を決めよう。

「敵も20人以上の被害を出している。この集落がますます襲われる可能性は低い。とはいえ、ここで生活するのは危険過ぎる。怪我人も含めて全員、うちの村に避難してもらわないといけない」

「あ、ありがとうございます、」

「礼をいうのは早い。その前に、今度は俺達の村が襲われようとしてる。いや、もう来てるかもしれない。最悪、避難する先が無くなってるかもしれないんだ。そうならないためにも、俺達はひとまず村に戻らないといけない。これは絶対だ」

答えは出ているのだ。あとは人数の割り振りをするだけでいい。任せられる人間に任せる。それさえできれば、上手くいく。

「爺様」

「うむ」

「迎えをよこすまでの間、ここをまとめてほしい。この子の面倒を見ながら、いつでも全員が離れられるように準備してくれ。万一を考えて傭兵ふたりを置く。どう動いても構わない」

「任せい。村を頼むぞ」

昔からこの集落に親しんでいた爺様になら抵抗はないだろう。少女の心のケアも任せられる。

「ヴァインセント！」

世話役として来てもらった大人を呼ぶ。

「逃げ遅れた敵が隠れてるかもしれない。世話役5人でこの辺一帯を洗ってくれ。期間は一日。終わったら全員、爺様の指揮下に入るんだ」

「わ、わかった！」

集落はこれで良い。というか、現状でできることが少ない。海に特化した俺達にとって、山や森は専門外なのだ。今後はそれも改善していかなくてはならない。

「他の皆は、俺と帰還する。村が襲われている可能性が高い！ 強行軍になるから、覚悟していけよ！」

一旦言葉を切る。マックスをはじめとした若者達を見回してから、せいぜい勇ましく声を張り上げた。

「一刻も早く戻るぞ！俺達が村を守るんだ!!」
「おおー！」

傭兵を雇うことで、村もそれまでのあり方を変えつつあった。ワレンからガルダ海へと抜ける航路に簡易な見張り台をこしらえ、当番制で傭兵に詰めさせる。交流会に10人の内5人が同行したため、現在は残り5人が交代で務めていた。

その日、当番の傭兵が見たのは、三隻からなる海賊の船団が北上してくる様子だった。ガルダ港へ帰還するにしては、東に寄り過ぎている。接岸の場所を吟味しているかのようだ。

——村が狙われている!?

彼が傭兵として雇われてから約一年、これまでも海賊の襲撃は何度かあった。規模は小さく、たいてい船一隻、多くても10人前後。迷い込んだついでに未開の原住民を拉致してやろうと襲ってくる小物ばかりで、返り討ちにするのにも慣れてきた頃合だった。

眼下を進む集団は、明らかに異常だ。およそ50人。いずれも屈強な体躯にふてぶてしい表情を浮かべ、獲物に襲いかかる瞬間をいまかいまかと待ち構えている。ひと目でわかる。あれは迷い込んできたのではない。襲撃者の群れだ。

知らせなくてはならない。あれだけの集団相手に、自分ひとりではどうにもならない。次代の担い手達が不在で何ができるかはわからないが、それでも傭兵としてのプライドがある。

見張り台から飛び退いた瞬間、左の二の腕に矢が突き刺さった。

「ぐっ!?!」

激痛よりもショックの方が大きい。船からではない、まだ距離がある。どこから射られた?

「死ねやー！」

「おうりゃー！」

左右からの挟撃。完全な不意打ちだった。右からの斧を転ぶよう

に避けたが、ワンテンポずれた左の山刀が負傷した左腕を裂いた。た
まらず苦悶の声漏れる。

(こいつら、伏せていやがった！)

昨日今日の話ではない。敵はずっと前から村の周辺を偵察してい
たのだ。海側から巧みに隠された見張り台を発見し、襲撃の直前に排
除しようと潜伏する。相当の手練れだった。

村への道をひとりが塞ぎ、負傷した左側にもうひとりが回り込みつ
つある。憎らしいほどに抜かりがない、実戦で培われた狩りの技。海
賊にしておくのが惜しいほどの敵がふたり、自分の前に立ち塞がつて
いる。

(……これは駄目かもしれん)

万全ならともかく、片腕では難しい。いまの自分には、村に行かせ
ないよう粘り続けるのが関の山だ。

崖下から男達の雄叫びが聞こえる。

アカネイア暦540年 モステイン 11歳 (e)

まともな隊列を組む余裕はなかった。動ける者が我先にとひた走
る、がむしやらな行軍。それでも最低限の統率のために、俺とマツク
スが先頭について小休止をとりつつ後続を合流させ、まとまったら再
び走らせることを繰り返す。

村までの道のりは徒歩で三日、走れば二日。これまでにない急行軍
に、戦士も兼ねる若者達の息は荒い。それでも脱落者はひとりもいな
かった。自分達の村に、かつてない危機が迫っているからだ。

「目印の一本杉が見えた！ 急げ、急げ、急げ!!」

焦りと疲労が、なけなしの理性を狂わせる。そんなつもりはないの
に、冷静に出したつもりの指示が絶叫にしかならない。それを取り繕
う余裕もない。誰もいない先頭を走れば走るほど、心の奥底の不安を
自覚してしまう。

後手だ。後手に回されてしまった。

俺の意識が村の中になばかり向いていたせいで、ターム達の置かれた
苦境を把握していなかった。それがこの苦境を招いたのだ。もつと

連携しておけば、こんなことにはならなかったのに。

村。集落。海。山。森。

垣根だ。“あっち”と“こっち”の垣根が判断を鈍らせた。村は村、集落は集落で孤立してしまった。海の民と山の民、同じひとつの島で暮らしているはずなのに、互いに深入りを避けたせいで、同じ脅威にさらされていることを忘れてしまったのだ。

密にならなければいけない。

一にはなれない。そこまでは期待できない。ひとつの村の中でさえ不和は生じる。ましてや、海と山ではあり方が違い過ぎる。それでも、手をとり合って共通の敵に立ち向かい、同じ目的のために協力できたはずなのに。

変えるべきは、ひとりであるという認識だ。

孤立してはならない。我が物顔で海賊がのさばるこの世界で、閉ざされた環境は死を意味する。敵が集団でくるのなら、こちらはそれ以上の集団で動かなくては勝てない。それもバラバラでは駄目だ。いくつもの集団をまとめるリーダーが要る。

タームが死んだ。

重くのしかかってくる。ターム。俺に嫉妬していたのかもしれない。それでもあいつは友人だった。未来のある、集落を率いるリーダーになれる人材だった。もういない。あいつが率いるはずの集落は壊滅し、唯一残された家族は4歳の女の子ひとりだけだ。

あの子がどう成長するのかわからない。だが、タームのように優秀だったとしても、そこまで育つのにどれだけかかる？ その間、集落を預かるのは――。

わっ、と声が響いた。

「見ろ、煙だ！」

「村が……村が燃えてる!!」

二日間を走り続けた俺達は、とうとう村の目前までたどり着いていた。俺の後ろから聞こえてくる声に喜びはない。

黒煙が昇っている。方角からして船着き場に停めた船か、フィットマン達の職人小屋。あるいは両方が燃やされたのだ。そこから村の

出入り口までの家々が何軒か、同じように煙をあげている。

最初はごま粒のように小さかった幾つもの影が、近づくにつれて大勢の人影に変わった。村から逃げてきた女子供だとわかったのは、先頭を走るネイサン坊やの泣き腫らした顔を見つけたからだ。

「ネイサン！ 村はどうなってる!？」

「来た！ 来ちまったよお、モステイン！ たくさん、たくさんだ！
なんであんなに来るんだってぐらい大勢だよお！」

あの捕虜の言葉が正しかったのだ。ペラティ海を荒らしまわる荒くれ者50人、それが北の港を制圧した男に率いられて、思うがままに村を襲撃している。間に合わなかった。何人かが膝をつく音がする。

まだだ。

まだできることがある。

「武器をとれ！」

絶叫する。まともな指示を出せるのは、これが最後になるだろう。

あとは理性も正気もかなぐり捨てて戦うことになる。

「俺達の村から、海賊どもを叩き出す!!」

22. 窮鼠鬼を為す

(こんなはずじゃねえ)

自分の思い通りにいかない現状に、バーンズの苛立ちは止まることを知らない。何十人も血を吸ってきた愛用の斧を力任せに振る。しつこく向かってきた傭兵が宙を飛び、家屋に激突して動かなくなつた。光を失った瞳は閉じられることなくバーンズを見つめている。恐怖よりも、苛立ちがさらに増した。

(どうしてこうなつた?)

100人の部下を二手に分け、ワーレン北の海を北上した。めずらしく頭を使って伏せさせた部下が見張り台を制圧したのだろう、三隻は悠々と村の船着き場に接近できた。海賊船であると気づいた村人達が悲鳴をあげて逃げていく姿に、自分も部下達もどうしようもなく加虐心をそそられて、勢いのままに襲撃を開始する。

運までも自分達に味方した。護衛らしき傭兵が数人いるだけで、村には若い男手がまいったくないなかつたのだ。五十歳を越えて衰えた漁師ごときでは、荒事に慣れ切つた海賊の相手はできない。なによりも数が違う。油断した馬鹿な部下が何人か反撃にあつたものの、はなから期待していない。足手まといにならなければそれでいい。

目ぼしい女や奴隷用の子供を捕まえようとしたが、思いのほか動きが良い。よほど躡が行き届いているのか、家も荷物も捨てて村の外へと駆け出していく。それを追いかけていった部下の前に、よろよろと老人が立ち塞がった。

「邪魔だ、ジジイ！」

殊勝にも女の盾になろうとする老人が、手に持ったナマクラで力任せに両断される。肩から胸まで刃先がめり込んだところで、予想外の反撃を食らつた。

「がっ!？」

部下の後ろ首から、血で赤く染まつたナイフが冗談のように生えていた。どくどくと鮮血を噴き出しながら倒れこんだ男にのしかかりながら、心臓まで斬られたはずの老人がニタリと笑って絶命する。

(……いまのは、何だ?)

さすがのバーンズも足を止めてしまうほどの光景だった。窮鼠猫を噛む。追い詰められた弱者が逆襲してきた経験なら、バーンズにも数えきれないほどある。だが、いまの老人の姿は、それとは別のような気がした。

「ぎゃあああああー!」

ひととき野太い声が上がった。真横の小屋の入り口。家を物色してやろうと侵入した瞬間、音もなく潜んでいたのだろう老婆が不意打ちで部下を突き飛ばし、馬乗りになって何度も何度も胸を突き刺している。全身を返り血で真っ赤にしながら、何がなんでも殺すのだと、狂気すら感じさせる殺意を剥き出しにしていた。

「クソババアめが!!」

バーンズの斧が一閃し、老婆の首が飛んだ。頭部を失った小柄な屍が、死に絶えた男の作った血の海に沈む。辺り一面が朱に染まっていた。

なんだ。

なんだ、この村は。

「は、離せ! 離しやがれえ!!」

馴染みのある声があった。北の港を制圧する前からの部下で、バーンズなりに重宝していた手練れの海賊である。腕っぷしも三人力といわれるほどの男が、どうして情けない悲鳴をあげているのか。

新築らしき小屋の壁。そこに打ち付けるように、右肩と左太腿を二本の銚で貫かれた男がいた。それぞれの銚を離すまいと、ふたりの老人が懸命に抑え込んでいる。決死の覚悟でも力の差はどうしようもない。左太腿にすぎりつく老人の身体が、めりめりと引き剥がされていく。

銚の位置が悪かった。右肩に打ち込まれたことで右半身が使えない分、左の自由が利いていたのだ。激痛による怒りと恐怖で、男も力のリミッターが外れている。大汗を流す老人の細い首を、丸太のような男の手が掴み、一息にくびり上げた。

みるみる弛緩する身体を見て、残された老人が金切り声で叫んだ。

「トム爺！ 出てこんか、トム爺よお！」

「おう、いま片付いた！」

すだれの垂れた室内から、血に濡れた槍を抱えた老人が現れた。ひと目で状況を悟ったのか、油断なく槍を構える。これも位置が悪い。新手の老人が出てきたのは右側であり、しがみついたままの老人の背が邪魔をしている。部下もそれを理解して、加虐の笑みを浮かべていた。

そこからの動きは、バーンズの理解を超えた。

自分ひとりでは抑えられないと見た老人は、鉋ではなく男の首にかじりつくように両腕を回した。くぶり殺した老人を離し、自由になった左腕が拳を作ると、その背を何発も殴る。骨と皮だけの薄い身体があつという間に破壊されていく中で、老人がもう一度叫んだ。

「ワシごと刺せえ!!」

「——先に逝けや!!」

いつさいの迷いなく、鋭い刺突で繰り出された槍先がふたりの首を刺し貫いた。によつきりと壁から生えた一本の槍の下に、ふたりの人体のオブリエが重なる様は、とうてい現実のものとは思えない。

気が付けば、村のいたるところで部下達が逆襲に遭っていた。非力な、殺されるだけの、獲物ですらない障害物が、何倍もの力の差を命でもって覆して海賊を殺している。

「……な、なんなんだよ、お前らあ?！」

後方から追いついてきた部下が、あまりの惨状に顔を真っ青にしながら叫んだ。無抵抗なはずの羊に手を噛まれるどころか、命すら捨てる羽目になったのだから当然だった。目の前の光景が現実のものと信じられないのだ。

槍を失った老人が懐から山刀を抜き取ると、ケケケ、と低く笑った。

「他のところは知らねえがよ」

口端がひきつったように吊り上がった。

「——ワシらの父も! その父も! こうやって村を守ってきたのよ! 何が怖いものか! 何が海賊じゃあ! 貴様らごときが村をどうにかできるものか、思い知らせてくれるわ!!」

い。それでも連日の稽古で振ることはできるようになっていた。

村の中央に陣ともいえないラインを引き、女子供の盾になる。あまりにも戦力が違いすぎた。老人達が自分の身を犠牲にして食い止めてくれたおかげで、最悪の事態は防げた。それでも現状は如何ともしがたい。

この場にいる全員が死を覚悟していた。唯一できるのは、ひとりでも多くの村人を逃がして、次代を担うモステイン達の助けにすること。若者達が交流会に出発してから、残された者達で話し合ってきた誓いである。

斬り込んでくる海賊を必死になって防ぐ。一合しのぐたびに死ぬ思いがした。自分が押し込まれるたびに誰かが助けに入り、協力して倒す。いつまでもは続かない。ひとり、またひとりと倒れていき、10人いたはずの盾が3人にまで減っていた。

「てめえらあー！」

ひとときわ野太い声が響く。頭目らしき髭面の男が、血をしたたらせた大斧を突きつけて姿を現した。

見せつけるように、丸太のように太い腕で羽交い絞めにした女を盾にする。

「こいつの命が惜しけりや、無駄な抵抗するんじゃねえ！ 武器を捨てやがれ!!」

「……なんてことだ」

我知らず、声が洩れた。

捕まえられたのは、村長の妻だった。いくつもの火傷と、服に焦げ跡がついている。襲撃の最中に、逃げ遅れた村人達を助けていたのだ。長の妻としての責務だと判断したのだろう。それが仇になった。

ミシ、と骨のきしむ音がする。苦悶に歪む女を抱えて、男がせせら笑った。

「早くしねえと、うっかり殺しちまうぜ？」

奥歯を強く噛み締める。

武器を離せば妻を殺さない、と目の前の海賊はいう。だが、それが信じられるのか？ この男からは、どこまでも暴力の臭いしかな

い。ただただ自分の欲望のままに動くだけの男だと、ひと目で理解できてしまう。そんな男が本当に口約束を守るのか？　だが、離さなければ、確実に妻は殺される。

剣を握る手から力が失われる。男がゲラゲラと笑った。

「そうだよなあ！　離すしかねえよなあ！」

その反応こそが見たかったのだ。村に侵入して以来、何度も胸糞の悪い気分させられてきた。狂人どもめ！　唾を吐いて捨ててやる。どうして強者に従わないのか。おとなしく殺されていればいいものを。

「てめえらみたいなど辺境の田舎者はなあ、黙って俺達に奉仕してりやあいんだよ！　それを勘違いして盾突きやがって、なにを勘違いしてやがる!?　このクソヤロウども、さっさと武器を捨てて這いつくばりやがれ！　こいつだけじゃねえ、村の連中全員やつちまったっていいんだ！　往生際の悪いジジババどもみてえによお!!」

暴言にもつとも強く反応したのは、村長でも傭兵でもなく、村を走り回った妻だった。

(この男は、絶対に約束を守らない)

どうなろうと自分は死ぬ。死ななくても、奴隷としてどことも知れない国に売り飛ばされる。他でもない、男が苛立ちまぎれに独り言で叫んでいた犯行予告だった。

(そんな恥をさらすくらいなら)

村の人間として戦ってやる。

決意はすぐに実行された。無防備に置かれた男の足を、全力で踏み抜く。激痛に緩んだ腕を強引に抜けながら、隠し持っていたナイフを顔面に突き刺した。

「ブ、ギャツ——!?!」

口を真一文字に裂かれた男がのけぞる。完全に拘束が解けたことで、妻が夫のもとへと駆け寄ろうとした。

「あなた！」

「だめだ、逃げろ！」

男の頑丈さは、どこまでも桁違いだった。顔面を血で染めながら、

手にした大斧を半ば反射的に、怒りのままに振り上げる。肉の筋をなぞるように、女の腰から頸椎にかけて深々と斬り裂いた。

己に向けて手を伸ばしながら沈む妻に、夫は声にならない声で絶叫する。その瞬間、彼は自分の人生を形作ってきた理性も、倫理も、なにもかも忘却した。掌に持った凶器を構え、生まれて初めて抱いた明確な殺意のままに距離を詰める。

一心に突き出された剣先が左肩を貫くと同時に、返し様の戦斧が男の胸部を断ち切った。

(……駄目だった、か。私だものな。上手くいくはずもない)

身体の熱が急速に失われていくのがわかった。傷口から命の灯がこぼれ出している。受け身もとれず、仰向けに大地へ倒れこむ。かわらに眠る妻の仇をとってやれなかった。夫として、男としての無力感を味わいながら死んでいくのだ。それもまた自分らしい。

色彩の消えた視界に、ひとつの影が現れた。

見慣れた顔だった。ふたりの間に生まれた愛の結晶。戸惑いもしたし、困りもした。だが、愛していた。不出来な父ではあったが、注いでやれた愛にだけは自信を持って頷ける。届かないと知りながら、震える手を伸ばす。

——生きておくれ、私達の分まで。

遠い異国の地に憧れながら、村のために生きた男は、最期までワーレンの街並を目にすることなく生涯を終えたのだった。

アカネイア暦540年 モステイン 11歳 (f)

見慣れた父の手が、力なく地面に落ちた。何かを掴もうとしたのだろうか。あるいは昔のように、幼かった頃の俺の頭を撫でようとしたのかもかもしれない。その瞳には何も映ってはいなかった。血の通わなくなつた顔がどこまでも穏やかで、この世のしがらみから解放されたのだと理解できた。

その横には、無惨に背中を割られた母がうつぶせに横たわっている。激痛によるショックで亡くなつたのか。苦悶に歪む死相の中で、口だけが誇らしげに笑っている。無力な自分が敵に一矢報いた、その

功績を噛み締めながら逝つたのだろうか。

俺の親が死んでいた。

ふたりとも、争いごとには無縁の人だった。平穏を愛して、変わらない日常が何よりも贅沢だと信じて、村に生きる人々の幸せを願う、どこにでもいる普通の人達だった。

変わり種の俺でも愛してくれた。どんなに迷惑をかけたかもわからない。どこまでも苦勞のし通しだっただろう。村が落ち着いたら、家族でワーレンの街並みを歩き、自分が案内してやるのだと心に決めていた。きつと喜んでくれる、これからは安心して暮らせるのだと、その日を待っていたのに。

すべてが台無しになった。

ありえたはずの未来が、海の彼方に消え失せた。

「

音が消えた。目の前の大男が、倍以上に裂けた口を開けている。聞こえない。後ろで大勢の誰かがなにかを叫んでいる。わからない。聞こえるのは自分の心臓の音だけだ。疲れきつたはずの脈動が、別の力を呼び起こしたようだった。

世界から色が失せた。あるのはただ、人と物だけだ。空に立ち上る煙の下で、俺の邪魔をするナニカが蠢いている。俺の大切な宝物を壊した敵。そう、敵だ。俺の前には敵しかない。ならどうする。どうすればいい。

奪うことしかできない者達に、俺は何をくれてやれる？

鬼が哭う。

この世のものとは思えない叫びをあげて、一匹の魔獣が爆ぜるように大地を蹴った。

23. 受け継ぐということ

人間ひとりの人格を解体してしまえば、バーンズという暴力の化身のような男はその実、どこにでもいるアウトローに過ぎなかった。

小難しいことを嫌う、などとうそぶき、本人も信じて疑わないのだが、実際には自己欺瞞の陶酔でしかない。相手に逆らう気力を失わせるほどの力の差を見せつけて、自分に有利な取引を結ばせる。そこにいたるまでの過程で与える被害を考慮していかないだけである。

北の港を制圧した理由など、いたって単純かつ迷惑極まりないものだった。信じられないことに、当初の彼は交渉しようとしていたのである。ところがいざ襲撃を終えてみれば、ろくに統率せずに暴れさせたせいで港の有力者達が全滅していたという、あまりにもお粗末な現実が待っていた。

普通なら不手際に頭を抱えるところだが、バーンズの算盤ではそうならない。いくら探しても話す相手がないのだから、好きなかだけ奪っていいだろう。本当にそれしか考えていなかった。ペラティ海賊達が『恥知らずのバーンズ』と陰口を叩くのも無理はない。

大雑把で短絡的という、どうしようもない欠陥からの残虐性に隠されているが、それらのすべては暴力を交渉の駆け引きに使おうという打算である。化けの皮を剥がしてしまえば、根っこは「足を踏み外した常識人」でしかない。

だからこそ、目の前に現れた本物の異常が理解できなかった。

新たにやってきた、発育の良いガキと20人かそこらの集団。自分の傷と部下達の士気と比較して、いささか分が悪いと判断する。だが見たところ、リーダーらしきガキに生気がない。この憎たらしい夫婦の息子だろう。脅しにかければ難なく従うに違いない……ほんの一瞬で、バーンズはそこまで計算を働かせた。

それが誤りであることを、彼は身をもって理解する。

「てめえら、命が惜しくな——」

ヒトの形をした獣が翔ぶ。バーンズの左肩を貫通する剣を握りぎま、より醜悪になった顔面に膝がめり込んだ。ひしゃげた鼻と、塞が

れていた物体の抜けた空洞から大量の血が噴き上がる。血の道をつくりながら巨体が倒れ込む。

「か、頭!？」

「この野郎!」

30人からなる群れに、無謀にも単身飛び込んできた少年を圧殺しようとして部下達が動き出す。だが遅かった。まさか一言も交わさずに戦闘が始まるとは思わず、受け身の対応しかとれない。

「死ねや!」

疾い。集団の中で、ひととき動きの鈍い雑魚をめぐけて剣を投げつける。銛で鍛えられた投擲が尋常ならざる速度で飛来し、たちまち心臓に突き刺さった。

砂地に落ちたバーンスの大斧を握るや、全体重を乗せて振り回す。最も近くに迫っていた男が獲物ごと腕を両断され、ふたりの剣が折れた。親を殺した武器など要らないとばかりに放られた大斧が遠心力に従って飛び、不幸な海賊の顔面を破壊する。

宙に飛ぶ剣を掴む。節くれだった腕を引き剥がして構え、息つく暇も与えずに飛び掛かる。

「死ねや!・死ねや!・死ねやあ!!」

もはや人外の魔性だった。人体を壊すことに一切のためらいもなく、自らに向けられた害意を徹底的に排除せんと凶器を振るう。影が動くたびに欠損された四肢が空に舞い、阿鼻叫喚の地獄と化した。

狂気は伝染する。

「武器を取れ!」

マックスの叫びがこだまする。この数日で驚くほど皮膚に馴染んだ得物を構えた一同は、それぞれの感情に思いを馳せた。

(どうしてあいつがこんな目に遭うんだ)

肉親と旧友を失い、青春を捧げて育んだ村を破壊された少年の心が、どれだけ傷つけられたか。涙を流す者がいる。理不尽に怒る者がいる。

(お前のためなら戦える)

たび重なる不幸に心折れることなく、その身ひとつで斬り込んだ姿

に、どれだけ勇気を与えられたか。仇が討てると喜ぶ者がいる。恐怖に勝る悦びに笑う者がいる。

(――あの少年を、死なせてはならない！)

彼らの心は、いまひとつになった。

「俺達の英雄に続けえ!!」

鬼に魅せられた彼らもまた、鬼となって進撃する。息絶えた老人達の執念が憑依したような悪鬼の群れに、海賊達は心底震え上がった。

「ひい、ひいいつ……!」

左肩にぼつかりと開いた空洞を抑え、顔面を破壊された男が見栄も外聞もなく逃げ惑う。合流した部下に足止めを命じて、自分だけは助かりたいと船着き場に走った。

わからない。どうして自分が逃げているのか、激痛にさいなまれているのか。

すべて順調だったのだ。文明から遠く離れたへんぴな漁村をひとつ、50人の腕自慢が蹂躪する。たったそれだけの、ずっと上手くやってきた仕事だった。なぜそれが失敗したのだ。わからない、わからない、わからない――!――!

背後から悲鳴が轟く。幾つもの刃先が肉を貫く音がした。

(ここは虎穴だ)

人間が手を出してはならない領域だった。この世に恐れるものはないと自負していたバーンズは、生まれて初めて恐怖を自覚した。肉体の欠損と引き換えに、彼はようやく自身愚かさを理解したのである。あまりにも遅い自己認識だった。

化け物じみた頑丈さはここでも発揮された。常人なら失血死してもおかしくはない量の血を流しながら、バーンズの下半身は走り続ける。燃え盛る家屋を抜け、襲い掛かる村人達の槍に皮膚をえぐられながら、乗ってきた船に転がり込んだ。

「出せえ! さっさと出しやがれ!!」

「け、けど、まだあいつらが……」

「出せっつていつてんだよお!!」

いつまでも帰ってこない仲間が気がかりで、船出の準備を終えていたのが幸いした。頭の命令に従い、船体が船着き場から離岸する。置いていかれた部下達が、悲鳴と怨嗟の声をあげながら死んでいく。乗船していた10人全員が漕ぎ手となり、あつという間に島から離れていった。

運はどこまでも彼に味方する。おりからの天候が時化に変わり、バーンズの乗る船は追い風を受けて速度を増す。天の配材とばかりに嵐のような豪雨まで発生し、雷雲が海を覆い尽くした。

これでは浜辺から矢を打つても届かない。幾つかの流れ矢が船体に突き刺さるだけだった。村人達が歯噛みして小さくなる怨敵を睨む。その視線を受けながら、バーンズはようやく安堵の息を吐いた。手近なマストに背をもたれかけ、宙をあおぐ。

その表情が、たちまち恐怖に染まった。

「バアアアアアンズウウウ!!」

地獄の底から響くような声とともに、見張り台から一匹の魔獣が吼えている。天の意思など知ったことではない、絶対に殺してやる。殺意に彩られた双眸が爛々と輝いている。男は思わずのけぞった。視界から逃れようと足をもたつかせながら、マストを盾にして隠れる。「死にいいいねえええええええ!!」

全身を朱に染めた鷹が翔ぶ。大海に身を投げうつのもためらわず、世界でもっとも憎悪する敵を抹殺するために全身が躍動する。その手に握られたのは、村とおのれの人生を変えるきっかけになった銚子だった。

雷が飛来する。驚愕に歪んだ男の左肩を今度こそ粉碎し、ちぎれた片腕が宙を舞った。衝撃に耐えきれず、2メートルの巨体も海中に投げ出される。

轟々と降りしきる雨音に、ふたりの水没する音が埋もれて消えた。

アカネイア暦540年 モステイン 11歳 (g)

止まない雨はなく、日もまた昇る。誰かの不幸もお構いなしに、自然のサイクルは絶えることなく移ろう。アカネイア大陸であろうと、

名も無き島であろうと、それは変わらなかった。

嵐は何もかもを海に帰していった。人々が流し尽くした血も、黒煙を上げて燃え盛った家の火も、嘘のように洗い流された。延焼に悩まされなくて済んだのは、なけなしの幸いだっただけかもしれない。

失った命の数だけ、墓が刻まれる。村の墓地に新しく建てられた慰霊碑の前で、俺は脱力して座り込んでいた。この数日があまりにも忙しく、ようやく落ち着いてここに来ることができたのだ。

杖をついてきた老人が、俺の横にたたずむ。

「酷いの」

爺様の呟きに、俺は無言でうなずいた。

海賊の被害は目を覆いたくなる規模だった。俺の親、村長夫婦が亡くなり、父とともに戦った大人達の11人が帰らぬ人となった。逃げきれずに殺された女達は7人。15人いた古老達は、爺様を残して全滅。ワーレンで雇った護衛10人の内、村に残した5人が戦死した。最後の乱戦で死んだ若者は3人。120人いた村人は42人を失い、78人となった。

長を失った南の集落はさらに酷い。爺様が指揮をとっている間に先代の長が息をひきとただけでなく、傷口から感染症を患った重傷者が数人、あの世へと旅立っていった。残った人口は51人。もはや集落としての生活を維持できず、3日をかけて村に移住してもらっている。

129人。村と集落、あわせて200人はいたはずの人口が、たった一週間で6割まで落ち込んだ。片方は生き字引の知恵を持つ老人達と、村を牽引してきた村長達を失った。もう片方は集落の基盤そのものを破壊され、つい先日まで対等だったはずの村に併合された。

目を逸らすことはできない。この数字こそが村の置かれた現状であり、俺が、俺達が乗り越えなくてはならない現実だった。

「……これが、この島で生きるといふことじゃ。人々はいつ来るともしれぬ脅威に怯えながらも寄り添い、子を産み、育てる。危機が迫れば、子の身代わりとなって死ぬ。かつて自分が生かされたように、のめつきり皺の増えた指先が、慰霊碑を寂しげに撫でる。」

「あれも昔はやんちゃでなあ」

ありし日の父を思い浮かべたのか。爺様の顔は、透き通るように澄んでいた。

「閉鎖的な村を憂い、その中で生きる窮屈さを嫌って、何度も海に出ては連れ戻された。ワシの手で引きずって帰ったこともある。それがいつしか牙も抜けて、毒にも薬にもならない気弱な村長になりおつたが……いつのまにか、あれも立派な男になっておつたのじゃなあ。ワシは、それが誇らしゅうてならん」

撫でるたびに、思い出をひとつひとつ揺り起こしているのだろう。爺様の手は止まることがなかった。その姿がどうしようもなく哀しくて、俺は見続けることができなくなった。立ち上がり、すっかり小さくなってしまった背を後ろから抱きしめる。直に触れて、初めて理解した。

爺様は震えていた。誇らしくもあるだろう。立派になった息子の成長を嬉しくも思うだろう。だが、その息子はもうこの世にいないのだ。親よりも先にあの世へと旅立った息子を、どうしてこの世から祝ってやれるのか。頭を撫で、背を叩き、よくやったなど声をかけてやることもできない。生者が死者にしてやれることなんて、たったひとつしかない。

忘れないこと。

それだけが、俺達にできる唯一の手向けなのだ。

「爺」

腕の中の祖父が、ぴくりと震えた。

「変えるぞ」

「……」

「俺は、この村を変える。村だけじゃない、タームが遺していった集落も変えてやる。二度とこんな思いをしなくても済むように、俺が生まれ変わらせてやる。海賊なんて蹴散らせるだけの力を持って、見たことのない食い物や景色を、当たり前前のものにしてみせる」

失われた人々を想う。この2年で、俺は彼らに色々な思いを抱いた。理解されないことに悩みもしたし、分からず屋に怒りもした。憎

んだことだつてある。同じ村に暮らしているのに、どうして分かり合えないのかと心底苦しんだ日々もあった。

この地の下に眠る命達、彼ら全員が村のために戦つたのだ。命を引き換えに、次代を担う者達に未来を託して散つていった。彼らの名前が大陸の歴史に刻まれることはない。どこにでもある、名も無き島で起こつた過去の悲劇として、いつしか忘れ去られるに違いない。

それでも思うのだ。

彼らにバトンを渡された俺達だけでも、受け継ぐべきものがあるのだと。自分の命よりも大事なものがこの世にあるのだと、そう信じて逝つた彼らが間違つていなかったのだと、証明するために生きていくのではないか。

それこそが、この島で生きる俺達の宿命であり、果たすべき誓いなのだ。

「……ワシより先に、逝つてくれるな。誰かの死を見送るのは、もう御免じゃ」

祖父の呟きが、潮風に乗って消えていった。

24. 家族が増えるよ

アカネイア暦540年 モステイン 11歳（h）

昨日までいたはずの人間がごっそりいなくなり、その穴を埋めるように大勢の他人がやってくる。

いくら交流のある相手でも、今日から一緒に暮らしましょうねといわれてスムーズにいくわけではない。ましてやこちらは海の民で、向こうは山と森に生きる民である。生活サイクルに適應するまでそれなりの時間がかかる。

それを少しでも埋めるためにどうするかといったら、お互いの組織のトップが仲良く生活するのが手っ取り早い。というか、あちらは親に続いて兄と祖父を失い、たったひとり残された4歳の女の子である。祖父同士で縁があったこともあり、うちで養育しようと思っただ。

……あの襲撃の後、俺の家はひっそりと静かになった。穏やかに過ごす父と母、ふたりの姿が消えた家は寒々しいほど広くなり、寂しさすら覚えたものだ。息子夫婦を失った爺の落ち込みもあって、俺も心細かったのかもしれない。新しい家族が欲しかったのだろう。無性に誰かの存在が恋しくなったから、タームの妹を迎えるのに抵抗はなかった。

集落の引越しを終えた夜。我が家の一員となった少女は、自分も家族を失った悲しみを見せることなく、ぺこりと頭を下げってから、笑ってこういふのである。

「ミナ、です。モステインさんのことは、あにさまからたくさんおしえられました。これからよろしくおねがいします」

めっちゃしつかりしてる。

俺が4歳のときってこんなだったっけ？ 爺のアカネイアの話にふーんといいながら鼻をほじってた気がする。少なくともこの子ほど人間が出来てなかったのは間違いない。よほどターム達が大事に育てたんだろう。

こうしてミナを加えた3人の生活が始まったのだが。

なんというか、その、うん。

人生が変わった。

「モステインさんは、すごいひとですね」

「あにさまがいつてました。モステインにまけたくない、ぜったいならんでやるんだって。でも、わらってたんです。あいつともだちになれたのがうれしいって、いつもじまんしてたんですよ?」

「モステインさんは、がんばりすぎです。みんながあなたをたよつてます。でも、モステインさんは、ひとりしかいません。たおれてしまいます」

「だから、ミナといるときぐらい、やすんでください。いっしょにおはなをさがしたり、つりをおしえてください。そうしたら、もつとやすめますよね?」

なんだこの子、天使か。

よくよく考えたら、俺の家は女つ気こそあつても華がなかった。亡くなった母は肝っ玉母ちゃんで、お手伝いさんも花より団子の丸い人。こんな小さな女の子とか来たことあつただろうか。無いわ。これっぽっちもない。

なるほどなあ、我が家には潤いが足りなかったのか。納得しながら仕事を終えて帰ると、奥からでて、と迎えに来てくれる。

「モステインさん、きょうもおそくまでおつかれさまです。いいこ、いいこ」

精一杯背伸びしても腰ぐらいしか届きません。黙っていると悲しそうな目で見つめてくるので、膝をついてしゃがんであげる。そうすると、パアツと笑って俺の頭に手を置いてくるのだ。

かわいい。

むっちやかわいい。

決めたわ。いや誓うわ。なんだつたらリフの信じてる神様に宣言してもいい。俺はこの子の兄になる。タームの分まで愛情を注いでやる。こんな良い子が天涯孤独の身なんて許されん。絶対に面倒見てやるからな。

ところで爺、なんでそんな哀れんだような目で俺を見るの?」

「兄と妹で済むとは思えんのじゃが……政治的にまるつと収まるし……おそらく、お前の思う通りにはいかんぞ?」

「ははは、なにを馬鹿なことを。俺とミナなら仲良くなれるに決まってる。そう思うだろ、お茶を飲みに来たマックス君にフィットマン君。おい、なんで目をそらす? そんなに信用ないか俺?」

「だいじょうぶです。モステインさんには、ミナがずっとついていてあげます」

「うん、ありがとうね。お兄ちゃん、ミナのために頑張るからね。お前もあの世から見守ってくれよ、ターム。この子がこれ以上不幸な目に遭わないように、俺が絶対に守ってやるから——!」

「ああつ、さつきまで元気に飛んでいた海鳥が!」

「落ちたな」

「タームが天国から送ってくれたプレゼントに違いない。今夜は鳥鍋にしようかね。実験で作ってた魚醤がようやく完成したから、ワサビも足して良い感じにしてやろう。次に来るトワイヌ商会の船に乗ってワーレンに行ったら、ありったけのネタを提供してロイヤリティを確保しないとイケない。」

「金が足りんのだよ、金が。せつかくこさえた自前の船が燃やされた上に、高い金を払って雇った傭兵も半数が戦死。村では作れない鉄製品もおしやかになくなった。このままでは防衛もおぼつかない。村を離れるのは正直不安だが、総責任者である俺が直接出向いて交渉しなくては、回るものも回らなくなる。」

「モステインさん、どうしましたか?」

「味付けは何がいい?」

「おいしいものがたべたい、です」

「よろしい。素直な子が好きだよ、俺は」

「君にもワーレンを見せてやりたいよ、ミナ。亡くなったみんなの分まで、生きることの楽しさを味わってほしい。別れの辛さだけじゃない、出会いの喜びだってあるんだから。」

「タコワサがいちばん好きです! コリコリして、ツーンときて、すつぷー」

あつ、この子将来ウワバミになるわ。村の酒を全部飲まれるかもし
れん。ジョンソンには近づけないようにしよう。

25. 聖者が村にやってくる

アカネイア暦540年 モステイン 11歳 (i)

なんでこいつは美形に拍車がかかってるんですかね？

「見違えましたね。男子三日あわざれば、とでもいいましようか。貫禄がついていますよ」

お前は一段と美少年になってるよ。ふたり並んで歩いたら、明らかに道行く人達の視線が集まる。俺みたいな漁師なんて珍しくもないが、ロレンスは本物の貴公子であり貴種だ。この街でもVIPの待遇を受けてもおかしくない。それがこんな赤褐色にこんがり焼けたガキと連れ立って歩くもんだから、目立つことこの上ない。俺なんて荷物持ちの従者か奴隷扱いがいいところだろう。それぐらい人種が違う。

聞けばこの二年、アカネイアで回れる都市という都市を観光してきたらしい。マケドニアでは大金を払って飛竜にも騎乗したというから、どんだけ見聞を広げたんだろうか。まだ調教の技術が確立できていないので実用化には程遠いそうだが、運よく人懐っこいのがいたとかで、なかばゴリ押しで乗せてもらったのだと。美形は運まで味方につけるのか。

いや、本当におかしいんだよこいつは。それだけ活発に動き回るってことは、しょっちゅう日に焼けて当然、でなきゃ何かの間違っていろ。にもかかわらず色白美形。お前は吸血鬼か何か。皮膚レベルで紫外線カットの細胞が宿っているのか。あるならミナに移植してやってくれ。あの子が望むならだけど。

お互いの近況を伝えながら、ワーレンの街並みを観察する。露店の質、客層、さらには空気の緊張具合。すぐにわかった。

「活気が増したな」

「あなたのおかげですよ」

「俺の？」

ロレンスが一角を指さした。牢屋へと連行される捕虜が数珠つなぎになっている。

「北の港を破壊した後、ペラティ海賊でも頭角を現したバーンズ率いる一派が壊滅しました。頭目のバーンズは片腕を失いながら海に落ちて行方不明。100人いた部下は70人が殺され、30人が命からがら帰還したものの、その内の10人が恐怖で使い物にならなくなつたそうですよ。よほど怖い目に遭つたのか、夜になると鬼の雄たけびが聞こえるんだとか」

……なんだろう。改めて第三者に聞かされると、つくづく無茶のし通しだったなと実感してしまう。村と集落うんぬん以前に、自分が生きてワーレンを歩いているのが奇跡としか思えない。もう一度同じことをやれといわれたら無理である。モノノケか何かが憑いていたのではなからうか。

「実力だけはあつたバーンズが消えて、80人という戦力を失つたペラティ海賊はこれまでになく鎮静化しました。このあたりの海は平穏そのものですよ。安心して船が行き来できるのですから」

「確かに、一度も海賊の船を見なかつたな」

「この状況が続けばいいのですがね。ともあれ、トワイヌも商いに精を出しています。あなたを歓待するのだと張り切っていますから、遠慮なく楽しんでください。親しい者達も集まっていますよ」

すつ、と声を落とす。

「……肉親の死は悲しいものです。それでも、生きてこそ得られるものがある。亡くなった人々の分まで、あなたの生を謳歌してください。それが彼らへの供養になるのですから」

そういつて、ロレンスは元の調子に戻るのがだった。この御曹司、氣遣いまで完璧である。ありがたい友人を持ったもんだ、とつくづく思う。

俺のために集まってくれるのは、トワイヌにロレンス、リフ、それにブラックリーだという。リフは見習いから正式な修道士として昇格し、ブラックリーはいつも変わらずに郊外で研究に励んでいるそう。みんな元気そうで何より。

——さて。いまの俺は、ブラックリーのお眼鏡に叶うかな？

港に降り立つモステインを迎えた瞬間、ロレンスはため息を洩らした。

(この少年は、私を何度驚かせば気が済むんだろう)

最後に会った半年前には、父親である村長の使いとして、いたって事務的に雑務をこなして帰っていった。2年前の自由奔放さとは似ても似つかない生真面目ぶりに驚いたものだが、今回は一味も二味も違った。

覇気が段違いなのだ。

わずか11歳。体格こそ立派だが、顔つきや身のこなしには子供らしい“甘さ”が残っていた。海千山千の大人達がつけこむ隙を残していたために、祖父がフォローについて回る必要があった。

それがどうだ。わずか半年の間に、少年からは完全に甘さが抜け落ちていた。世の中の辛酸を舐め、苦境を味わい、鉄火場をくぐり抜けた戦士の風貌である。自分だけではない、多くの命を背負う責任を十二分に自覚した、おそるべきリーダーの資質が開花している。誇り高きグルニア貴族であるロレンスから見ても、少年の変貌は明らかだった。

お互いの無事を祝い、商会への道行きで近況を語り合う。そしてロレンスは知った。少年の味わった命のやり取りと、育んできた努力が水泡に帰する無力感。親のひさしを失いながら、ふたつの部族の運命を背負わされた重圧。そこから逃げることなく、状況改善のために一手、また一手と打ち続ける克己心。

逆境というのなら、彼の置かれた環境はまさしく当てはまる。ペラティ海賊には村の所在が明らかとなり、立ち退いた南の集落にも、このままではよからぬ輩が住み着く。村の内部も古株達がいなくなり、村を牽引してきた実力者達が全滅した。異なる文化で生きてきた者達との共生まで世話しなくてはならない。状況は限りなく劣勢である。

すべてが少年の糧になる。

目の前の障害が多ければ多いほど、モステインは強くなる。壁をひとつ破るたびに少年の魂は輝きを増していき、彼を頼りにする人々

の心を掴むのだ。聞けば、併合した集落の者達からも高い信頼を得ているという。当然だろう。目の前で50人からなる襲撃者を撃退した上に、落ち延びる先の村まで守り切ったのだから。

それに比べて、自分はどうか。

(置いていかれた)

遊んでいたつもりはない。トワイスの船に乗り、アカネイア大陸の都市を巡ることで見聞を広げていった。その土地の文化を知り、兵の練度を頭に叩き込み、多様な兵種(ユニット)の存在に思いを馳せた。同じ年に限らず、グルニア貴族としても頭一つ抜けた英才であると自他ともに認める。

目の前の現実はどうだ。

(認めよう。私は、一歩遅れた。先をいかれたのだ)

心が熱くなる。柄にもないと自嘲するには、自分はまだ若過ぎた。嫉妬も羨望も味わい尽くしてやろう。彼と対等たらんと誓った2年前の自分を裏切らないために。

動くときが来たのだ。ロレンスははつきりと自覚した。

アカネイア暦540年 モステイン 11歳(j)

宴の前。俺をひと目みたブラックリーは居ずまいを正し、しばらくの無言のあと、顔をほころばせて柔らかなハグをしてきた。背中に回された手がポン、ポン、と二度叩く。

「合格よ」

「いいのか?」

「二言は無いわ。あなたの背負った村と集落、その先に至るまで。ワーレン都市研究家・ブラックリーが面倒を見ましよう。やるとは思っていたけど、想像以上に早かったわね」

「それだけの経験をしたからな」

事情はロレンスから聞いていたのだろう。ブラックリーはそれ以上を聞かず、親指を立てて席へと戻っていった。スマートな人である。

歓迎会は親しい者達だけの交流ということもあり、終始なごやかな

ムードのままにお開きとなった。山海の珍味に新メニューの試作品が乗った食器を片づけて、元の清潔なテーブルに戻したところで俺達の本題が始まる。

村の総責任者としての俺。

商会の代表であるトワイス。

第三者としてアドバイザーを買って出たロレンス。

区画担当のブラックリー。

この四人が集まる以上、村の今後も話し合おうということになっていた。

そこでひとつのイレギュラーが発生する。

「私も同席して構いませんか？」

歓談中、ワインではなく白湯をたしなみつつ健啖家ぶりをアピールしていたリフ修道士が、商談への参加を表明したのである。てっきりこのまま帰路につくものだと思っていたので面食らってしまう。理由をたずねたら、これまた度肝を抜かれる答えが返された。

「あなたの村で教えを広めたいのです」

マジか。

いや、本気なのか。どきまぎしていると、さらに詳しく話してくれた。

「大勢の方が天に召されたと聞きました。人は過酷な環境に身を置かれたとき、死者の魂を慰める習慣がおろそかになるもの。誰かが代わって弔わなくてはなりません。私に任せてはいただけませんか」

……この人は、本物の聖職者なのだなぁと感心してしまう。ワールンにいれば、いくらでも栄達が望めるだろうに。

「あなたのそばにいれば、新メニューの開発にいち早く立ち会えるのではないかとも思いました」

感動した後でオチをつけるのはやめていただきたい。

26. 変わるべきはいま

アカネイア暦540年 モステイン 11歳(k)

「あなたの村はいま、転換期に来ているの」

最新の海図をテーブルに広げたブラックリーが、俺の村の位置にリバースの白駒を置いた。同様にワーレン、北の港、南の集落にも同じく白駒が置かれる。

「何十年、もしかすると何百年もの間、あなたのご先祖様は生き延びることだけを目的にしてきた。海賊の目につかないような生活を心がけてね。でも、これからは無理。すでにペラティ海賊があなたの村の位置を共有したでしょう。壊滅した南の集落を根城として、陸の活動を始めてもおかしくないわ。そんな環境で現状維持に留めることは死を意味する。そうよね、トワイスさん？」

「酷な話ですが、ブラックリーの予測の通りでしょう。アカネイア中から犯罪者が送られてくる以上、ペラティには常に人的資源が補充されてしまう。当然、彼ら全員が食べていけるだけの食料はなく、食い扶持を稼ぐために海賊となる。村や港にとっては、終わりのない防衛戦が延々と続くわけです」

……俺達の生きるこの世界は、賽の河原にテクスチャでも被せたまがい物ではなからうか。ひたすら石を積んでは完成寸前に邪魔が入って崩される、その繰り返しである。神に見捨てられたような救いの無さ。

そんな地獄をぶち壊すために、俺は来たのだ。

「ここまではいいわね？ このどうしようもない前提を踏まえた上で、大切な質問をするわ」

「——モステイン君。あなたは、村をどう変えたいの？」

答えはもう決まっている。

「みんなが安心して海に出られるようにする」

そのためには、何が要る？

「海賊と戦えるだけの兵と施設。それらを養える生活基盤。100人と少しの人口じゃ足りない。200人、300人？ もつとだ。どうしようもなく足りないんだよ、このままじゃ」

敵はペラティ海賊だけではない。海賊同士のツテで、いずれはガルダ海賊にも村の所在を知られるだろう。際限なく増えるふたつの組織を敵に回して、129人の村が何回襲撃に耐えられるのか。

選択の余地はない。俺達は否応なしに武器を取らざるを得ず、村を限界まで拡張しなくてはならないのだ。ド田舎にありがちな、見知らぬ他人を拒絶する精神なんぞ何の役にも立たない。そんなものここだわっていたら滅亡待ったなしである。

……それを説得するのが俺の仕事なんだけど。胃が痛くなるね。でもしようがない、やるって決めたんだから。他の誰でもない、俺が納得して決めたことだ。

「あなたも苦労したみたいね」

若干遠い目になりかけた俺を見て、ブラックリーが苦笑しながら頷いた。彼にも似たような経験があったのだろう。大勢の意見をまとめて、調整して、反対派を説得する。管理職の仕事なんてそんなものだ。

「でも、その必要はないかもしれない」

「というっ？」

「あなたが信頼を得たからよ。2年間の下地と、立て続けの激戦に勝利したという実績は誰にも否定できないわ。それに、これまで村を牽引してきた層が完全に消失したことで、あなたの意思がそのまま村の決定に直結するようになった。村社会という閉鎖環境においてはあり得ないことよ。奇跡といってもいい」

いまの村における主軸は完全に改革派である。保守派の中核ということになっていた老人達は戦死し、中堅にあたる大人達も俺の支持に回ってくれた。合流してきた南の集落の人々にいたっては、村が気を遣ってしまうくらいに腰が低い。もうちよつと意思表示してくれないと俺が後で困るのだが。主に仕事の面で。

士気も高い。俺とマックスが勝利した実績と、老人達がその身を犠

牲にして女子供を守った姿が生き残った人々の心を燃やしているからだ。海賊ごときに屈してたまるか。こと戦闘において、村はかつてないほどに団結している。

戦って死ぬのも辛い、ミナ達が奴隷になって売り飛ばされるなんて未来はノーセンキューだ。座して死を待つより、意地もプライドもかなぐり捨てて戦い抜いてくれるわ。村を出る際に俺が音頭をとって男達の決起集会を開いたところ、満場一致で賛同を得た。

つまるところ、村を根本的に変えたいと俺が宣言するのなら、いまが絶好のチャンスなのだ。知り合いとはいえ数十人の他人が入ってきたんだから、そこに新顔が増えたって大差はない。おらが村のグローバル化にはもってこいな状況というわけである。

方向性は決まった。

村の意思も問題ない。

「と、いうわけだから」

「協力よろしく、トワイスさん」

「……やはり、そうなりますか」

ワーレン有数の商家が眉間に皺を寄せる。わかっていただろうに、トワイス。商談の場所を提供するだけで終わるはずがないことぐらい。当然、あんたにも仕事を用意してある。

「2年前まで未開の原住民やってたド辺境の漁村に、人集めのツテもコネもあるわけないだろう。管理のノウハウも学ばないといけないのに」

「消臭炭とレシピの手数料、ずいぶんと色を付けたつもりですが」

コストに見合った分の義理は果たしている、と主張してくる。ローリスクでハイリターンをとる商人らしい算盤勘定だが、それではこちらが困るのだ。身銭を切ってもらわないと。だからさ、

「みんな幸せになろうよ」

海図の一点。開拓都市ガルダがあるとされる位置に、リバースの黒駒を力強く置いてやる。

「ガルダ海賊の南下阻止」

「！」

「北の港が破壊されたのは、防波堤がなかったか、もしくは機能しなかったからだ。俺達の村がその役割を負担してやる。もちろん、いますぐは無理だけどな。五年後、十年後の長い目で見てほしい」

ガルダ海賊がワーレン近海を荒らすには、どうしたって俺達の生きる島との境にある航路を下らなくてはならない。その入り口に軍港並の防衛施設を作ってしまったえば、ガルダ海賊はワーレンに南下できなくなる。幸か不幸か、俺達の村はうってつけの位置にあった。

当然、敵の攻撃が集中する。これまでのように生きのびることだけを優先するなら、そんな選択はできない。だが、もう事情が変わったのだ。敵に居場所を知られた以上、戦いからは逃げられない。そして、戦うためには二手、三手を打つ必要がある。

味方を増やす。これは俺達だけの問題ではない、ワーレンにも関わる公共事業なのだ、目の前の大商人に投資させる。ワーレンのバツクアップで建設し、人数を集めてもらおうじゃないか。

「もっと広げちゃいましょうか」

悪い顔になったブラックリーが、もうひとつ黒駒を置いた。ペラティ海賊のアジトとして疑われるペラティ王国の都市。それを覆うようにして、小さな白駒を立て続けに置いていく。

「南の集落の下にある、小さな島々。ここをまとめてペラティ海賊の監視台にしちゃえば、ペラティ海はもつと安全になるじゃない。いずれは北の港とも連携した貿易が可能になる。悪くないんじゃないかしら」

北の村と南の集落。このふたつを両海賊への牽制として、ワーレンをはじめとする商家の安全をつかさどる。

こんなプロジェクトを村ひとつで実行できるわけがない。負担してくれるパトロロンが必要不可欠になる。商会が傾くほどの一大事業になると計算したトワイスが、青ざめた顔で俺を凝視してきた。

「……利点は認めます。ワーレンの商人で、北の港が受けた被害を知らぬ者はいませんから。軌道にさえ乗れば、他の商家も参画してくるでしょう」

大勢の人間が生活するということは、衣食住をはじめとする商売の

成立に直結する。防衛を目的とした環境なら武器の職人も来るし、現地生産のためには鍛冶屋が雇われる。それは俺達が喉から手が出るほどに欲しい、鉄製品の生産技術に繋がるのだ。

しかし、と続く。

「金銭はいいのです。いや、良くはないのですが、この際それは構いません。事業に出費は付き物ですから。問題は人です。港の軍備を管理する責任者が必要になります。バーンズを撃退したモステイン殿は実績こそ申し分ないのですが、その……社会的な知名度が足りないかと」

ですよねー。

何十、何百と集められた人間を統率するのに、トップに立つのがぼつと出の馬の骨ではどうしようもない。ド田舎の漁村の村長、おまけに11歳のガキに喜んで従う兵隊がいるはずもなく、三日でポイコットされるか下克上に遭うのがオチである。その人選も頼ろうと考えていたのだが、自分で探す必要が出てきてしまった。

勢いが止まりかけた商談の場で、黙っていた少年が拳手をする。

「引き受けましょう」

「ロレンス様!？」

「私もそろそろ、人を使うという実績が欲しいのですよ。グルニアの家名をお貸しします。將軍の嫡子という触れ込みなら、傭兵達も就職を求めて集まるでしょう。見込みのある人材ならグルニアに紹介したいので、それは許可してください」

百人超を率いて戦える地位と、故郷グルニアへの人材斡旋。それらを見返りに、俺の元に来てくれるという。

「……いいのか?」

「私達是对等です。あなたが民を率いるのなら、私は兵を率いましょう。こういう役割分担も悪くはありません」

そういつて、目の前の貴公子が面白そうに笑うのである。

「私は経験を積み、あなたは政治に集中する。どちらにも理があり、益がある。それに、国に帰れば私も政治から逃げられません。あなたが何をして、何をしないかを見学すれば、将来への知見になるでしょう。

勉強させてもらいますよ、モステイン村長殿」

俺はリトマス試験紙か何かか。

ロレンスが名乗りを上げたことで、部下であるトワイスの逃げ場は完全に失われた。こうなってしまったら、主の安全のために彼も全力を注ぎ込まなくてはならない。自分の保身のために手ばかりでも起こせば、それが原因でロレンスの生死に関わる可能性が出てきてしまったのだ。

降参、といたげに、盛大な溜息をつく。

「……承知しました。今回の事業、トワイス商会の総力をもって請け負いましょう。ただし、ふたつ条件があります」

切り替わった顔は、生き馬の目を抜くワーレン商人にふさわしいものだった。

「ひとつ。先ほどお話したとおり、事業が軌道に乗った暁には、多くの商家が我も我もと押し寄せてくるでしょう。自分達も既得権益に入り込もうと、さまざまな手練手管を仕掛けてきます。金や資源、女に奴隷。あらゆる誘惑でもってモステイン殿や村人を懐柔するので、十分に気をつけてください。それらを含めた交渉の窓口を、私に一本化させてほしいのです。問題がなければ彼らとの席を用意しますが、そこに私も同席します」

集まってくる商人の中には詐欺師や山師もいるだろう。だが、純粹に商売をしたくて参加する者達も存在する。彼らを受け入れるか、追いつくかの判断を、自分ひとりに委ねるようにとトワイスは要求しているのだ。

これに関しては、トワイスという商人の善性を信じるしかない。村の近代化を助けてくれた恩人であり、ロレンスの部下である彼なら信用できるし、信頼もできる。多少のリスクは承知の上。俺にできるのは、黙って頷くことだけだ。

「ふたつ目は、ロレンス様の安全。難しいとは思いますが、モステイン殿には気にかけていただきたい。ロレンス様も、けして無理をなさらぬように。重ねてお願いいたします」

そういつて、深々と頭を下げるトワイスの姿は、どこまでもロレン

スを思いやる父のような親愛に満ちていた。

「多くの血が流れるでしょうね」

商談を見守っていたリフが、淡々と告げた。未来を見通すように静かな声だった。

「平和を手に入れるために戦う。同じ人間でありながら、手に手を取り合うことができずに争う。それを愚かと嘆くのは易き道でしょう。困難に遭いては、立ち向かうことが難き道。主のご加護がありますよ、私も微力ながら励みます。さしあたって、慰霊祭と傷薬の処方から始めましょうか」

商談は終わった。一夜明ければ、それぞれが自分に求められた役割のために動き出す。多くの者に別れを告げ、新しい生活に向けて準備を始める。目まぐるしいほどに日常が激変する。

『村を変えてやる』

祖父への誓いを果たすために、俺はこの晩、途方もなく大きな選択をした。あるかどうかもわからない未来に向けて、村という船の舵を切ったのだ。

後戻りはできない。

ただひたすらに、目の前の大海原を突き進むだけだ。